

城久遺跡群

-総括報告書-



喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

城久遺跡群

-総括報告書-

二〇一五年三月

喜界町教育委員会

2015年3月

喜界町教育委員会



城久遺跡群出土白磁



城久遺跡群出土カムイヤキ

序 文

この報告書は、国宝重要文化財等保存整備費補助金を活用し、平成18～21・25年度に実施した城久遺跡群の埋蔵文化財発掘調査及びこれまでの畠地帯総合整備事業（以下、畠総事業）（担い手育成型）城久地区の成果をまとめたものです。

本遺跡群は、平成14年度の畠総事業の確認調査開始以来、今年度で13年目になります。その間、古代～中世にかけての重要な成果が次々と見つかりました。本報告書はこれら出土物が物語る喜界島の歴史像を明らかにする貴重な成果になると考えられます。

今回の報告書によって、多くの方が城久遺跡群について御理解いただくとともに、今後とも広く文化財の保護に御理解と御協力をいただくことができましたら幸いです。

最後に、発掘調査や整理作業に従事していただいた町民の皆様はじめ、発掘調査から報告書作成にいたるまで御指導・御協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、御指導並びに玉稿を賜りました諸先生方、その他関係機関の方々に対し、深く感謝の意を表すとともにお礼申し上げます。

平成27年3月

喜界町教育委員会

教育長 積山 泰夫

例　　言

- 1 本報告書は、国宝重要文化財等保存整備費補助金による城久遺跡群の総括報告書である。
- 2 発掘調査は平成18～21・25年度に喜界町教育委員会が鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成は、喜界町教育委員会が平成18～21・25年度事業として鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと実施した。
- 4 本書に用いたレベル数値は絶対海拔高による。
- 5 遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。トレンチ図は250分の1、遺構は10分の1、遺物は3分の1を基本とする。
- 6 遺物番号は全て通し番号とし、本文及び挿図、図版番号とも一致する。
- 7 貿易陶磁器については、『太宰府条坊跡XV』(太宰府市教育委員会2000)、「沖縄における貿易陶磁研究」(瀬戸ほか2007)、「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」(森田 1982)、「13～14世紀の琉球と福建」(木下編 2009)を参考にした。
- 8 遺物の実測・トレースは、整理作業員の協力のもと野崎拓司・松原信之・安武憲史が行った。遺物写真撮影は、早田晴樹が行った。
- 9 第IV章自然科学分析については、鹿児島女子短期大学竹中正巳氏、第V章まとめ第2節については甲元眞之氏、第3節については石上英一氏に玉稿いただいた。
- 10 発掘調査・整理作業(当時)にあたっては、次の方々に御指導・御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

琉球大学教授池田榮史氏、文化庁記念物課調査官近江俊秀氏、鹿児島国際大学教授上村俊雄氏、熊本大学教授甲元眞之氏、文化庁記念物課主任調査官坂井秀弥氏、国立科学博物館人類史研究グループ長篠田謙一氏、伊仙町教育委員会主事新里亮人氏、鹿児島女子短期大学教授竹中正巳氏、太宰府市教育委員会文化財主任主査中島恒次郎氏、文化庁記念物課主任調査官樋宜田佳男氏

- 11 本書の執筆は澄田(第I章)・早田(第II章第1節・第2節、第V章第1節(7)鉄製品)・松原(第II章第3節・第III章)・野崎(第V章第1節・第4節)が担当した。編集は松原が担当した。
- 12 出土した遺物は喜界町埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画をしている。



第1図 道路位置図

目 次

卷頭カラー

序文

例言

遺跡位置図

目次

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過及び盛土保存に至る経過	3
第4節 盛土保存範囲と遺跡残存状況	5

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 城久遺跡群の調査概要	11

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査概要	13
第2節 半田口遺跡の調査成果	16
第3節 前畠遺跡隣接地・小ハネ遺跡隣接地の調査成果	21
第4節 大ウフ遺跡の調査成果	25
第5節 半田遺跡の調査成果	34
第6節 赤連遺跡の調査成果	38
第7節 小結	40

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 城久遺跡群トレンチ調査41T(半田遺跡)	
出土人骨	41
第2節 城久遺跡群を営んだ人々について	42

第Ⅴ章 まとめ

第1節 遺構・遺物からみた城久遺跡群	43
第2節 考古学から見える城久遺跡群	56
第3節 城久遺跡群の歴史的評価の前提 -日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿-	60
第4節 総括	77

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	38
第2図 城久遺跡群位置図	6
第3図 主な島内遺跡位置図	9
第4図 城久遺跡群確認トレンド位置図	15
第5図 半田口遺跡トレンド位置図	16
第6図 1 T (半田口遺跡)	17
第7図 2 T (半田口遺跡)	18
第8図 3 T (半田口遺跡)	18
第9図 4 T (半田口遺跡)	18
第10図 8 T (半田口遺跡)	18
第11図 4 T (半田口遺跡)出土遺物	19
第12図 8 T (半田口遺跡)出土遺物	20
第13図 前畠遺跡・小ハネ遺跡トレンド位置図	21
第14図 9 T～16 T (前畠遺跡隣接地)	22
第15図 20 T (前畠遺跡隣接地)	22
第16図 10 T (前畠遺跡隣接地)出土遺物	23
第17図 13 T (前畠遺跡隣接地)出土遺物	23
第18図 15 T (前畠遺跡隣接地)出土遺物	24
第19図 20 T (前畠遺跡隣接地)出土遺物	24
第20図 大ウフ遺跡トレンド位置図	25
第21図 29 T (大ウフ遺跡)	26
第22図 29 T (大ウフ遺跡)出土遺物	27
第23図 30 T (大ウフ遺跡)	28
第24図 30 T (大ウフ遺跡)出土遺物	28
第25図 32 T (大ウフ遺跡)	29
第26図 32 T (大ウフ遺跡)出土遺物	29
第27図 34 T (大ウフ遺跡)	30
第28図 34 T (大ウフ遺跡)出土遺物	30
第29図 35 T (大ウフ遺跡)	31
第30図 36 T (大ウフ遺跡)	31
第31図 35 T (大ウフ遺跡)出土遺物	31
第32図 36 T (大ウフ遺跡)出土遺物	31
第33図 37 T・38 T (大ウフ遺跡隣接地)	32
第34図 38 T (大ウフ遺跡隣接地)出土遺物	32
第35図 半田遺跡トレンド位置図	34
第36図 40 T (半田遺跡)	35
第37図 41 T (半田遺跡)	35
第38図 41 T (半田遺跡)土坑墓5号	35
第39図 41 T (半田遺跡)土坑墓5号 A・B・C人骨	36
第40図 41 T (半田遺跡)土坑墓5号D人骨	37
第41図 41 T (半田遺跡)出土遺物	37
第42図 赤連遺跡トレンド配置図	38
第43図 42 T (赤連遺跡)	39
第44図 43 T (赤連遺跡)	39
第45図 44 T・45 T (赤連遺跡)	39
第46図 46 T (赤連遺跡)	39
第47図 43 T (赤連遺跡)出土遺物	39
第48図 44 T (赤連遺跡)出土遺物	39
第49図 城久遺跡群出土陶器	43
第50図 土師器器種内訳	44
第51図 城久遺跡群遺構・包含層出土資料(1)	44
第52図 城久遺跡群遺構・包含層出土資料(2)	45
第53図 奄美・城久遺跡群出土土師器	47
第54図 城久遺跡群出土滑石混入土器	48
第55図 城久遺跡群出土鉄製品	50
第56図 城久遺跡群出土ガラス玉	50
第57図 半田口遺跡掘立柱建物跡出土状況	51
第58図 城久遺跡群土坑墓変遷図	53
第59図 燃土跡分類一覧	55
第60図 花尾神社(土庇付建物)	58

表 目 次

第1表 主な島内遺跡地名表	8
第2表 城久遺跡群発掘調査一覧	12
第3表 城久遺跡群試掘・確認トレンチ調査一覧	14
第4表 4T（半田口遺跡）出土遺物観察表	19
第5表 8T（半田口遺跡）出土遺物観察表	20
第6表 半田口遺跡・半田口遺跡隣接地トレンチ 出土遺物集計表	20
第7表 10T（前畠遺跡隣接地）出土遺物観察表	23
第8表 13T（前畠遺跡隣接地）出土遺物観察表	23
第9表 15T（前畠遺跡隣接地）出土遺物観察表	24
第10表 20T（前畠遺跡隣接地）出土遺物観察表	24
第11表 前畠遺跡隣接地トレンチ出土遺物集計表	24
第12表 29T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	27
第13表 30T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	28
第14表 32T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	32
第15表 34T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	32
第16表 35T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	33
第17表 36T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	33
第18表 38T（大ウフ遺跡）出土遺物観察表	33
第19表 大ウフ遺跡・大ウフ遺跡隣接地トレンチ 出土遺物集計表	33
第20表 41T（半田遺跡）出土遺物観察表	37
第21表 半田遺跡トレンチ出土遺物集計表	37
第22表 43T（赤連遺跡）出土遺物観察表	40
第23表 44T（赤連遺跡）出土遺物観察表	40
第24表 赤連遺跡トレンチ出土遺物集計表	40
第25表 城久遺跡群出土遺物一覧	43
第26表 城久遺跡群遺構・包含層検討資料	44
第27表 城久遺跡群土師器分類状況	45
第28表 奄美・喜界土師器出土状況	46
第29表 渕石混入土器分類状況	48
第30表 布目庄痕土器分類状況	49
第31表 城久遺跡群出土鉄製品分類状況	50
第32表 城久遺跡群出土土坑墓一覧表	54
第33表 焼土跡分類状況	55

図 版 目 次

図版 1	81	35 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況	
城久遺跡群遠景		36 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況	
図版 2	82	37 T (大ウフ遺跡隣接地) 遺構検出状況	
山田半田遺跡より奄美大島を望む		38 T (大ウフ遺跡隣接地) 遺構検出状況	
山田半田遺跡盛土保存範囲空中写真			
図版 3	83	図版 8	88
半田口遺跡より東シナ海を望む		半田遺跡調査前風景	
3 T (半田口遺跡) 遺構検出状況		41 T (半田遺跡) 遺構検出状況	
6 T (半田口遺跡) 遺物図状況		41 T (半田遺跡) A～D人骨検出状況	
8 T (半田口遺跡隣接地) 遺構検出状況		41 T (半田遺跡) A～C人骨近景	
8 T (半田口遺跡隣接地) 輪の羽口出土状況		竹中正巳氏 41 T 人骨調査風景	
図版 4	84	42 T・43 T (赤連遺跡) 調査前状況	
前畠遺跡より百之台を望む		43 T (赤連遺跡) 遺構検出作業状況	
9 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出作業状況		図版 9	89
9 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況		42 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
10 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (1)		43 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
10 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (2)		44 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
図版 5	85	45 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
15 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (1)		46 T～48 T (赤連遺跡) 調査前風景	
15 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (2)		46 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
16 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況		47 T (赤連遺跡) 遺構検出状況	
20 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況		石上英一氏・甲元真之氏指導風景	
9～15 T (前畠遺跡隣接地) 調査前風景			
23 T (小ハネ遺跡隣接地) 調査風景		図版 10	90
28 T (小ハネ遺跡隣接地) 調査風景		半田口遺跡確認トレンチ出土遺物	
27 T・28 T (小ハネ遺跡隣接地) 調査風景			
図版 6	86	図版 11	91
大ウフ遺跡より東シナ海を望む		前畠遺跡確認トレンチ出土遺物	
29 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況			
30 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (1)		図版 12	92
30 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (2)		大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物 (1)	
32 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (1)			
図版 7	87	図版 13	93
32 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (2)		大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物 (2)	
34 T (大ウフ遺跡) 調査前風景			
34 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況		図版 14	94
		大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物 (3)	
		半田遺跡確認トレンチ出土遺物	
図版 15	95	図版 15	95
		赤連遺跡確認トレンチ出土遺物	

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（以下、県農政部）は、大島郡喜界町城久・瀧川集落地内などにおいて、畑地帯総合整備事業（以下、畑地事業）（城久地区）を計画し事業区域内の埋蔵文化財の有無について、喜界町教育委員会（以下、町教育委員会）に照会した。これを受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）と町教育委員会が平成11年に分布調査を実施したところ、事業区域内に複数の遺物散布地（山田中西遺跡・山田半田遺跡・前畑遺跡など）が確認された。この分布調査の結果をもとに、県農政部、鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）、町教育委員会は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施することとなった。確認調査は町教育委員会が調査主体となり平成14年度から実施している。これらの調査を進める中で南西諸島では初見となる重要な遺構・遺物が次々発見され、遺跡の取り扱いについて保存と開発との調整を図る必要が生じてきたことから、平成17年6月に町教育委員会と鹿児島県農政部（以下、県農政部）、鹿児島県教育庁文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、この時点まだ本調査を実施していない半田口遺跡などの4遺跡については確認調査を行い、特に重要な地区を確定し、保存について検討することとなった。これを受け、町教育委員会は文化庁の補助事業を活用し詳細な内容把握と範囲確認のための確認調査を実施することとなった。

調査は畑地事業対象区域及びその周辺地区における確認調査を第1次として平成18年度～平成21年度に実施し、畑地事業対象区域外への遺跡の広がりを確認するための追加調査を第2次として平成25年度に実施した。

第2節 調査の組織

平成18年度

調査等主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課

調査等責任者

喜界町教育委員会 教育長 晴永 清道

調査等企画者

喜界町教育委員会生涯学習課長 岡村進一郎

* 課長補佐 柏 勇

* 係長 岩松 利和

* 主事補 久 郁弥

調査等担当者

喜界町教育委員会中央公民館主査 清田 直敏

* 埋蔵文化財調査員 野崎 拓司

事務担当者

喜界町教育委員会中央公民館主査 竹内 功

調査等指導者

文化庁記念物課主任調査官 坂井 秀弥

鹿児島国際大学教授 上村 俊雄

鹿児島女子短期大学助教授 竹中 正巳

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 章込 秀人

平成19年度

調査等主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課

調査等責任者

喜界町教育委員会 教育長 晴永 清道

調査等企画者

喜界町教育委員会生涯学習課長 益 一幸

* 課長補佐 岩松 利和

* 主査 竹内 功

調査等担当者

喜界町教育委員会生涯学習課 埋蔵文化財係長 清田 直敏

喜界町教育委員会生涯学習課主事 野崎 拓司

事務担当者

喜界町教育委員会生涯学習課主査 竹内 功

調査等指導者

文化庁記念物課主任調査官 坂井 秀弥

熊本大学教授 甲元 慎之

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 章込 秀人

鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財研究員 馬龍 亮道

平成20年度

調査等主体者 喜界町教育委員会

企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課

調査等責任者

喜界町教育委員会 教育長 晴永 清道

調査企画者

喜界町教育委員会生涯学習課長 益 一幸

♪	課長補佐	岩松 利和	文化庁記念物課主任調査官	福宜田佳男
♪	主査	竹内 功	国立科学博物館	
調査等担当者				
喜界町教育委員会生涯学習課			人類史研究グループ長	篠田 謙一
埋蔵文化財係長	澄田 直敏		太宰府市教育委員会	
喜界町教育委員会生涯学習課主査	野崎 拓司		文化財課主任主査	中島恒次郎
喜界町教育委員会埋蔵文化財			鹿児島県教育庁文化財課	
発掘調査員	後藤 法宣		文化財研究員	川口 雅之
喜界町教育委員会埋蔵文化財			鹿児島県立埋蔵文化財センター	
発掘調査補助員	具志堅 亮		文化財研究員	馬龍 亮道
事務担当者				
喜界町教育委員会生涯学習課主査	竹内 功		平成25年度	
調査等指導者			調査等主体者 喜界町教育委員会	
文化庁記念物課主任調査官	坂井 秀弥		企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課	
琉球大学教授	池田 肇史		調査等責任者	
伊仙町教育委員会文化財主査	新里 亮人		喜界町教育委員会 教育長	晴水 清道
鹿児島県教育庁文化財課			(～H26.1.5)	
文化財主事	堂込 秀人		喜界町教育委員会 教育長	積山 泰夫
鹿児島県教育庁文化財課			(H26.1.6～)	
文化財研究員	川口 雅之		調査等企画者	
鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	官原 景信		喜界町教育委員会生涯学習課長	吉本 実
鹿児島県立埋蔵文化財センター第一調査係長	長野 真一		♪ 課長補佐	岩松 利和
鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財研究員	馬龍 亮道		調査等担当者	
平成21年度				
調査等主体者 喜界町教育委員会			喜界町教育委員会生涯学習課	
企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課			主幹兼埋蔵文化財係長	澄田 直敏
調査等責任者			喜界町教育委員会生涯学習課	
喜界町教育委員会 教育長	晴水 清道		主事	野崎 拓司
調査等企画者			喜界町教育委員会生涯学習課	
喜界町教育委員会生涯学習課長	益 一幸		主事	松原 信之
♪ 課長補佐	岩松 利和		喜界町教育委員会生涯学習課	
喜界町教育委員会中央公民館主査	竹内 功		主事	早田 晴樹
調査等担当者			喜界町教育委員会埋蔵文化財	
喜界町教育委員会生涯学習課			発掘調査員	岩元さつき
埋蔵文化財係長	澄田 直敏		喜界町教育委員会埋蔵文化財	
喜界町教育委員会生涯学習課学委員	野崎 拓司		発掘調査員	安武 寛史
喜界町教育委員会埋蔵文化財			喜界町教育委員会埋蔵文化財	
発掘調査員	後藤 法宣		発掘調査員	安柄 祐樹
事務担当者			喜界町教育委員会埋蔵文化財	
喜界町教育委員会中央公民館主査	竹内 功		発掘調査員	横山 幸平
調査等指導者			喜界町教育委員会埋蔵文化財	
			発掘調査員	照屋 真澄
			事務担当者	
			喜界町教育委員会生涯学習課	
			主幹兼埋蔵文化財係長	澄田 直敏
			調査等指導者	
			文化庁記念物課調査官	近江 俊秀
			琉球大学教授	池田 肇史

鹿児島県教育庁文化財課	馬龍 亮道	2 確認調査(平成19年度)
文化財主事		平成19年7月2日～平成20年3月24日まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査などの事業を実施した。調査箇所は、大ウフ遺跡である。これまで実施した確認調査のトレンチ位置などを基に、調査区域を設定し、通常のトレンチ調査よりも広範囲の約1,300m調査した(第2図)。その結果、古代から中世と考えられる掘立柱建物跡や焼土跡などの遺構や遺物を確認した。また、平成20年1月7日～平成20年2月2日まで整理作業も並行して実施した。
平成26年度		
調査等主体者 喜界町教育委員会		3 確認調査・整理作業(平成20年度)
企画・調整 喜界町教育委員会生涯学習課		平成20年7月1日～平成21年3月23日まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査などの事業を実施した。調査箇所は、半田口・大ウフ・赤連遺跡である。これまで実施した確認調査のトレンチ位置などを基に、調査区域を設定し、通常のトレンチ調査よりも広範囲の約950m ² 調査した(第2図)。その結果、古代から中世と考えられる土坑や焼土跡などの遺構や遺物を確認した。また、平成20年9月16日～平成21年3月13日まで整理作業も並行して実施した。
調査等責任者		4 整理作業(平成21年度)
喜界町教育委員会 教育長 積山 泰夫		平成21年4月1日～平成22年3月26日まで喜界町教育委員会が調査主体となって平成18年度から行ってきた町内遺跡発掘調査の整理作業を実施した。遺物洗浄・注記・接合・実測等を行い報告書を刊行する予定であったが遺跡の評価などを含めさらなる分析や検討を行う必要性について、専門家の指導などがあり、刊行は次年度以降とすることとなった。
調査等企画者		5 確認調査・整理作業(平成25年度)
喜界町教育委員会生涯学習課長 岩松 利和		平成25年5月15日～平成26年3月13日まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査などの事業を実施した。調査は、遺跡群の範囲を確認するため半田口・大ウフ・前畠遺跡の隣接地などを約500m ² 調査した(第2図)。その結果、從来想定していた範囲よりも遺跡群が広がる可能性が出てきた。また、平成25年10月1日～平成26年3月14日まで整理作業も並行して実施した。
調査等担当者		6 試掘・確認調査・報告書刊行(平成26年度)
喜界町埋蔵文化財センター 主幹兼埋蔵文化財係長 清田 直敏		平成26年4月1日～平成27年3月まで喜界町教育委員会が調査主体となって平成18年度から平成21年度までと平成25年度に行った町内遺跡発掘調査の整理作業を行い報告書を刊行した。また、平成27年2月～3月にかけては、川嶺地区などの町内遺跡試掘・確認調査を併せて実施した。
喜界町埋蔵文化財センター 主事 野崎 拓司		
喜界町埋蔵文化財センター 主事 松原 信之		
喜界町埋蔵文化財センター 主事 早田 晴樹		
喜界町埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査員 岩元さつき		
喜界町埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査員 安武 憲史		
喜界町埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査員 安柄 柚樹		
喜界町埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査員 照屋 真澄		
事務担当者		
喜界町埋蔵文化財センター 主幹兼埋蔵文化財係長 清田 直敏		
調査等指導者		
文化庁記念物課調査官 近江 俊秀		
鹿児島県教育庁文化財課 馬龍 亮道		
文化財主事		

第3節 調査の経過及び盛土保存に至る経過

1 確認調査(平成18年度)
 平成18年7月3日～12月22日まで喜界町教育委員会が調査主体となって確認調査などの事業を実施した。調査箇所は、半田口・大ウフ・半田遺跡である。本調査に先立って実施していた確認調査のトレンチ位置などを基に、調査区域を設定し、遺構の密度や内容のより詳細な把握を目的として通常のトレンチ調査よりも広範囲の約2,100m²調査した(第2図)。その結果、古代から中世と考えられる掘立柱建物跡や土坑墓などの遺構や遺物を確認した。なお、当初より保存範囲の選定を目的としていたため、遺構については表土直下での検出作業にとどめ、遺構は完掘していない。以後も同様である。

少なく盛土工法による保存は難しいとされていたため、調査を開始した平成15年度は、本調査に着手した。翌、平成16年度も同様の計画で調査を継続していくが、調査を継続するにつれ、約1,600基ものビットとともに、島外からの輸入品である輸入陶磁器をはじめ本土系の土師器、鹿之島で生産されたカムイヤキ、滑石製石鍋や鉄滓、フイゴの羽口など南西諸島では他に類例があまりない重要な発見が相次いだ。これらの成果を受け平成17年3月5日には、城久遺跡群に関する初めてのシンポジウムが九州国立博物館誘致推進本部と喜界島郷土研究会の主催で、琉球大学考古学研究室の協力の下、本町で開催され注目を浴びた。こうした中、平成17年度に調査を実施した山田半田遺跡で掘立柱建物跡が集中して検出され、その中には南西諸島ではこれまでに類を見ない大型建物跡も確認され、城久遺跡群の中核部分の発見かと多くの研究者の注目を集めた。

こうした状況から、同年8月には町教育委員会、県文化財課、県農政部、町産業振興課が協議を行い、山田半田遺跡の中核部分と思われる箇所を含めた約8,000mを盛土保存することが決定した。これは、シンポジウム開催などにより、農

家を含めた地域住民更には町民の埋蔵文化財に対する関心の高まりと開発部局の理解に加え、工事箇所内で盛土対応可能な土量が確保できたという幸運が重なっての結果である。

その後もこのよう経過の中、平成18年度からは文化庁補助事業を導入し、埋蔵事業地区及びその周辺についての確認調査を継続し、遺跡の保護と開発事業との調整をさらに進めることとなった。また、本調査対象地区においても、重要な遺構・遺物が次々に発見されていく中、保存に関する協議を幾度となく重ねていった。また、平成19年2月10～12日には、奄美市と喜界町の2会場で琉球大学池田栄史教授（文部科学省科学研究費）主催による「古代・中世の境界領域」と題してのシンポジウムも開催された。

この他、来島した多くの研究者に町民向けの講演をしていただきたり、貴重な調査事例は報道機関への記者発表や現地説明会を行うなどの取り組みを重ねて行っていった結果、地域住民や開発部局の理解が得られ前畠遺跡の石敷き遺構周辺や大ウフ遺跡の炉跡集中箇所の周辺部分、半田遺跡の約半分、半田遺跡のはば全域の約60,000mを盛土工法などによる保存がはかられた。



シンポジウム「古代・中世の境界領域」



総合的な学習の時間を活用した講演会



半田遺跡現地説明会



発掘体験風景

第4節 盛土保存範囲と遺跡残存状況

城久遺跡群は喜界島の中央部にある城久集落を取り巻くように標高90m～160mの部分にかけて広がり、奄美大島など周辺海域がよく眺望できるところに立地している。山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畠・大ウフ・半田・赤連遺跡の8遺跡を確認しているが、これまでの確認調査などの結果から空間的に隣接していることや出土した遺物組成がほぼ同じ事などから密接な関係を持った一連の遺跡と評価し城久遺跡群と総称している。この「グスク（城久）」という名称は集落名からとったもので、沖縄の首里城・今帰仁城などのような城塞の遺跡としてこの遺跡名称としているわけではない。

総遺跡面積約130000m²のうち、保存がはかれたのは60,000m²である（第2図）。

以下は盛土保存かはかられた箇所の残存状況について概略を述べる。

（1）山田半田遺跡

遺跡面積約31,000m²のうち約12,000m²を盛土工法などで保存している。これらの範囲は、遺跡群内の他とは様相が異なり、建物跡の密集が認められず、規格性の高い建物跡が整然と並ぶような状況であった。その中には、3間×2間の柱穴の四方を33基の柱穴で取り囲む遺跡群内で最大規模の建物跡がある。この建物の柱痕跡が残る柱穴から白磁が出土しており、11世紀後半から12世紀代の中心的な役割を果たしていた

地区と考えている。

（2）半田口遺跡

遺跡面積約30,000m²のうち約9,000m²を盛土工法で保存している。これらの範囲の近くには、遺跡群内では確認事例の少ない古代の様相を示す建物跡や土坑が確認されている他、11世紀後半から12世紀代のものと思われる四面庇の建物跡を複数確認している。山田半田遺跡の保存がはかられた箇所とも隣接しており、同様の遺構が展開している可能性が高いものと考えている。

（3）前畠遺跡

遺跡面積約8,500m²のうち約3,000m²を盛土工法で保存している。拳大の石灰岩礫を敷き詰めた最大長約50m、幅2~4mの石敷遺構を含めたその周辺区域などを保存している。出土遺物から中世の時期の遺構と推定している。

（4）大ウフ遺跡

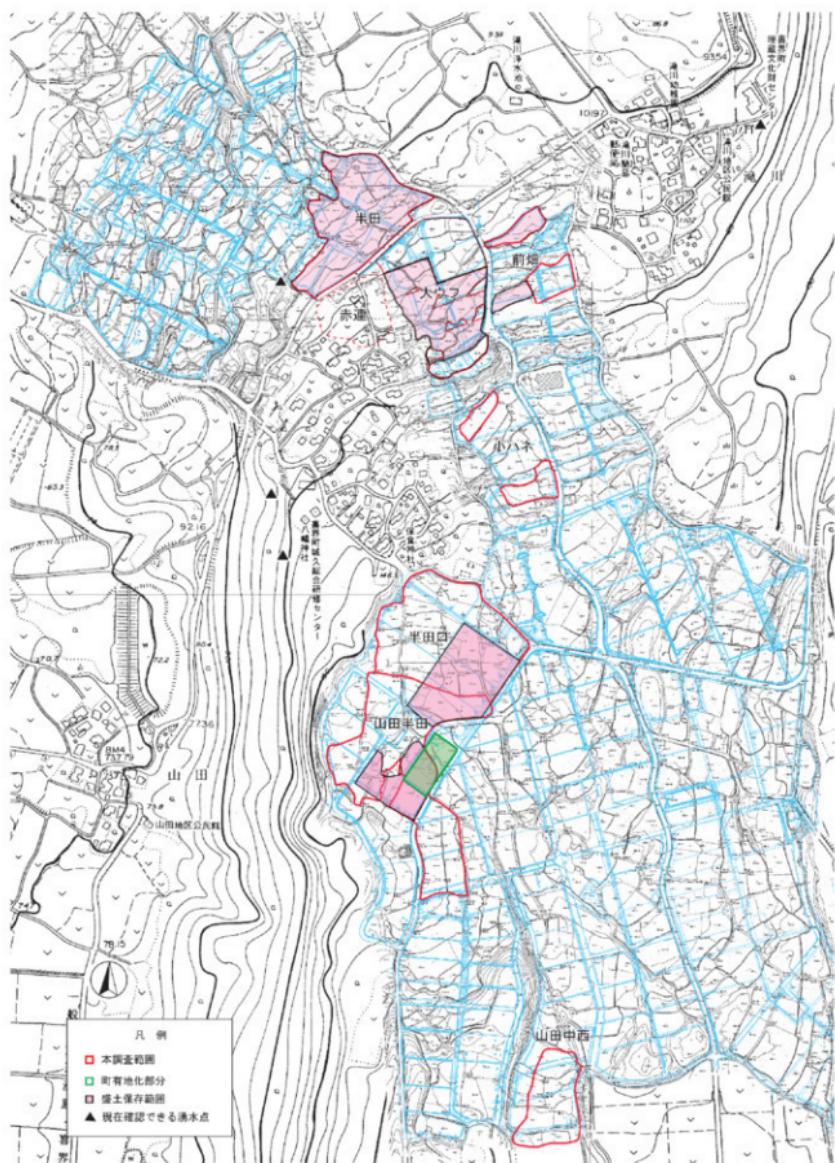
遺跡面積約24,000m²のうち半分を超える約13,000m²を盛土工法で保存している。本調査で南西諸島では喜界島のみの事例となる12世紀代の製鉄炉が確認され、その周辺では鍛冶炉跡も集中していた。また、柱穴内出土遺物や遺構の重複関係などから9世紀から10世紀頃や11世紀前半の建物跡を確認したり、溝状遺構を多く配し、沖縄県読谷村吹出原遺跡で類似化された吹出原型建物跡の母屋と倉庫のセット関係と類似した建物跡など13世紀以降の様相を示す区域の隣接地を保存した。



山田半田遺跡盛土保存地区（町所有地）



大ウフ遺跡盛土保存地区



第2図 城久遺跡群位置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

日本列島の南西端に位置し、九州から台湾島まで約1200kmに渡って弧状に連なる島嶼群を琉球弧と呼ぶ。

琉球弧は、北から大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島の大さく6つの島嶼群に分かれれる。気候的には大隅諸島を除いて亜熱帯区に属している。また、地形・地質学的視点からトカラ海峡と慶良間海裂(宮古凹地)を境にして北琉球、中琉球、南琉球に区分されてい

る。

琉球弧の島々は隆起石灰岩に覆われている標高の低い低島と火成岩などからなる標高の高い高島に分けられる。また、琉球弧の西側を沿うようにして暖流である黒潮が流れおり、トカラ海峡を通り、太平洋に抜ける流路をとっている。

喜界島は奄美諸島、沖縄諸島と同じ中琉球に属しており、低島にあたる島である。鹿児島県本土から南へ約380km、沖縄本島から北へ約330km、奄美大島から東へ約25kmの北緯28度19分、東経130度線上の太平洋と東シナ海の洋上に浮かぶ島である。1島で1町をなし、北東～南西方向を長軸に14km、北東部から南西部に向けて次第に島幅を広げ最大幅6.5km、周囲48.6km、面積56.9km²の島である。

概して平坦な隆起サンゴ礁の島であり、巨視的に見て4段の海岸段丘が形成されている。島内での最高所は中央東側にある百之台で、標高は211mである。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し、広い段丘地形が見られる。これに對して南東部は急峻な200mあまりの崖が切り立ち、海岸線に沿ってわずかな平坦地が見られるだけである。

本島の基盤をなしているのは、新生代新第三紀鮮新世の島尻層群で、琉球石灰岩、志戸桶層、隆起サンゴ石灰岩、砂丘が上層を形成している。石灰岩の上にはそれが風化したマージと呼ばれる暗赤褐色土層が堆積し、島の大部分を覆っている。島の大部分が多孔質のサンゴ礁石灰岩に厚く覆われてゐるため、河川の発達は乏しく用水のほとんどは地下水や湧水に依存している。また、隣接する奄美大島にはハブが生息するが、喜界島にはハブは生息していない。奄美諸島内では他に沖永良部島、与論島にも生息していないが、これらの島はいずれも標高の低い低島である。

海岸線は掘削からなっており、砂浜が広がる場所は少なく、また、港として利用できる場所も限られている。代表的な港としては、湧、早町、志戸桶、小野津があり、各集落では港の後背地に砂丘が形成されている。喜界島では砂丘がよく發達しており、特に島の西部に多く見られる。砂丘上では、縄文時代から近世までの遺物が採取でき、古くから人々の生活が営まれていたことをうかがい知ることができる。

氣候は亜熱帯氣候で年平均気温22.4℃と、年間を通じて温

暖であり、年間の降水量は2,200mmに達する。全島にガジュマルをはじめとする亜熱帯性植物が自生し、島の基幹作物であるサトウキビ畑が広がっている。12月後半から2月にかけては冬の季節風が吹きつけ、最大風速が秒速10mを超えることがある。この時期は悪天候が続き、海上交通が途絶えやすい。

城久遺跡群は山田中西、山田半田、半田口、小ハネ、前畠、大ウフ、半田、赤連遺跡の8遺跡の總称であり、島内で最も標高の高い城久集落を取り巻くように所在する(第2図)。城久遺跡群が立地する場所は島内で二番目に標高の高い海岸段丘(標高90~160m)の縁辺部に展開し、周囲が急崖に囲まれているところである。遺跡群からは奄美大島の鳥島と、奄美大島と喜界島を隔てる東シナ海が一望できる。遺跡周辺に河川はないが、湧水点がいくつか点在する。また、城久集落に隣接する滝川集落内には島内でも有数の湧水量を誇る滝川の泉がある。

第2節 歴史的環境

喜界島における考古学的研究は、戦前は昭和6年の重野豈吉による荒木貝塚の発見に始まり、三宅宗悦による湧貝塚、手久津久貝塚の報告がある。戦後においては、昭和30年代に九学会連共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ、荒木農道遺跡、荒木小学校遺跡、湧天神貝塚、伊実久歟島神社貝塚、七城などが紹介されている。

島内一番古い遺跡は縄文時代のものであり、大多数の遺跡が古代・中世に属している。また、中世における瀬氏や平家にまつわる伝承や地名が数多く残っており、それに関する史跡もいくつかみられる。

以下、島内及び島外における主な遺跡について研究史を踏まえながら述べることとする。

1. 縄文時代

島内における縄文時代早期～前期の遺跡としては、総合グラウンド遺跡と赤連遺跡がある。総合グラウンド遺跡では3層の貝層が確認されており、土器や石器が出土している。土器は口縁端部に划目があり、両端の尖った施文具による連続刺突文と4~6条の横条線が交互に施された砲弾形の器形をなす大型の深鉢や、4条程度を1単位として押し引き条線が施される砲弾形の小型のものがある。大型土器に付着していた煤を放射性炭素年代測定にかけたところ、約7,000年前の数値が出ている。また、県立喜界高等学校校庭拵張工事に伴い出土した土器は河口貞徳により赤連系土器と命名されている。

つづく縄文時代中期であるが、この時期にあたる遺跡は少

なく、喜界島における当該期の様相はよくわかっていない。

縄文時代後期～晩期の遺跡としては、宇宙上層式期の住居跡群やかまび状造構が確認されたハンタ遺跡がある。遺物は面織西洞式・喜念1式・宇宙上層式などの土器と、石斧・敲石・クガニイシなどの石器がある。また、平成16年には喜界町役場新庁舎工事に伴い、見付山遺跡の発掘調査が行われた。縄文時代晩期頃の土器・石器・黒曜石などが出土している。

縄文時代の遺跡からは多量の石器が出土しており、ほとんどのものが砂岩や花崗岩を石材としている。喜界島は最節で触れたように隆起サンゴ礁の島で、島内には石器としての使用に耐えうる石材は産出しないとされる。これら石器や石材は他の地域から持ち込まれたものと推察される。

2. 弥生～古墳時代併行期

弥生時代の遺跡は発掘調査は行われていないが、分布調査などで荒木小学校遺跡などの数遺跡が確認されている。

古墳時代併行期の遺跡には昭和60年に調査が行われ、兼

久式土器や貝斧などが出土した先山遺跡などがある。

しかし、この時期については確認されている遺跡が少ないことと、本格的な調査が行われていないこともあり、弥生～古墳時代併行期の喜界島の様相は判然としない。

3. 古代・中世

この時期になると弥生時代～古墳時代併行期に比べ、遺跡の数が急増する。

これまでに発掘調査が実施された遺跡としては昭和63年に鳥中B遺跡が、平成4年にオン畑・巻畑B・巻畑C遺跡、平成5年に前ヤ遺跡、平成6年に提リ遺跡、平成18年に早地遺跡などがある。いずれも小規模な調査面積ではあるが、土師器・須恵器・カムイヤキ・龍泉窯系青磁・白磁・滑石製石鍋などが出土している。これらの遺跡からは奄美在地の土器である豪久式土器はほとんど出土していない。それは本報告の城久遺跡群においても同様である。

第1表 主な島内遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	主な遺構・遺物	備考
1	城久遺跡群	喜界町久坂ほか	海岸段丘	古代～中世	獨立柱建物跡、土坑墓、伊跡、土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄痕土器、灰陶陶器、白磁、初期豪久式土器・須恵器・白磁・滑石製石鍋、カムイヤキ・龍泉窯系青磁・白磁・滑石製石鍋など	平成 14・15・17・18・19・20年度実地調査、平成14・15・16・17・18・19・20年度本調査
2	赤津	喜界町赤津	海岸段丘	縄文	赤連系土器	従者界高校
3	鴻天神	喜界町鴻	海岸段丘	縄文	土器、石器、貝製品、獸骨	
4	綜合グランド	喜界町鴻	砂丘	縄文	土器、石器、貝、獸骨	
5	竿ヶ	喜界町鴻	海岸段丘	縄文		削平により消失した可能性
6	荒木貝塚	喜界町荒木	低地	縄文	石器、貝	
7	先山	喜界町溝原	海岸段丘	縄文～近世	圓錐形底式・豪久式土器、石器、貝、獸骨	昭和61年度調査
8	平原森	喜界町早原	山頂	中世	壇模・形状: 200 × 200 壇郭	
9	後田	喜界町塙通	海岸段丘	縄文		削平により消失した可能性
10	水口	喜界町塙通	海岸段丘	縄文		削平により消失した可能性
11	堀り	喜界町塙通	海岸段丘	古代～中世	須恵器、カムイヤキ、白磁、青磁、滑石製石鍋、石器、獸骨	平成6年度調査
12	七城	喜界町志戸橋	台地	中世	壇模・形状: 200 × 200 壇郭	
13	オン畑	喜界町小野津	海岸段丘	古代～近世	獨立柱建物跡、伊跡、溝状遺構、カムイヤキ、铁漿	平成4年度調査
14	巻畑C	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器、カムイヤキ、滑石製石鍋	平成4年度調査
15	巻畑B	喜界町小野津	海岸段丘	古代～中世	土師器、須恵器、滑石製石鍋、罐の羽口、铁漿	平成4年度調査
16	ハンタ	喜界町西日	海岸段丘	縄文	円底鉢群、かまと状遺構、須恵器・豪久上層式土器、土製品、石器、カムイヤキ、青磁	昭和61年度調査
17	飛ヤ	喜界町島中	海岸段丘	古墳～中世	青磁、カムイヤキ	平成5年度調査
18	川田面	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器、土師器、白磁、青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、染付	平成5年度調査
19	上田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	粗穴、土器、青磁、カムイヤキ	平成5年度調査
20	向田	喜界町島中	海岸段丘	縄文～中世	土器、土師器、白磁、青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、染付	平成5年度調査
21	鳥中B	喜界町島中	海岸段丘	古代～近世	土器、内裏土師器、須恵器、白磁、青磁、罐の羽口、铁漿、石器	昭和63年度調査
22	和草地	喜界町荒木	海岸段丘	縄文～近代	圓錐形底式・豪久式・龍泉窯系青磁、白磁、铁器、罐の羽口、铁漿、石器、無柄、鋸骨、染付、壇模	平成 18 年度調査
23	中堆	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	獨立柱建物跡、土坑、燒土跡、龍泉窯系青磁、石器、铁製品、貝製品、鐵鍊、罐の羽口など	平成 23・24・26 年度本調査
24	川尻	喜界町手久津久	低地	縄文～近世	大型円形土坑、獨立柱建物跡、土坑墓、土坑、燒土跡、白磁、カムイヤキなど	平成 23～26 年度本調査
25	崩リ	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	堅六穴状建物跡、獨立柱建物跡、土坑墓、土坑、燒土跡、白磁、罐の羽口など	平成 23・24 本調査
26	川寺	喜界町手久津久	海岸段丘	縄文～中世	堅六穴状建物跡、獨立柱建物跡、土坑墓、土坑、燒土跡、龍泉窯系青磁、白磁、罐の羽口、鐵鍊など	平成 24～26 年度本調査



第3図 主な島内遺跡位置図

また、遺跡からの出土品ではないものの、喜界島小野津集落の八幡神社には「五つのカメ」の伝承とともに現在まで伝世されてきた陶器がある。内2つは所在不明となっているが、残り3つは現存しており、それぞれ越州窯系青磁刻花文水注、須恵器双耳長胴瓶、褐釉双耳注口付盃である。いずれも10~12世紀前後と推定されている。

一方、奄美大島に目を向けると、喜界島の対岸、笠利半島においては在地の土器である兼久式土器が盛行する。土師器や須恵器も出土しているものの、壇入品の城をでないとされている。池畠耕一はこれらの調査成果を踏まえ、「喜界島は古代には九州本土と密接な関係をもっている可能性がある」と指摘している(池畠1998)。和野長浜金久遺跡、土盛マツノト遺跡、用見崎遺跡、須野アヤマル第2貝塚、万屋泉川遺跡、小湊フワガネク遺跡では兼久式土器とともに大量の夜光貝が出土している。特に小湊フワガネク遺跡では貝匙完形品が2点しか見られないことから、夜光貝は島外へ運び出される交易品であった可能性が考えられている。他に、交易を示す遺跡として宇椈村倉木崎海底遺跡があげられる。船体自体は未発見だが、多量の中国産陶器類が出土している。

〈参考・引用文献〉

- 喜界町 2000 「喜界町誌」
- 喜界町教育委員会 1987 「先山遺跡」 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 喜界町教育委員会 1987 「ハンタ遺跡」 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 喜界町教育委員会 1989 「島中B遺跡」 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 喜界町教育委員会 1987 「島中B遺跡Ⅱ」 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 喜界町教育委員会 1993 「オン畠遺跡・巻煙B遺跡・巻煙C遺跡・池ノ底散布地」 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2008 「荒木貝塚・和早地遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(119)
- 池畠耕一 1998 「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『列島の考古学』 渡辺誠先生還暦記念論集刊行会 澄田直敏・堂込秀人・池畠耕一 2003 「喜界町総合グランンド遺跡(弓道場)出土の土器」『鹿児島考古』第37号 鹿児島県考古学会
- 鹿児島県教育委員会 2006 「先史・古代の鹿児島 通史編」
- 太田陽子 1978 「琉球列島喜界島の完新世海成段丘」 地理学評論
- 町田洋・江波戸昭 1969 「薩南諸島の総合的研究」平山輝男編 第1編 地理的環境 明治書院
- 貝塚爽平ほか編 「4. 西南諸島」「日本の地形」

第3節 城久遺跡群の調査概要

城久遺跡群の発掘調査は、平成14年度の山田中西遺跡を皮切りに、これまで本調査と確認調査を並行して行ってきた。本調査については、山田中西遺跡を平成15・16年度に実施し、平成16・17年度と平成19年度に山田半田遺跡、平成18年度に小ハネ・前畠・半田遺跡、平成19年度と平成20年度に山田半田・半田口・大ウフ遺跡の調査を実施している。確認調査については、平成14年度から25年度まで、山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畠・大ウフ・半田・赤道遺跡で数次にわたりて実施した（第2表）。

発掘調査では、古代～中世の遺構・遺物が多数確認され、南西諸島では他に類を見ない大規模な集落跡であることがわかつてきている。これまで復元した掘立柱建物跡は484棟、土坑墓48基、土坑21基、炉跡28基などがあり、また、出土した遺物は越州窯系青磁や白磁、初期高麗青磁といった中国や朝鮮半島産の陶器のほか、本土系の土器類や須恵器、東美濃産灰釉陶器、北部九州産の滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキなどがあり、非在地的な様相が強いという特徴がある。

最も古い遺物は、山田半田遺跡で出土した8世紀代の須恵器の蓋であるが、出土数が少ない上に同時期の遺物は他になく、その様相は判然としない。山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畠・大ウフ遺跡からは9～12世紀頃の遺物が出土し、中でも11世紀後半～12世紀頃の遺物が多い。城久遺跡群の中でも最も標高の低い大ウフ・半田遺跡では、11世紀後半～15世紀頃に位置づけられる遺物が確認されており、その中でも標高の低い範囲には13～15世紀頃の遺物が多い傾向にある。遺跡群全体を見ると出土した遺物からは9世紀頃～15世紀頃までの時間幅が与えられるが、9～11世紀頃（Ⅰ期）と11世紀後半～12世紀頃（Ⅱ期）、13～15世紀頃（Ⅲ期）の3時期にピークがあると思われる。

以下、各遺跡について概略を述べる。

（1）山田中西遺跡

平成14年度に確認調査、平成15・16年度に本調査を実施した。調査面積は約6,000m²である。掘立柱建物跡を41棟復元し、土坑墓10基、炉跡3基、土坑3基、溝状遺構2条、柱穴約1,650基などを検出した。遺構は掘立柱建物跡を中心構成され、隣接するように複数の土坑墓が検出されている。土坑墓内には焼骨と共に白磁碗、白磁小皿、カムイヤキの小壺、ガラス玉などが見つかっている。

このほか、出土遺物は土器類・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・青磁・刀子・繩の羽口・鉄滓・石器などが出土し、中世の傾向を示すものが多い傾向にある。

（2）山田半田遺跡

平成14・15年度に確認調査、平成16・17・19・20年度に本調査を実施した。調査面積は約23,000m²である。掘立柱建物跡は113棟復元し、土坑墓8基、炉跡3基、土坑10基、焼骨と共に土坑20基、溝状遺構2条、柱穴約5,000基などの遺構が見つかった。出土遺物には、土器類・須恵器・兼久式土器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・灰釉陶器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・鉄製品・繩の羽口・石器などがある。

掘立柱建物跡は、奄美地域特有の1間×1間、1間×2間の掘立柱建物跡が多く見られ、前者には柱穴直径が1.2mと大きく、その四方を27本の柱穴によって囲む特殊な構造のものが1棟確認されている。また、柱穴直径が50cmを超える2間×2間の純柱の建物跡や2間×3間の掘立柱建物跡の四方に計33本の柱穴を配置する大型の建物がある。土坑墓は掘立柱建物跡に隣接するように検出されており、火葬骨とともに白磁碗・白磁組合子・カムイヤキ小壺・ガラス玉・銅製品・鉄製品などが見つかっている。

これらの遺構が集中する約12,000m²は盛土工法による保存が図られ、その一部は町有地化した。

（3）半田口遺跡

山田半田遺跡と隣接する遺跡であり、平成15～18年度に確認調査を行い、平成19年度～20年度に約15,000m²の本調査を実施した。掘立柱建物跡は97棟復元し、土坑墓5基、土坑6基、焼土跡10基などの遺構が見つかった。遺物は、土器類・須恵器・越州窯系青磁・白磁・青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・カムイヤキ・繩の羽口・石器などが出土している。

掘立柱建物跡は1間×2間が多くみられるが、2間×3間の掘立柱建物跡の四方に計21本の柱穴を配置する大型の建物などもある。土坑墓は、掘立柱建物跡に隣接するように見つかり、白磁小碗やカムイヤキ小壺、刀子などを伴っているもののが見つかっている。

これらの遺構が集中する約9,000m²は盛土工法による保存が図られた。

（4）小ハネ遺跡

平成17年度に確認調査を行い、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000m²である。掘立柱建物跡を33棟復元し、土坑墓6基、炉跡6基、土坑2基、焼土跡4基、溝状遺構4条、柱穴約1,700基、砂鉄混入ピット1基などの遺構が見つかった。土坑墓には、火葬骨と共に白磁碗・カムイヤキ小壺・ガラス玉などを伴っているものがある。このほか、遺物は土器類・須恵器・越州窯系青磁・布目圧痕土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土

器・轔の羽口・石器、鎌状鉄製品などが出土している。

(5) 前畠遺跡

平成17年度に確認調査を実施し、平成18年度に本調査を実施している。調査面積は7,000m²である。掘立柱建物跡は110棟復元し、土坑墓8基、炉跡3基、柱穴約4000基のほか石敷遺構が見つかった。遺物としては、土師器・須恵器・越州窯系青磁・布目庄廬土器・兼久式土器・白磁・青磁・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器・カムイヤキ・滑石製石鍋・滑石混入土器・轔の羽口・砂鉄・鎌状鉄製品、石器などが出土した。

石敷遺構は、拳大の石を敷き詰められた遺構で、残存部の大きさは最大長約47m・最大幅約5mである。出土した遺物から中世の時期に作られたものと想定できるが、城久遺跡群では前畠遺跡以外では見つかっていない遺構であり、用途・性格に関しては現在のところ不明である。この石敷遺構周辺約3,000m²は盛土工法による保存が図られた。

(6) 大ウフ遺跡

平成16・17年度に確認調査を実施し、平成19~21年度に約11,500m²の本調査を実施した。掘立柱建物跡を85棟復元しており、土坑墓8基、溝状遺構26条、焼土跡35基などのほか、砂鉄を集め集したピット状の土坑を検出している。遺物

については、土師器・須恵器・越州窯系青磁・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・龍泉窯系青磁・轔の羽口・砂鉄・鉄滓などが出土している。

土坑墓に関しては、藏骨器と考えられる須恵器を作う土坑墓や木棺墓と思われるものなど、城久遺跡群で初見となる事例が確認された。また、15m四方の範囲に11世紀後半~12世紀代と想定される鉄製・鍛冶関連遺構が20基ほどまとまって確認された。この時期前後の南西諸島において製鉄炉は現在確認されておらず、初めての事例となっている。

大ウフ遺跡の約半分である13,000m²が盛土工法による保存が図られた。

(7) 半田遺跡

平成16・17・18年度に確認調査などを実施し、古代末から中世の掘立柱建物跡5棟、土坑墓5基・溝状遺構・土坑・柱穴などの遺構を検出している。土坑墓の形状は全て土葬で、届葬の状態で検出している。いずれも明瞭な副葬品は確認できていない。遺物は、越州窯系青磁・兼久式土器・白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋・ガラス玉などが出土しているが、主体は13世紀以降の龍泉窯系青磁である。

半田遺跡については遺跡の大半である20,000m²が盛土工法による保存が図られた。

第2表 城久遺跡群発掘調査一覧

遺跡名	調査の種類	調査期間	調査面積	時代	遺構	遺物	調査主体
山田中西	確認調査	平成14年5月	60m ²	古代末~中世 5,900m ²	掘立柱建物跡(41)、土坑墓(10)、炉跡(3)、土坑(3)、燒土跡(3)、溝状遺構(2)、柱穴(6)ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、白磁、初期高麗青磁、新羅系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轔の羽口ほか	町教育委員会 課文化財課、町教育委員会
	本調査	平成15年5月~8月					
	本調査(通)	平成15年10月~12月					
山田半田	確認調査	平成15年5月~8月	22,700m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(113)、土坑墓(8)、伊跡(3)、土坑(3)、燒土跡を伴う土坑(20)、燒土坑(1)、溝状遺構(2)	土師器、須恵器、兼久式土器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、灰陶陶器、灰陶陶器、白磁、初期高麗青磁、新羅系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、青磁、漆器、鉄製品、鐵製品、轔の羽口、ガラス玉、轔の羽口、青磁、石器ほか	町教育委員会 町教育委員会
	本調査	平成15年4月~平成18年3月					
	本調査	平成16年6月~平成20年10月					
半田口	確認調査	平成15年2月~平成16年2月	2,500m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(97)、土坑墓(4)、土坑、燒土跡ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、白磁、初期高麗青磁、新羅系無釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轔の羽口ほか	町教育委員会 町教育委員会
	確認調査(通)	平成16年7月~平成18年2月					
	本調査	平成16年4月~平成20年3月					
小ハネ	確認調査	平成19年4月~平成19年3月	7,000m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(33)、土坑墓(6)、伊跡(6)、土坑(2)、燒土(4)、溝状遺構(4)、砂鉄混入ビット(1)ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轔の羽口ほか	町教育委員会
	本調査	平成20年2月~3月					
	本調査	平成20年4月~平成19年3月					
前畠	確認調査(通)	平成20年5月~平成26年2月	500m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(10)、土坑墓(8)、伊跡(3)、石敷遺構ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、兼久式土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轔の羽口、铁滓、砂鉄ほか	町教育委員会
	確認調査	平成20年2月~3月					
	本調査	平成20年4月~平成19年3月					
大ウフ	確認調査	平成17年2月~3月、平成17年7月、平成18年2月	500m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(33)、土坑墓(6)、伊跡(6)、土坑(2)、燒土(4)、溝状遺構(4)、砂鉄混入ビット(1)ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、布目庄廬土器、白磁、初期高麗青磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、滑石混入土器、轔の羽口ほか	町教育委員会
	確認調査(通)	平成18年7月					
	本調査	平成19年8月					
半田	確認調査	平成19年4月~10月	11,500m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(5)、土坑墓(5)、土坑ほか	越州窯系青磁、兼久式土器、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、ガラス玉ほか	町教育委員会
	本調査	平成20年12月~平成21年12月					
	確認調査	平成21年2月~3月、平成21年7月、平成22年2月					
赤瀬	確認調査(通)	平成22年7月	3,000m ²	古代末~中世	掘立柱建物跡(85)、土坑墓(8)、燒土跡、柱穴、溝状遺構ほか	土師器、須恵器、越州窯系青磁、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、龍泉窯系青磁、ガラス玉ほか	町教育委員会
	確認調査	平成23年7月					
	本調査	平成24年7月					

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要

平成18年度～25年度において、国宝重要文化財等保存整備費補助金を活用し、半田口遺跡・前畠遺跡・小ハネ遺跡・大ウフ遺跡・半田遺跡・赤連遺跡の煙紀事業工事区内外及び遺跡隣接地で合計50箇所の試掘・確認トレンチ調査を行った（第4図・第3表）。

調査の主な目的は、1) 煙紀事業工事区内外における工法の調整（保存や本調査）を行うための遺跡内容確認と、2) 煙紀事業工事区城外への遺跡範囲の広がりやその内容の確認である。

(1) 調査の方法

試掘・確認トレンチは、その目的に合わせ任意の場所に設定し、重機によって掘り下げを行った。トレンチの大きさは実施箇所の土地使用状況や遺構検出状況などによって異なるが、工事区内の工法調整のための内容確認トレンチについては20m×15m程度、工事区外の遺跡の広がりを確認するためのトレンチは10m×3m程度を基本とした。

大部分のトレンチにおいて、表土下はマージと呼ばれる暗赤褐色の地山が露出する状況であったが、一部包含層が堆積するトレンチもあった。包含層が堆積するトレンチにおいては、各層で遺構検出を行い、遺構の有無を確認した。遺構の有無の確認方法として、検出した遺構に対し5cm程度の掘り下げを実施した。これにより、自然堆積か人工的な掘り込みであるかを判断し、遺構と確認できたものについては、それ以上掘り下げは行わず、100分の1遺構配置図及び写真による記録を行った後、トレンチを埋め戻した。ただし、後述する半田遺跡41Tで検出した土坑墓5号については、出土人骨の状態が悪いことから図面作成及び記録写真撮影後に人骨の取り上げを行い、遺構を埋め戻した。

遺構が検出されなかったトレンチについては再び重機で掘り下げを行い、最終的には地山上面での遺構検出を行った後、100分の1平面図及び記録写真を撮影しトレンチを埋め戻した。

なお、トレンチの名称は、アラビア数字1から50までの連番にアルファベットのTを後ろにつけて表記している（例：1T）。

(2) 発見された遺構・遺物

調査を行った50トレンチ中、29トレンチで遺構を検出し、また、20トレンチで包含層などから遺物が出土した。遺構は合わせてピット1752基、土坑20基、土坑墓1基、焼土跡2基、構造遺構4条を検出し、遺物は土師器や須恵器、越州窯系青磁、初期高麗青磁、龍泉窯系青磁、朝鮮系無釉陶器、カムイガキ、鰐の羽口、鉄滓、滑石製石鍋や滑石二次加工品、石器などが出土した。遺物は合わせて1712点出土した。そのうち、図化したのは109点である。

(3) 基本層序

堆積状況は、遺跡ごとによって異なりを見せるが、城久遺跡群全体として大きく以下の4層に分けることができる。石灰岩の風化土層であるために堆積は非常に薄く、表土から基盤層までの深さは、20cm～60cm程度であった。

赤連遺跡においては、表土や表土下に近代の造成などによる擾乱層がみられ、深く掘削を行われている箇所なども確認される状況であった。

I層－表土。灰褐色粘質土層で、現代の耕作土である。層厚は、およそ30～40cm。

II層－硬質の暗褐色粘質土で古代・中世の遺物包含層である。削平されている地点も多く、わずかに検出されるのみであった。堆積が見られる地点での層厚は、およそ10cm～20cm。

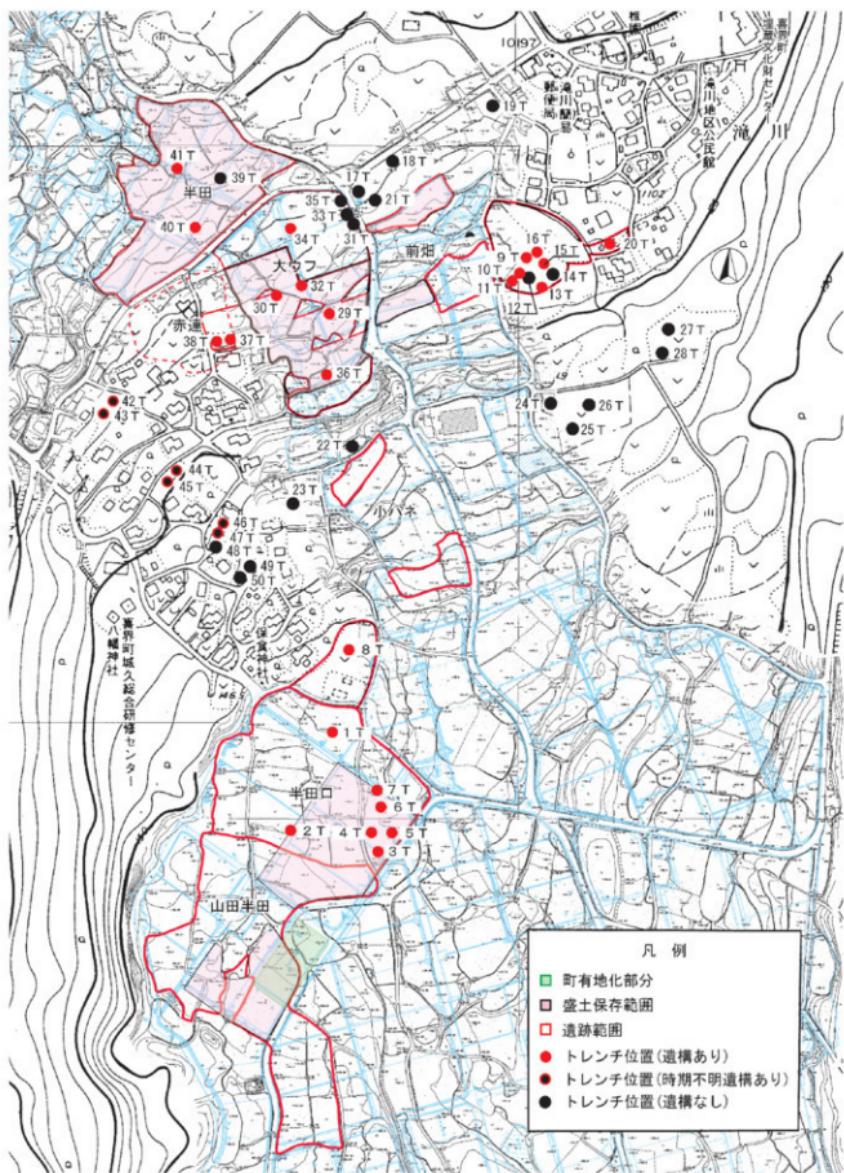
III層－地山。マージと呼ばれる石灰岩の風化土である赤褐色粘質土。

IV層－島の基盤層である。隆起珊瑚礁や琉球石灰岩である。表土下からこの基盤層が露頭する箇所がある。

第3表 城久遺跡群試掘・確認トレンチ調査一覧

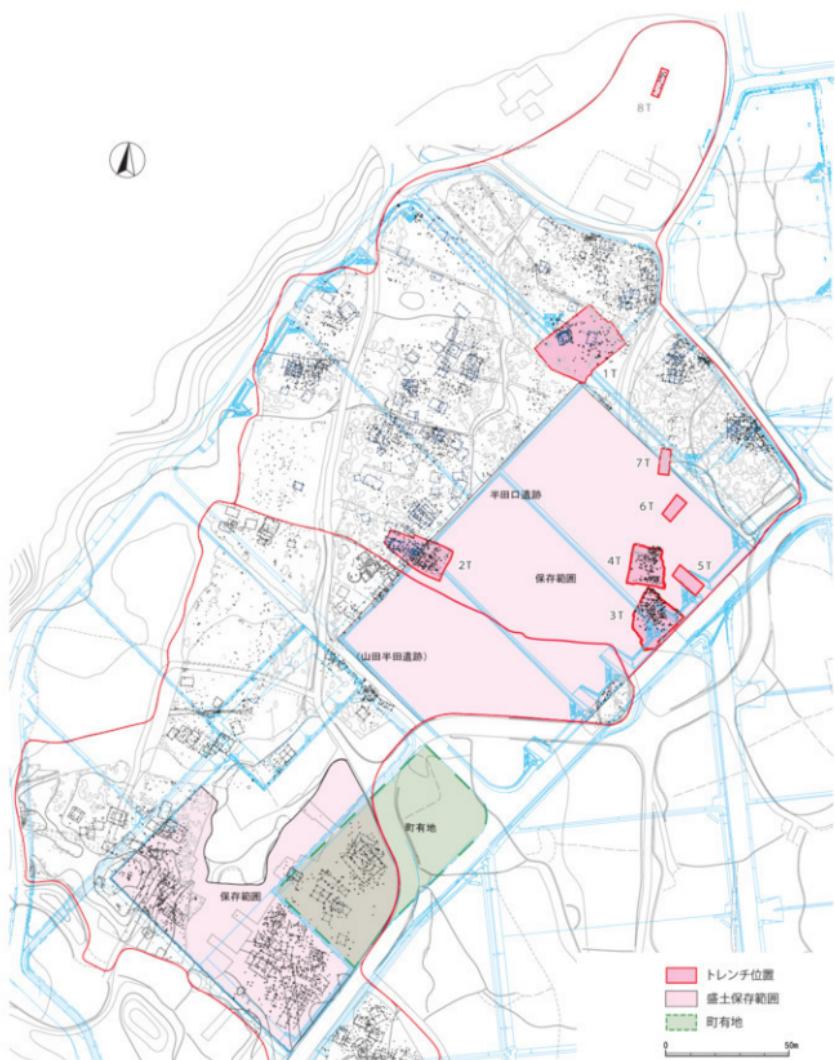
調査地区	トレンチ番号	規模(m)	m	遺構	遺構内容	遺物	備考
半田口	1 T	31×22	682	有	ピット(154) 溝(1)		H18年度調査 1T
半田口	2 T	27×12	324	有	ピット(303) 溝(1)		H18年度調査 2T
半田口	3 T	18×17	306	有	ピット(248)		H20年度調査 1T
半田口	4 T	16×16	256	有	ピット(175)	土器器、漆器器、カムイヤキ、滑石	H20年度調査 2T
半田口	5 T	13×5	65	有	ピット(31)		H20年度調査 3T
半田口	6 T	10×5	50	有	ピット(15)		H20年度調査 4T
半田口	7 T	10×4	40	有	ピット(4)		H20年度調査 5T
半田口(隣接地)	8 T	12×3	36	有	ピット(16) 土坑(1)	滑石製石鏡片、輪の羽口	H25年度調査 14T
前堀(隣接地)	9 T	9×2.5	22.5	有	ピット(26)	カムイヤキ、白磁、滑石	H20年度調査 1T
前堀(隣接地)	10 T	10×2.5	23	有	ピット(14) 土坑(5)	カムイヤキ、白磁、滑石製石鏡、輪の羽口、鐵滓	H20年度調査 2T
前堀(隣接地)	11 T	11×2	22	有		カムイヤキ	H25年度調査 7T
前堀(隣接地)	12 T	15×2	30	無		カムイヤキ、土器器、土器等	H25年度調査 2T
前堀(隣接地)	13 T	17×2	34	無		カムイヤキ、土器、滑石等	H25年度調査 3T
前堀(隣接地)	14 T	8×2	16	無			H25年度調査 4T
前堀(隣接地)	15 T	22×2	44	有	ピット(5)	土器器、漆器器、カムイヤキ、白磁、滑石、輪の羽口、鐵滓	H25年度調査 5T
前堀(隣接地)	16 T	11×2	22	有	ピット(13) 溝(1)		H25年度調査 1T
前堀(隣接地)	17 T	9×2	18	無			H25年度調査 7T
前堀(隣接地)	18 T	13×2	26	無		青磁	H25年度調査 1T
前堀(隣接地)	19 T	17×2	34	無			H25年度調査 3T
前堀(隣接地)	20 T	14×2	28	有	ピット(17)	青磁	H25年度調査 10T
前堀(隣接地)	21 T	5×2	10	無			H25年度調査 11T
小八戸(隣接地)	22 T	18×3	54	無			H25年度調査 12T
小八戸(隣接地)	23 T	18×3	54	無			H25年度調査 13T
小八戸(隣接地)	24 T	10×3	36	無			H25年度調査 15T
小八戸(隣接地)	25 T	10×3	36	無			H25年度調査 16T
小八戸(隣接地)	26 T	10×3	36	無			H25年度調査 17T
小八戸(隣接地)	27 T	10×3	36	無			H25年度調査 18T
小八戸(隣接地)	28 T	10×3	36	無			H25年度調査 19T
大ウフ	29 T	38×15	570	有	ピット(259) 土坑(1) 溝(1)	カムイヤキ、土器、滑石製石鏡、石器、輪の羽口、鐵滓	H18年度調査 1T
大ウフ	30 T	20×10	200	有	ピット(50) 土坑(1)	土器器、漆器器、越州窯系青磁	H18年度調査 2T
大ウフ	31 T	9×2	18	無		土器器、漆器器、慶久式土器、カムイヤキ、白磁、布紋陶瓶器、鐵滓	H19年度調査 1T
大ウフ	32 T	45×10	450	無		土器器、漆器器、カムイヤキ、白磁、滑石製石鏡	H19年度調査 2T
大ウフ	33 T	15×2.5	37.5	無		土器器、漆器器、万葉文ヤキ、滑石製石鏡、滑石製盤	H19年度調査 3T
大ウフ	34 T	30×22	660	有	ピット(266) 土坑(3) 燐土跡(1)	土器器、漆器器、カムイヤキ、白磁、雞足窯系青磁、滑石製石鏡	H19年度調査 4T
大ウフ	35 T	11×2	22	有	ピット(2)	土器器、カムイヤキ、漆器器、石器、铁滓	H19年度調査 5T
大ウフ	36 T	16×6	96	有	ピット(25) 燐土跡(1)	土器器、漆器器、カムイヤキ、輪の羽口	H19年度調査 6T
大ウフ(隣接地)	37 T	6×2	12	有	ピット(5)		H20年度調査 3T
大ウフ(隣接地)	38 T	6.5×2.5	16.25	有	ピット(4) 土坑(1)	カムイヤキ、滑石製品、青磁	H20年度調査 5T
半田	39 T	9×2	18	無			H18年度調査 1T
半田	40 T	17×10	170	有	ピット(49) 土坑(4)		H18年度調査 2T
半田	41 T	25×8	200	有	ピット(42) 土坑(3) 土坑墓(1)	土器器、漆器器、カムイヤキ、雞足窯系青磁、滑石製石鏡、明治陶器、滑石苔土器、铁滓	H18年度調査 3T
赤道	42 T	11×4	44	有	ピット(4)		H20年度調査 5T
赤道	43 T	9×4	36	有	ピット(7)	(かく乱)雞足窯系青磁	H20年度調査 6T
赤道	44 T	5×2.5	12.5	有	ピット(2) 土坑(1)	青磁	H20年度調査 7T
赤道	45 T	6×2.5	15	有	ピット(4)		H20年度調査 8T
赤道	46 T	4×2.5	10	有	ピット(2)		H20年度調査 9T
赤道	47 T	9×2.5	22.5	有	ピット(3)		H20年度調査 10T
赤道	48 T	5×2.5	12.5	無			H20年度調査 11T
赤道	49 T	-	-	無			H20年度調査 12T
赤道	50 T	-	-	無			H20年度調査 13T

*遺構内容で()内の数字は遺構数を表している



第4図 城久遺跡群確認トレンチ位置図

第2節 半田口遺跡の調査成果



第5図 半田口遺跡トレンチ位置配置図

(1) 調査状況

半田口遺跡では、合計 8箇所にトレンチを設定し調査を行った（第5図）。1T～7Tは、畠事業事業区内において工法の調整を行うための遺跡内容確認を目的とするもので、8Tは工事区外の隣接地に遺跡の広がりと内容を確認するため設定した。

調査の結果、すべてのトレンチにおいてピットなどの遺構が確認され、土師器や須恵器、カムイヤキ、滑石製石鍋、石器が包含層などから出土した。

1Tで検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1基、ピット154基があり、このあたり周辺に古代～中世と思われる遺構が広がっていることを確認した（第6図）。1Tを設定した箇所周辺は、遺跡の現状保存が困難なことから、平成19～20年度に本調査を実施し図面や写真での記録を行った。検出した掘立柱建物跡についての詳細は、平成24年度刊行の半田口遺跡報告書を参考にされたい。

2T～7Tでは、合わせて掘立柱建物跡8棟、ピット776基を検出し、このあたり周辺に古代～中世と考えられる遺構が集中して広がっていることを確認した（第7～9図）。2Tの西側半分を含む一帯は、遺跡の現状保存が困難なことから、平成19～20年度に本調査を実施し図面や写真での記録

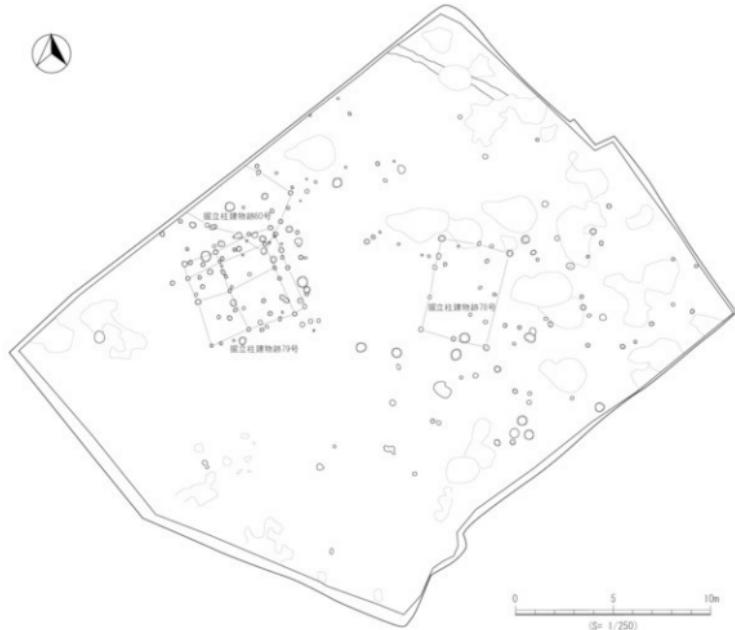
保存を行ったが、東側半分及び3T～7T周辺部は盛土による遺跡保存が行われた。2Tで検出した掘立柱建物跡についての詳細は、平成24年度刊行の半田口遺跡報告書を参考にされたい。

8Tでは、土坑1基とピット16基を検出し、古代～中世と考える遺構がこの周辺に保存されていること、また、半田口遺跡がこのあたり一帯まで広がることを確認した（第10図）。

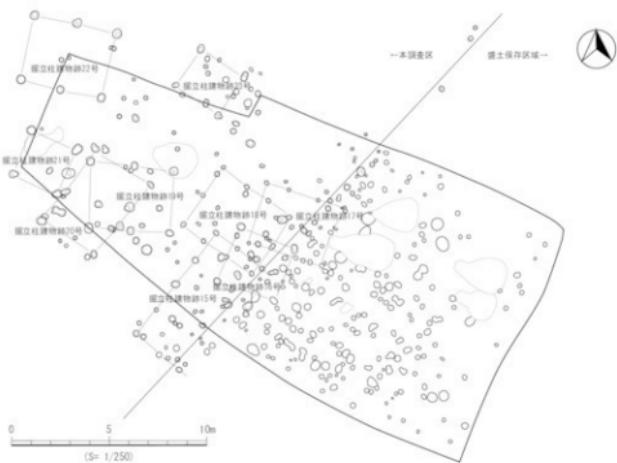
(2) 出土遺物

第11図は、4T出土の遺物である。1は朝鮮系無釉陶器の胴部である。外面に2条の突帯、内面に同心円状の当て具の痕跡が観察できる。2・3はカムイヤキ壺の胴部である。4は初期高麗青磁碗である。大宰府分類III類の口縁部と考えられる（以下、陶磁器の分類について特に記載がなければ大宰府分類を用いる）。5は中国製陶器B群系とみられる胴部である。6は掩型を呈する磁力の無い鉄滓である。7は滑石製石鍋である。貫通穿孔が1箇所確認できる。8は砂岩を石材とする磨礫石である。

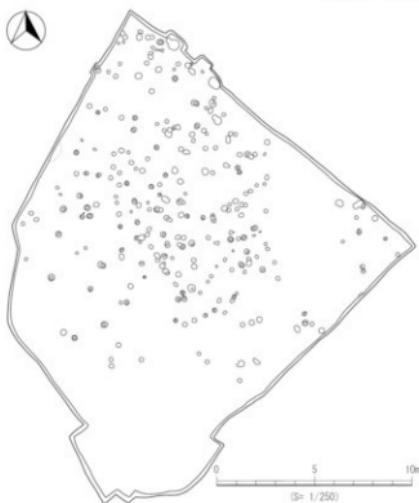
第12図は、8T出土の櫛の羽口である。両端部は欠損している。



第6図 1T(半田口遺跡)



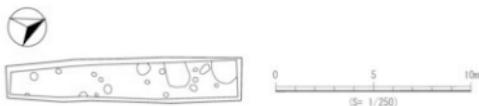
第7図 2T(半田口遺跡)



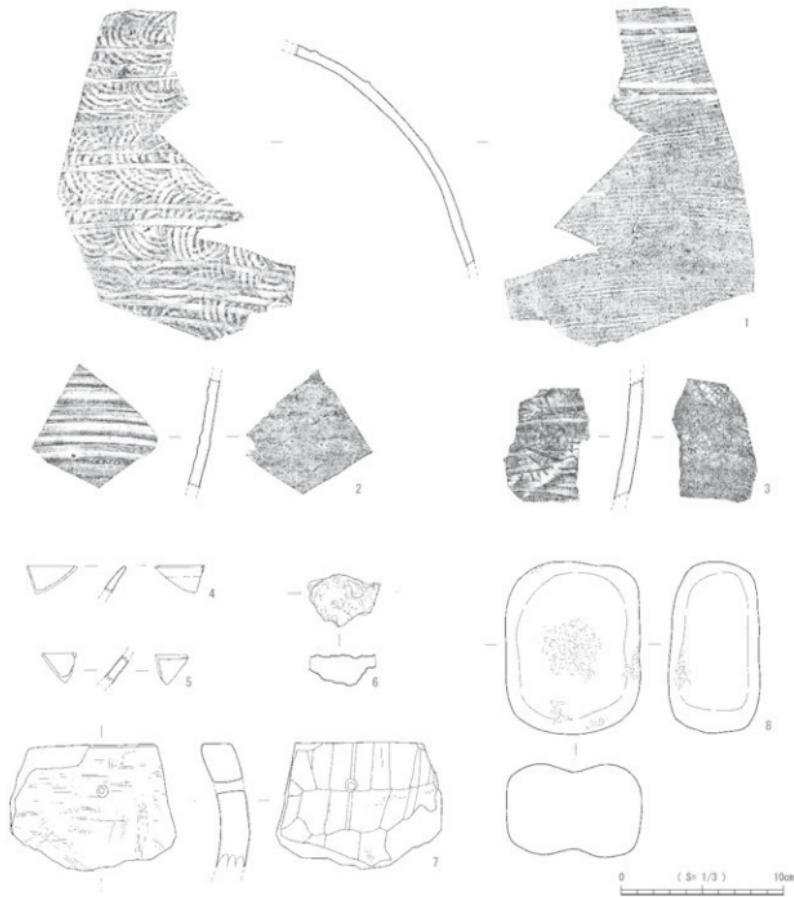
第8図 3T(半田口遺跡)



第9図 4T(半田口遺跡)



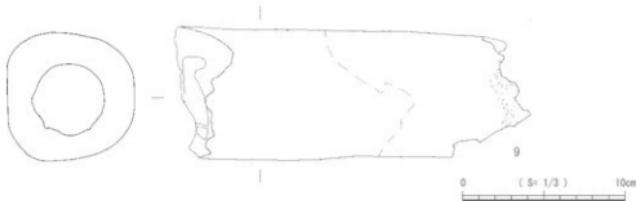
第10図 8T(半田口遺跡)



第11図 4T(半田口遺跡)出土遺物

第4表 4T(半田口遺跡)出土遺物観察表

標本 No.	遺物 名	トレンチ 番号	出土 遺跡名	層位	分類L1			分類L2			分類L3			部位	計測値(cm)			文様・面模			色調			量 目	備考
															(外)	(内)	(外)	(内)	(外)	(内)					
1	半田口	4T	P169	網状無輪陶器	裏	-	-	網部	-	-	口縁	底縫	鋸歯	-(外)	-(内)	-(外)	-(内)	-(外)	-(内)	-	-				
2	半田口	4T	P168	カムイマキ	表	A群	網部	-	-	-	-	-	-	平行	同心	灰	灰	-	-	-	-				
3	半田口	4T	P164	カムイマキ	A群	網部	-	-	-	-	-	-	-	ナデ	平行	オリーブ黒	緑縞灰	-	-	-	-				
4	半田口	4T	P78	切妻素面瓦	表	B群系	口縁部	-	-	-	-	-	-	垂直	格子	緑	灰	-	-	-	-				
5	半田口	4T	P121	中國瓦	B群系	網部	-	-	-	-	-	-	-	直	直	灰	灰	-	-	-	-				
6	半田口	4T	P47	-	直溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	29	丸孔なし				
7	半田口	4T	P260	滑石點	石縫	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	257	直通孔あり				
8	半田口	4T	P267	滑石	滑石	砂質	-	-	-	-	(3.0)	(3.3)	(3.0)	-	-	-	-	-	-	10	-				



第12図 8T(半田口遺跡)出土遺物

第5表 8T(半田口遺跡隣接地)出土遺物観察表

序号 No.	遺物 番号	遺跡名	出土区	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・調整		色調		量目 量目	備考
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	高さ (最大幅)	(外)	(内)	(外)	(内)		
第12 9	半田口	8T	P96	縄の羽口		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	

第6表 半田口遺跡・半田口遺跡隣接地トレンチ出土遺物集計表

遺跡名	トレンチ 番号	部位	遺物												合 計	
			土器 類	漆器 類	金銀 類	青銅 類	鐵器 類	骨角 類	石器 類	玉器 類	鏡 類	鏡 類	鏡 類	鏡 類		
半田口	8T	一区	8	2							1	1	3		15	
		ビット	27	4	3	6		1	1		12	10	6	1	42	119
半田口(隣接地)	8T	—									2					2
合計			35	6	3	6		1	1		15	10	9	2	42	123

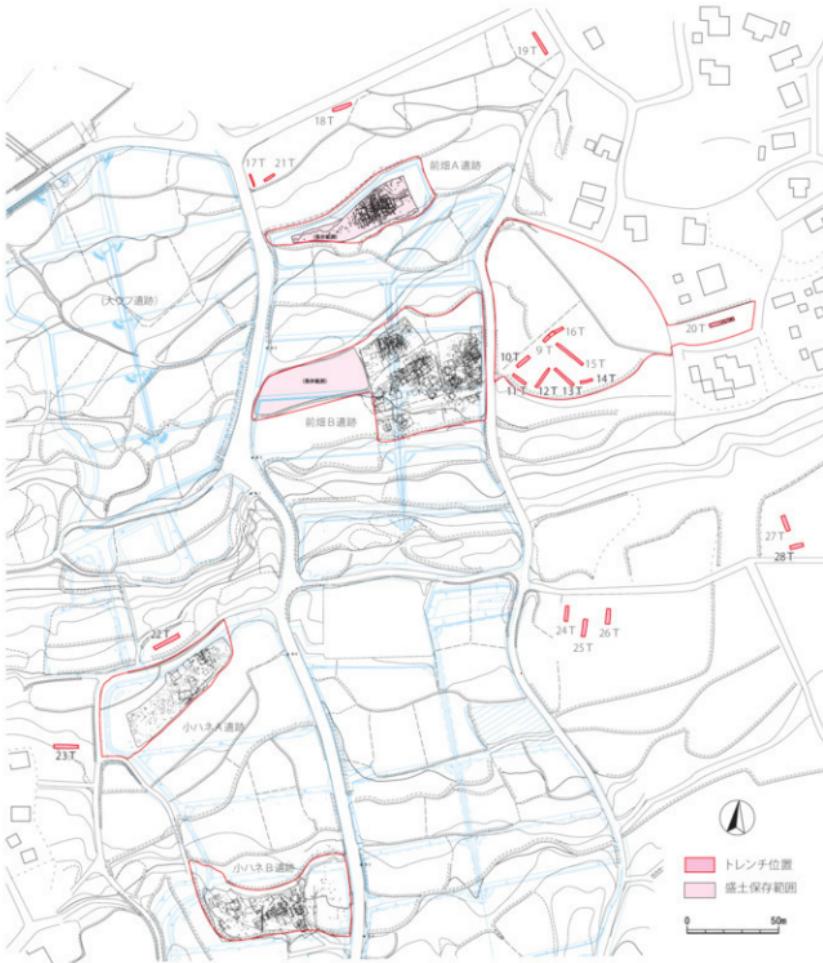
第3節 前畠遺跡・小ハネ遺跡の調査成果

(1) 調査状況

前畠遺跡と小ハネ遺跡は、隣接地に合計19箇所にトレーンチを設定し調査を行った(第13図)。いずれのトレーンチも、畑経事業工事区域外への遺跡の広がりや内容を確認するために設定したトレーンチである。

調査の結果、11T・12T・14T・17T～19T・22T～

28Tからは遺構は検出されなかつたが、前畠遺跡隣接地に設定した9T～16T周辺では城久遺跡群II期(11世紀後半～12世紀)と考えられるピット59基・土坑5基を検出し、この時期の遺構が良好な状態で保存されていることを確認した。また、現在の滝川集落内に設定した20TではⅢ期(13・14世紀)と考えるピット17基を確認し、前畠遺跡が現在の滝川集落内の一部に広がる可能性があることを確認した。



第13図 前畠遺跡・小ハネ遺跡トレーンチ配置図

(2) 出土遺物

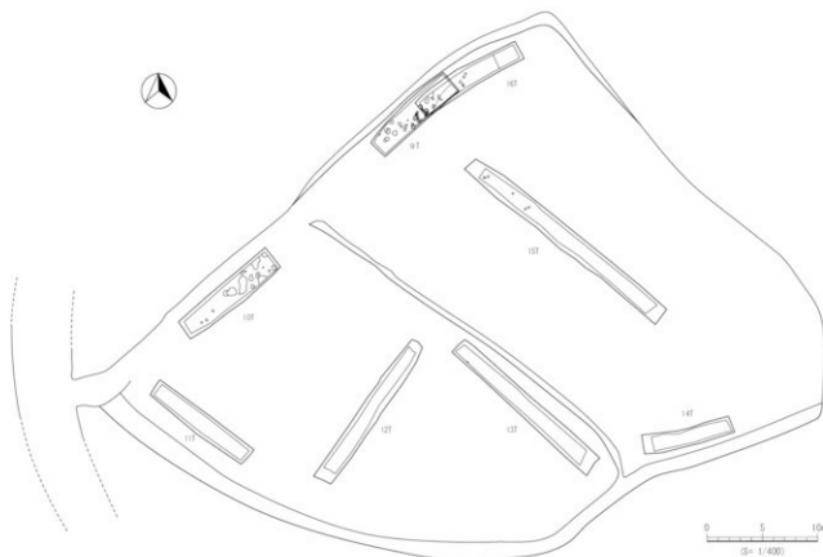
遺物は、カムイヤキや白磁、龍泉窯系青磁、須恵器、滑石製石扇、輪の羽口、鉄滓などが出土した（第11表）。

第16図10～20は10T出土の遺物である。10は朝鮮系無釉陶器壺の胴部である。11は初期高麗青磁碗Ⅲ類である。12はカムイヤキ壺A群である。13・14は白磁碗である。14はⅣ類の底部である。15・16は輪の羽口である。17は鉄製品である。棒状の製品と思われるが、摩耗が著しく形状の特定は難しい。18・19は鉄滓である。18は椀型を呈し、磁力をを持つ。20は滑石二次加工品である。不定型だがほぼ正方形を呈し貫通穿孔が1箇所確認できる。

第17図21～23は13T出土の遺物である。21は土師器壺である。磨滅のため調整などは確認できなかった。22・23は滑石二次加工品である。22は内面にケズリの跡が確認できるが、外面には加工痕は見られない。貫通穿孔が1箇所確認できる。23はバレン状を呈する製品である。

第18図24～29は15T出土の遺物である。24は須恵器壺である。25はカムイヤキ壺A群である。26・27は白磁碗である。26は碗Ⅳ類と考えられる。28は輪の羽口である。29は碗型滓である。

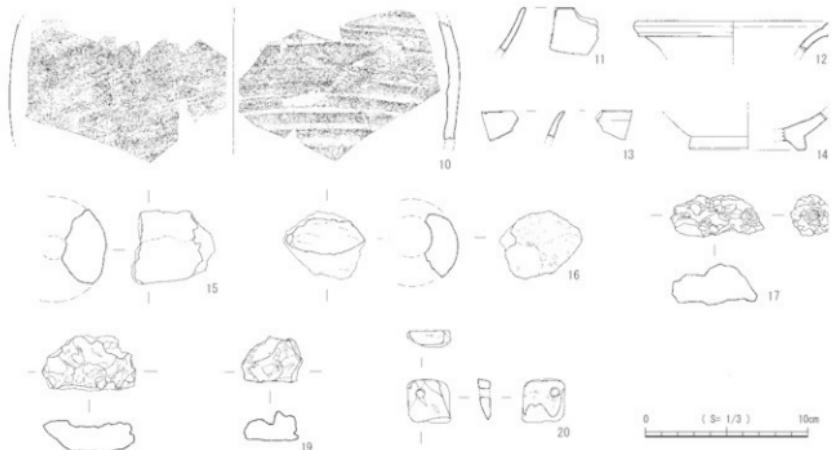
第19図は20T出土の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類である。



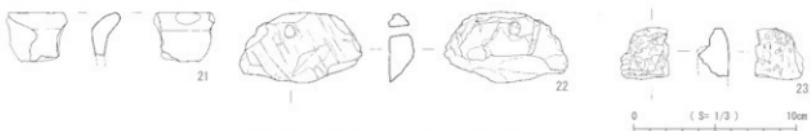
第14図 9T～16T（前畠遺跡隣接地）



第15図 20T（前畠遺跡隣接地）



第16図 10T(前畠遺跡隣接地)出土遺物



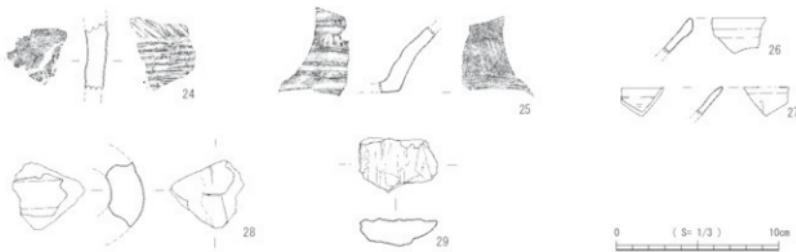
第17図 13T(前畠遺跡隣接地)出土遺物

第7表 10T(前畠遺跡隣接地)出土遺物観察表

件番 No.	埋蔵 場所	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調 色調 No.	重量 kg	備考
										口径 (最大)	底径 (最大幅)	器高 (最大)	(外)	(内)			
10	前縁	27		II	輪郭系無施陶器	便			側面				格子	織目状	青灰		
11	前縁	27		II	切削施錐痕	便	口縁部						波	波	灰オリーブ	灰オリーブ	
12	前縁	27		II	カムリヤナギ	便	A群		口縁部	11.6					青灰		
13	前縁	27		II	白磁	便	口縁部								灰白	灰白	
14	前縁	27		II	白磁	便	口縁部		底部	?					青灰		
15	前縁	27		II	輪郭	便											
16	前縁	27		II	輪郭の凹口												
17	前縁	27		II	輪郭の凹口												
18	前縁	27		II	鉢形品											29	
19	前縁	27		II	鉢形品	輪型溝										66	破片あり
20	前縁	27		II	鉢形品					(2.7)	(2.5)	(1)				19	破片なし
																10	

第8表 13T(前畠隣接地)出土遺物観察表

件番 No.	埋蔵 場所	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調 色調 No.	重量 kg	備考
										口径 (7.6)	底径 (4.3)	器高 (1.5)	(外)	(内)			
21	前縁	13T		II	土師器	便			口縁部						赤褐色		
22	前縁	13T		II	漆器二次加工品											150	
23	前縁	13T		II	漆器二次加工品					(3.1)	(2.8)	(1.8)			65	バレン状裂品	



第18図 15T(前畠遺跡隣接地)出土遺物



第19図 20T(前畠遺跡隣接地)出土遺物

第9表 15T(前畠遺跡隣接地)出土遺物観察表

標記 No.	件名 番号	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・調整	色調	重量 (g)	備考
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	鉢高 (最大厚)	(外)	(内)		
第18 回	24	前縫	15T	II	前縫路	直	直	直	縫部	—	—	—	平行	オリーブ灰	青灰	—
	25	前縫	15T	II	カム・ヤキ	直	直	直	縫部	—	—	—	縫合	青灰	青灰	—
	27	前縫	15T	II	白縫	直	直	直	縫部	—	—	—	—	青灰	浅青	玉縫
	28	前縫	15T	II	縫の口	直	直	直	縫部	—	—	—	—	区オリーブ	区オリーブ	—
	29	前縫	15T	II	既縫	直	直	直	縫部	—	—	—	—	—	—	28
																褐色なし

第10表 20T(前畠遺跡隣接地)出土遺物観察表

標記 No.	件名 番号	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・調整	色調	重量 (g)	備考	
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	鉢高 (最大厚)	(外)	(内)			
第10 回	30	前縫	20T	—	II	縫泉窓系青縫	直	IV類	底部	—	49	—	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	—

第11表 前畠遺跡隣接地トレンチ出土遺物集計表

遺跡名	トレンチ 番号	層位	遺物種別												合 計	
			土器	手取	手取 土器	手取 石器	手取 骨器	手取 貝殻	手取 漆器	手取 金銀	手取 鐵器	手取 銅器	手取 鐵器	手取 銅器		
前縫(隣接地)	9T	II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	10T	II	10	5	2	6	—	—	—	—	—	—	11	1	391	
	ビット	T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	
	11T	II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	12T	II	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	
	13T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
	13T	II	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	31	
	15T	II	11	13	2	5	—	—	—	—	—	—	38	38	131	
	16T	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	
	20T	II	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	
合計			21	20	4	18	1	1	2	14	6	2	22	3	24	393

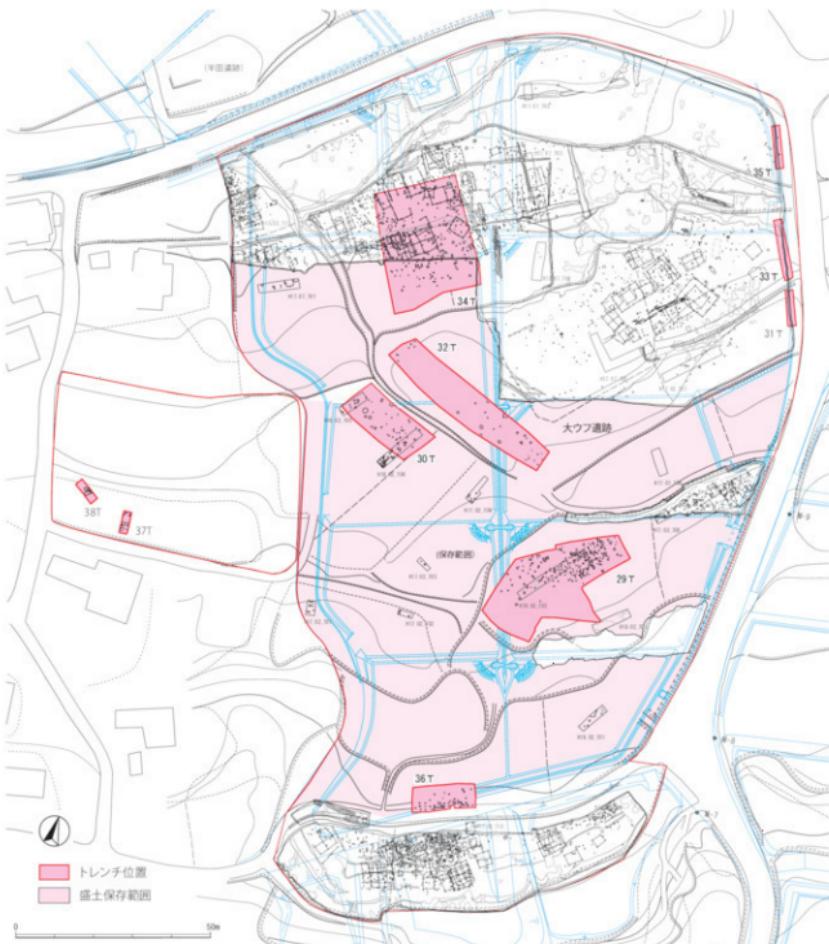
第4節 大ウフ遺跡の調査成果

(1) 調査状況

大ウフ遺跡では、合計10箇所にトレンチを設定し調査を行った(第20図)。29T～36Tは、烟紀事業工事区内において工法の調整を行うための道路内容確認を目的とするもので、37T・38Tは工事区外の隣接地に遺跡の広がりと内容を確認するために設定した。

調査の結果、31T・33Tは遺構を検出しなかったが、その他のトレンチにおいてピットや土坑などが、カムイヤキや須恵器、越州窯系青磁、白磁、龍泉窯系青磁、滑石製石鍋、繩の羽口、鐵滓などと共に検出された(第19表)。

29T・30T・32T・34T～36Tで検出した遺構は、合わせて掘立柱建物跡15棟、土坑3基、土坑墓1基、焼土跡1基、溝状遺構1条、ピット604基あり、このあたり周辺に



第20図 大ウフ遺跡トレンチ配置図

古代～中世と考えられる遺構が広がっていることを確認した（第21・23・25・27・29・30図）。34Tの北側半分や35Tを含む一帯は、遺跡の現状保存が困難なことから、平成19～21年度に本調査を実施し図面や写真での記録保存を行つたが、34T南側半分及び29T・30T・32T・36T周辺部は盛土による保存が行われた。34Tの北側半分で検出した掘立柱建物跡や土坑墓、溝状遺構についての詳細は、平成24年度刊行の大ウツ遺跡・半田遺跡報告書を参考にされた。

37T・38Tで検出した遺構は、合わせて土坑1基、ビット9基があり、古代～中世と考える遺構がこの周辺に保存されていることを確認した（第33図）。37T・38Tは現在の城久集落内に設定したトレンドチで、大ウツ遺跡が現在の城久集落内的一部に広がる可能性があることを確認した。

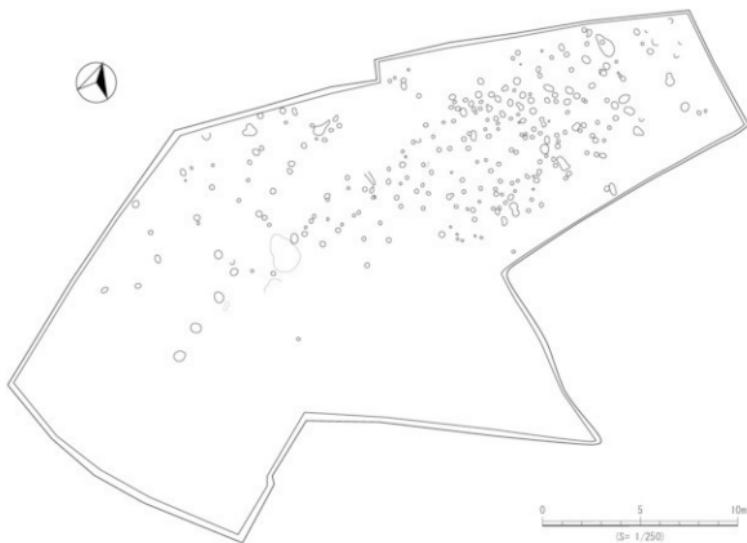
（2）出土遺物

第22図31～49は29T出土の遺物である。31・32は土器器窓である。32の内面はケズリによる調整痕が見られる。33・34は須恵器である。35・36は朝鮮系無釉陶器である。37～40はカムイヤキ窓A群である。40は肩部に沈線による波状文が施されている。41～44は白磁である。41・42は椀IV類である。43は小椀V類の胴部と考えられる。44は椀IV類の底部である。45は布目压痕土器である。46は管状を呈する土製品である。47は襷の羽口である。48・49は椀型津である。磁力は無い。

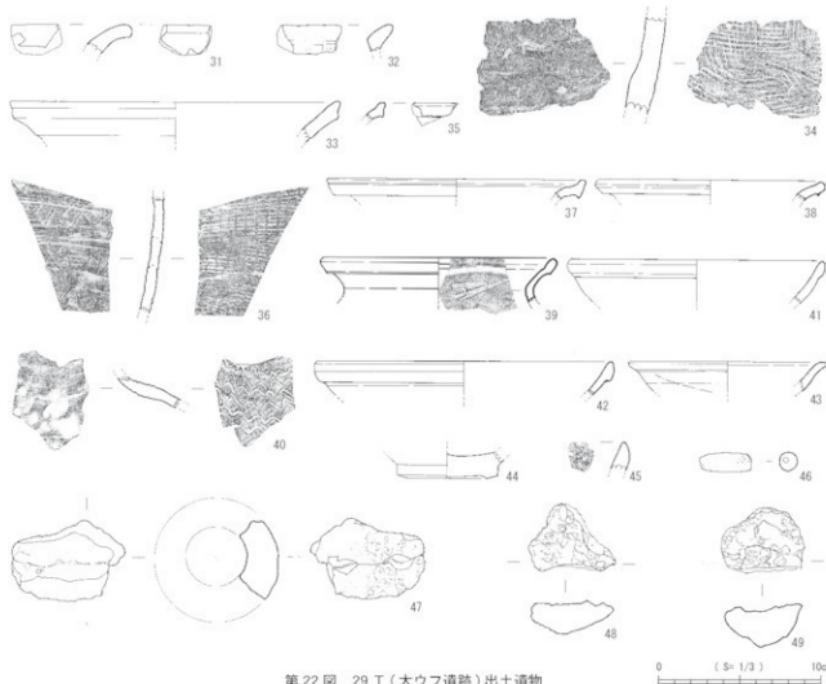
第24図50～54は30T出土の遺物である。50・51は土器器窓である。50は内面にケズリによる調整痕が確認できる。52は越州窯系青磁碗II類の胴部である。53は滑石製石鍋の胴部である。54は流动津である。

第26図55～66は32T出土の遺物である。55は豪久式土器の底部である。摩耗しているが、木葉痕が確認できる。56は土器器窓である。57・58は須恵器である。57は窓の胴部である外面に格子目状、内面に同心円状のあて具の跡が確認できる。58は窓の底部である。59～63はカムイヤキ窓A群である。62は肩部外面に沈線による波状文が施されている。63は肩部外面に「×」の形状と思われる沈線文が施されている。64は越州窯系青磁碗II類の胴部である。65・66は白磁碗IV類である。67は襷の羽口である。68は磁力がある鉄津である。形状から炉内残留津と考えられる。

第28図69～80は34T出土の遺物である。69～71は土器器窓である。69・70は窓の口縁部である。71は襷の底部である。72は須恵器窓の肩部である。外面に波状の沈線文が施されている。73は白磁碗IV類である。74～78は龍泉窯系青磁である。74～76は椀IV類と考えられる。74は口縁部に平行に3条の線が施されている。76は底部である。軸はオーリープ灰色の透明で、高台外面まで施釉されている。内底部は釉剥ぎされており、草花文のような模様が沈線で描かれている。77・78は杯IV類の口縁部である。78は沖縄の今帰仁城跡にも同様の資料が出土している。79は滑石製石鍋の胴部である。80は鍾状を呈する滑石二次加工品である。



第21図 29T（大ウツ遺跡）



第22図 29T(大ウフ遺跡)出土遺物

0 (S: 1/3) 10cm

第12表 29T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

件目 標記 番号	遺跡名	出土区	三次元 座標名	層位	分群L1	分群L2	分群L3	部位	計測値 (cm)			文様・調整		色調 (外) (内)	質量 (g)	備考
									口径 (最大)	底径 (最大幅)	高さ (最大)	(外)	(内)			
31 大ウフ	29T	日	土耕田	便				口縁部						赤褐色	黒褐色	
32 大ウフ	29T	日	土耕田	便				口縁部						明赤褐色	褐色	
33 大ウフ	29T	日	土耕田	便				口縁部	2.3					青灰	青灰	
34 大ウフ	29T	日	土耕田	便				胸部						青灰	灰オーリーフ	
35 大ウフ	29T	日	土耕田	便				口縁部						灰	灰	
36 大ウフ	29T	日	土耕田	便				胸部						暗青灰	青灰	
37 大ウフ	29T	日	カムイヤホ	直	A群			口縁部	10.4					灰	灰	
38 大ウフ	29T	日	カムイヤホ	直	A群			口縁部	13.6					暗青灰	暗青灰	
39 大ウフ	29T	日	カムイヤホ	直	A群			口縁部	14					青灰	青灰	
40 大ウフ	29T	日	カムイヤホ	直	A群			口縁部	—					オーリーフ	青灰	
41 大ウフ	29T	日	白堀	柄	V群			口縁部	15.3					灰白	灰白	
42 大ウフ	29T	日	白堀	柄	V群			口縁部	17.6					灰白	灰白	
43 大ウフ	29T	日	白堀	小柄	V群			胸部	12.2					灰褐色	灰褐色	
44 大ウフ	29T	日	白堀	柄	V群			底部	—	4.8				灰白	灰白	
45 大ウフ	29T	表保	赤日彦土器	—				口縁部						明赤褐色	褐色	
46 大ウフ	29T	日	土製品	—												88
47 大ウフ	29T	—	籠の釘口	—												42
48 大ウフ	29T	日	鉢足	—												64
49 大ウフ	29T	日	鉢足	—												

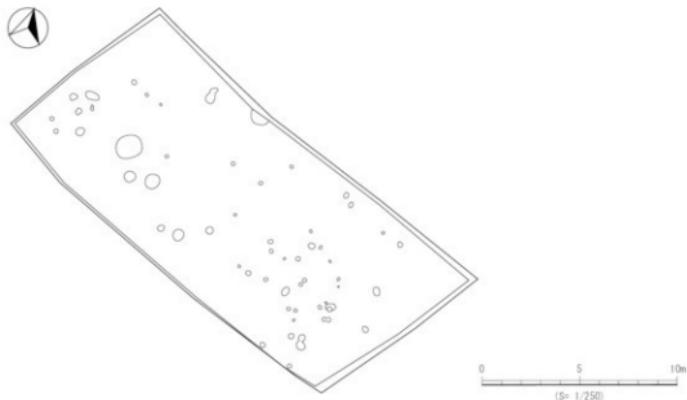
裏面

第31図 81・82は35T出土の遺物である。81は須恵器の胸部である。82は砂岩を石材とする石器である。石皿として使用された可能性がある。

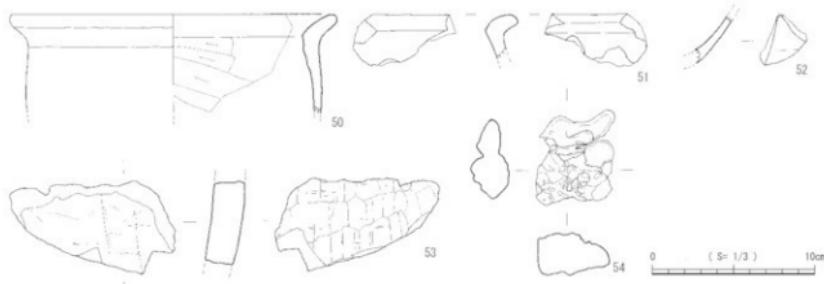
第32図 83～88は36T出土の遺物である。83は土師器壺である。内面はケズリによる調整を行っている。84～86はカムイヤキ壺A群である。85・86は肩部外面に沈線による波状文が施されている。87は滑石二次加工品である。断

面はT字型をしており、全面にケズリなどの加工痕が見られる。また、貫通穿孔が2箇所観察できる。88は滑石製石鍋の口縁部である。

第33図 90・91は38T出土の遺物である。90は須恵器壺の胸部である。91は白磁碗の底部である。内底部に印花文が施されている。ビロースクタイプⅢ類（木下他 2009）と考えられる。



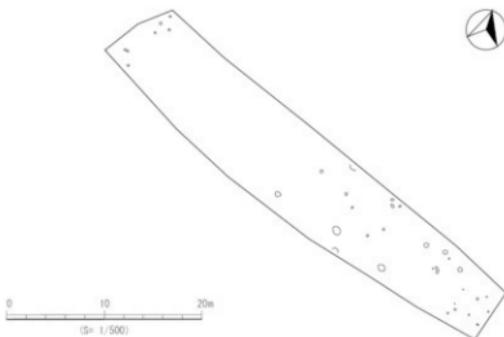
第23図 30T(大ウフ遺跡)



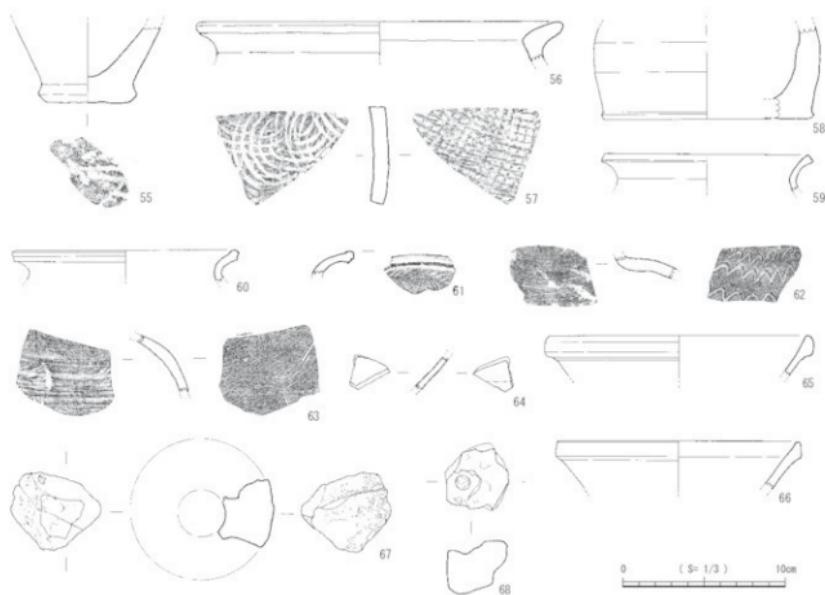
第24図 30T(大ウフ遺跡)出土遺物

第13表 30T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

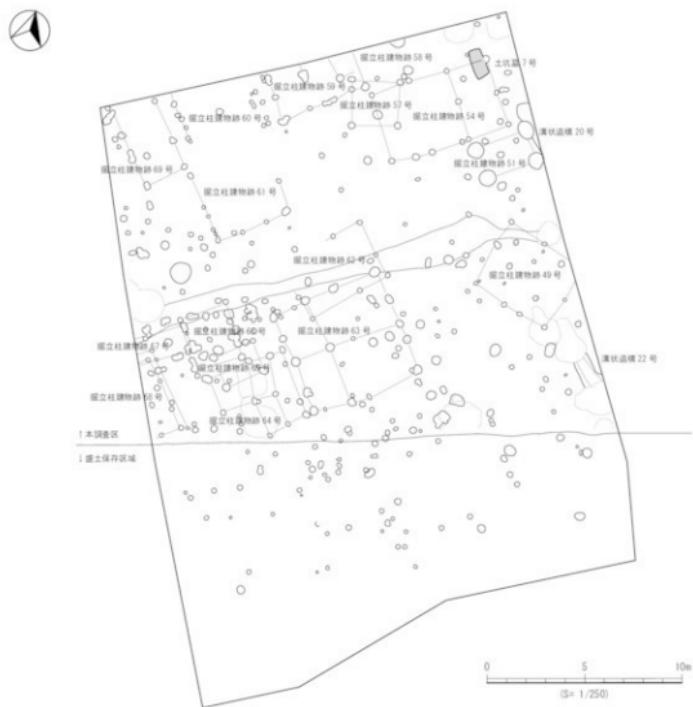
標示 No.	標記 番号	遺跡名	出土区 遺跡名	出土 遺跡名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)		文様・御型	色調	重量 (g)	備考	
										口径 〔最大径〕	底径 〔最大幅〕	高さ 〔最大厚〕	(外)	(内)		
第13 回	50	大ウフ	307		II	土師器	壺			20			ケズリ	赤灰	50	
	51	大ウフ	307		II	土師器	壺						網目織	赤灰		
	52	大ウフ	307		II	越州窯系青磁	壺		網目織				網目織	赤灰		
	53	大ウフ	307		II	滑石製品	石鍋		網目織	(10.1)	(5.8)	(1.8)		オリーブ灰	170	貫通穿孔あり
	54	大ウフ	307		II	鉄滓		溶動渦							71	



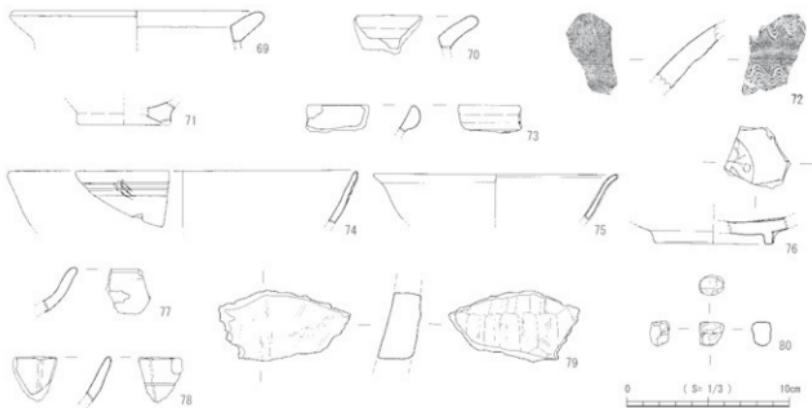
第25図 32 T(大ウフ遺跡)



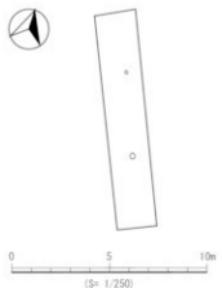
第26図 32 T(大ウフ遺跡)出土遺物



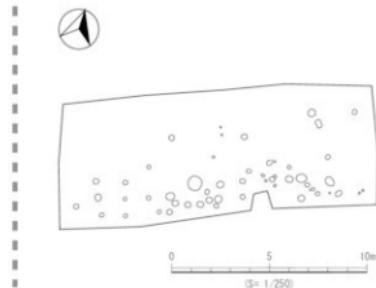
第27図 34T(大ウフ遺跡)



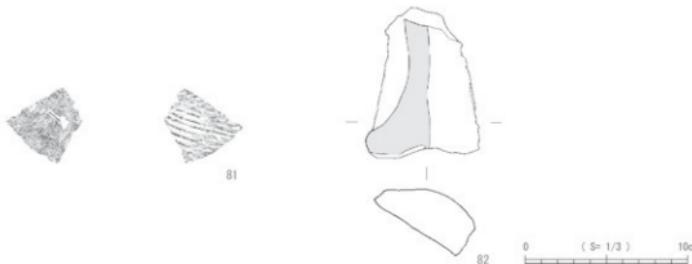
第28図 34T(大ウフ遺跡)出土遺物



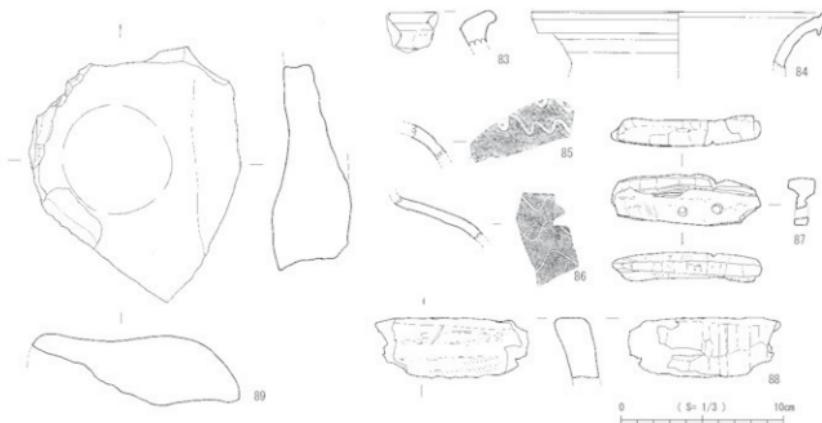
第29図 35 T(大ウフ遺跡)



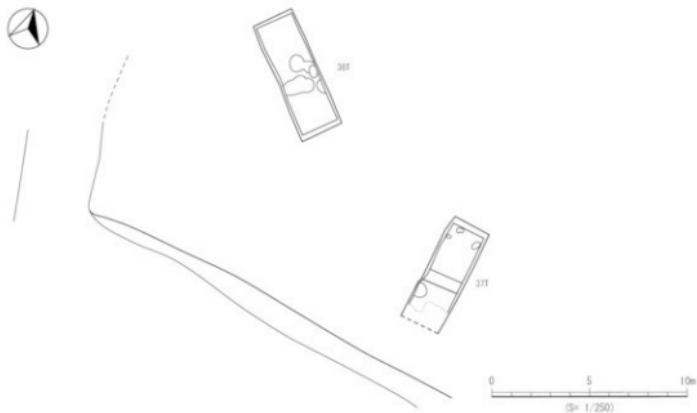
第30図 36 T(大ウフ遺跡)



第31図 35 T(大ウフ遺跡)出土遺物



第32図 36 T(大ウフ遺跡)出土遺物



第33図 37T・38T(大ウフ遺跡隣接地)



第34図 38T(大ウフ遺跡隣接地)出土遺物

第14表 32T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

探査 番号	試験 番号	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・調査		色調		重量 (g)	備考
										口径 (最大値)	深度 (最大幅)	鉢底 (最大幅)	(外)	(内)	(外)	(内)		
第14回	55	大ウフ	32T		一括	東久之土器	直		底部	5			無	無	無	無		
	56	大ウフ	32T		II	土師器	直		口縁部	22.4			ケヌリ	無	無	無		
	57	大ウフ	32T		II	漆毛器	直		無			梅子	岡心門	東灰	東灰			
	58	大ウフ	32T		II	漆毛器	直		底部		12.6		ナデ	東灰	東灰	東灰		
	59	大ウフ	32T		II	カムイサキ	直	A型	口縁部	12.3			ナデ	無	無	無		
	60	大ウフ	32T		II	カムイサキ	直	A型	口縁部	13.2			ナデ	平行	無	無		
	61	大ウフ	32T		II	カムイサキ	直	A型	口縁部				ナデ	平行	無	無		
	62	大ウフ	32T		II	カムイサキ	直	A型	底部				ナデ	平行	無	無		
	63	大ウフ	32T		II	カムイサキ	直	A型	底部				波状文	平行	無	無		
	64	大ウフ	32T		II	越州窯系青磁	直	口縫	底部				ナデ	ナデ	波状文	波状文		
	65	大ウフ	32T		II	白磁	直	口縫	底部	15.8			波状文	波状文	波状文	波状文		
	66	大ウフ	32T		II	白磁	直	口縫	底部				波状文	波状文	波状文	波状文		
	67	大ウフ	32T		II	縄の口	直						波状文	波状文	波状文	波状文		
	68	大ウフ	32T		II	乳暈	直	内側									78	磁力あり

第15表 34T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

探査 番号	試験 番号	遺跡名	出土区 域	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・調査		色調		重量 (g)	備考
										口径 (最大値)	深度 (最大幅)	鉢底 (最大幅)	(外)	(内)	(外)	(内)		
第15回	69	大ウフ	34T		I	土師器	直		口縁部				無	無	無	無		
	70	大ウフ	34T		I	土師器	直		口縁部				無	無	無	無		
	71	大ウフ	34T		I	土師器	直		底部		5.7		無	無	無	無		
	72	大ウフ	34T		I	漆毛器	直		底部				波状文	無	無	無		
	73	大ウフ	34T		I	白磁	直	口縫	口縫部				波状文	無	無	無		
	74	大ウフ	34T		I	越州窯系青磁	直	口縫	口縫部	21.4			波状文	波状文	波状文	波状文		外側に3条線
	75	大ウフ	34T		I	越州窯系青磁	直	口縫	口縫部	15.1			波状文	波状文	波状文	波状文		
	76	大ウフ	34T		I	越州窯系青磁	直	口縫	底部			7.2	波状文	波状文	波状文			
	77	大ウフ	34T		I	越州窯系青磁	直						波状文	波状文	波状文			
	78	大ウフ	34T		I	越州窯系青磁	直						波状文	波状文	波状文			
	79	大ウフ	34T	P243		漆石器品	直		口縫		(8.1)	(4.3)	(1.9)	-	-	-	65	
	80	大ウフ	34T		I	漆石器二次加工品	直		口縫		(3.5)	(1.4)	(1.2)	-	-	-	5	

第16表 35T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

層位 No.	遺物番号	遺物名	出土層	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整	色調	重量(g)	備考	
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	高さ (最大厚)					
第31 回	81	大ウフ	35T	II	遺物器		便・壺		瓶部	—	(9)	(7)	(2.7)	平行	淡黄	淡黄	205
	82	大ウフ	35T		石器		砂質		—	—				—	—		

第17表 36T(大ウフ遺跡)出土遺物観察表

層位 No.	遺物番号	遺物名	出土層	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整	色調	重量(g)	備考	
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	高さ (最大厚)					
第32 回	83	大ウフ	36T	II	土師器		甕		口縁部	—	16	—	—	クズリ	胡赤誠	暗	50
	84	大ウフ	36T		カムイヤキ		甕	A群	口縁部	—				ナデ	暗青灰	暗青灰	
	85	大ウフ	36T	III	カムイヤキ		甕	A群	腹部	—	(3.1)	(1.6)	—	波状文	ナデ	暗青灰	
	86	大ウフ	36T		カムイヤキ		甕	A群	腹部	—				波状文	ナデ	暗青灰	
	87	大ウフ	36T	III	漆私製二次加工品		甕	—	—	(9.1)	(3.6)	(2.3)	—	—	—	—	
	88	大ウフ	36T		漆私製品		石鏡	—	口縁部	(9.5)				—	—	—	104
	89	大ウフ	36T	III	石器		砂質	—	—	(15.4)	(12.0)	(4.2)	—	—	—	—	
	90	大ウフ	36T		白磁		瓶	—	底部	—				—	—	—	—

第18表 38T(大ウフ遺跡隣接地)出土遺物観察表

層位 No.	遺物番号	遺物名	出土層	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整	色調	重量(g)	備考	
										口径 (最大径)	底径 (最大幅)	高さ (最大厚)					
第34 回	90	大ウフ	38T	II	遺物器		甕		瓶部	—	(1.8)	(1.8)	—	平行	黃灰	にぶい黄褐色	50
	91	大ウフ	38T		白磁		瓶	—	底部	—				招屈文	淡黄	淡黄	

第19表 大ウフ遺跡・大ウフ遺跡隣接地トレンチ出土遺物集計表

遺跡名	トレンチ番号	層位	土質	遺物番号	遺物名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整	色調	重量(g)	備考							
											口径 (最大径)	底径 (最大幅)	高さ (最大厚)											
大ウフ	29T	25									—	—	—	3	10	6	1	46						
	8	48	20	2	—	40					8	11	2	6	23	4	12	21	2	42	260			
	30T	8	14	2		—								1	2	—	—	20						
	—	—	—	—		—												1						
	31T	8	2	2		—												—	17					
	—	—	—	—		—												23						
	32T	8	1	2		—												2	2					
	—	—	—	—		—												16						
	33T	8	1	2		—												1	9					
	—	—	—	—		—												17						
	34T	8	6	5	20						38	9	3	2	13	2	1	23	3	6			129	
	—	—	—	—		—												8	5	1				
	35T	8	3	3	22						1	1	1	1	13	1	13	13	4	4	1	1	56	
	—	—	—	—		—												1	13	2	3	3	97	
	36T	8	4	9	3	12												1	1	4	6	4	33	
	—	—	—	—		—												2	3	3	3	3	5	
大ウフ(隣接地)	38T	8	1	1	—	—																	9	
	合計		116	71	14	219	2				50	40	1	10	16	7	61	116	64	58	279	1	121	954

第5節 半田遺跡の調査成果

(1) 調査状況

半田遺跡では、工事の工法調整を行うための内容確認を目的として、工事区内に3箇所のトレンチ（39 T～41 T）を設定した（第35図）。

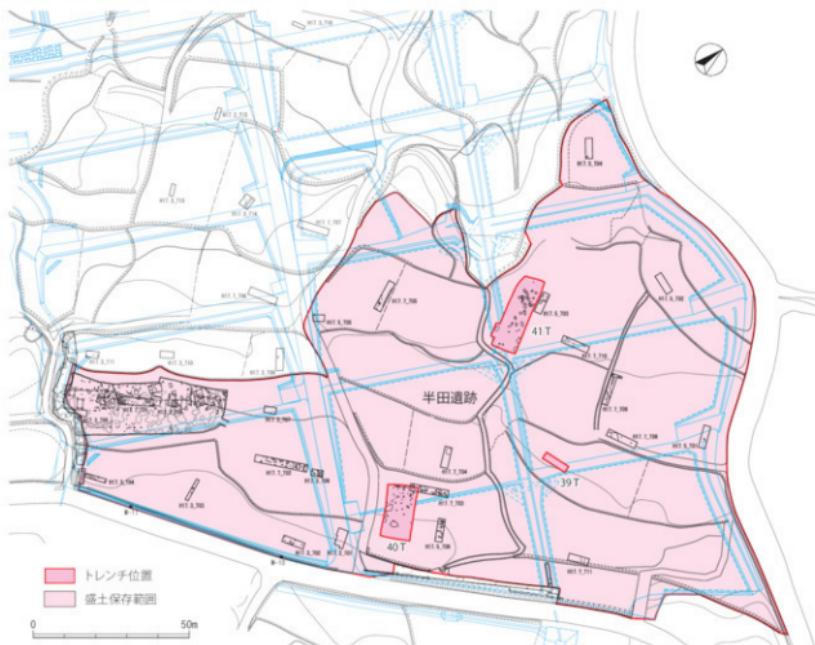
調査の結果、39 Tでは造構が見られなかったものの、40 Tではピット49基と土坑4基を検出し（第36図）、41 Tにおいてはピット42基、土坑3基、土坑墓1基を検出し（第37～40図）。周辺に中世の遺跡が良好な状態で保存されていることを確認した。

41 Tで検出された土坑墓（土坑墓5号）は、地山面で検出されたが、地山と土坑墓の埋土が酷似しており平面形状が明確につかめなかつた。造構の深さは10センチに満たず、上部は烟作業などで削平された可能性がある。土坑墓からは、仰臥屈葬と考えられる土葬された4体の人骨が出土したが、いずれも保存状態が悪く個別平面図作成や写真記録を行った後に取り上げを行っている。出土した人骨の人類学的特徴については、第IV章第一節を参考にされたい。なお、この土坑墓からは明瞭な副葬品は確認していない。

(2) 出土遺物

41 Tから出土した遺物は、越州窯系青磁やカムイヤキ、滑石製石鍋などがあるが、主に龍泉窯系青磁が出土している。第41図92～101は41 Tから出土した遺物である。92は須恵器壺の胴部である。93・94は越州窯系青磁碗IV類である。95・96は口縁部である。97は底部である。やや厚めの釉が豊富まで施されている。内底部は釉剥ぎが見られる。98は滑石混入器の底部である。滑石製石鍋の模倣土器と考えられる。99は滑石製石鍋の底部である。外側・内側だけでなく割れ面にも加工痕があり、石鍋の破片を二次加工しているものと考えられる。100は泥岩を石材とする砥石である。101は炉底滓と考えられる鐵滓である。磁力は無い。

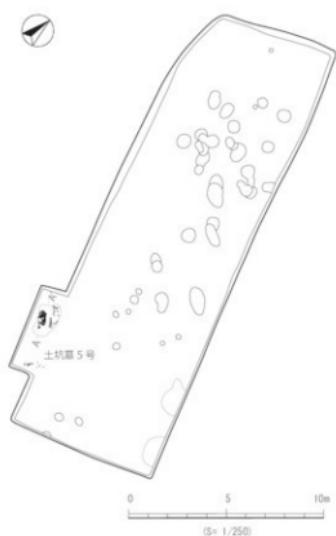
出土した造構、遺物から40 T・41 T周辺には城久遺跡群III期頃の遺跡が良好な状態で保存されていることを確認した。これらのトレンチを含む半田遺跡の大部分は盛土による道路保存が行われた。



第35図 半田遺跡トレンチ配置図



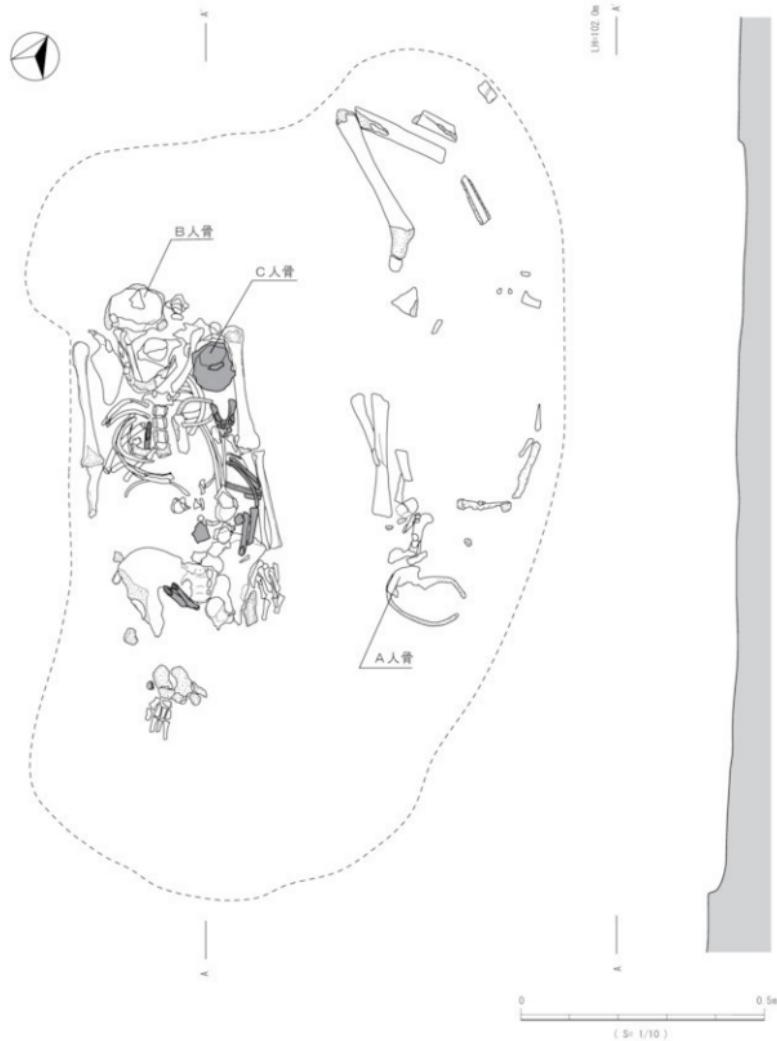
第36図 40 T(半田遺跡)



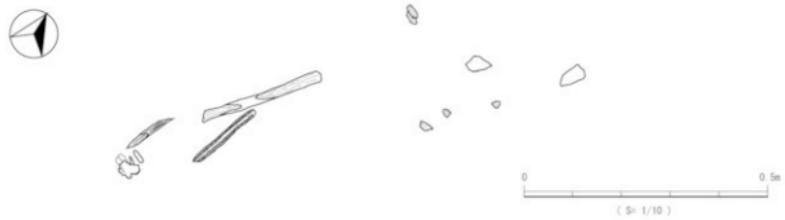
第37図 41 T(半田遺跡)



第38図 41 T(半田遺跡)土坑墓5号



第39図 41T(半田遺跡)土坑墓5号A・B・C人骨



第40図 41T(半田遺跡)土坑墓5号D人骨



第41図 41T(半田遺跡)出土遺物

第20表 41T(半田遺跡)出土遺物観察表

項目 No.	種類 番号	遺跡名	出土区 域	出土 遺跡名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (c.m.)			文様・洞型		色調		量値 (g)	備考	
										口幅 (最大)	底幅 (最大)	高さ (最大)	(外) (内)	(外) (内)	(内)				
92	骨頭	41T			遺物袋		骨頭		頭部					平行	深青	黑色			
93	骨頭	41T		鉢形灰陶系葬組	相	骨頭		骨頭	頭部						凹オーリーブ	底青			
94	骨頭	41T		鉢形灰陶系葬組	相	骨頭		骨頭	頭部						圓窓	白色			
95	骨頭	41T		鉢形灰陶系葬組	相	骨頭		骨頭	頭部						凹オーリーブ	白色			
96	骨頭	41T		鉢形灰陶系葬組	相	骨頭		骨頭	頭部						圓窓	白色			
97	骨頭	41T		鉢形灰陶系葬組	相	骨頭		骨頭	頭部						凹オーリーブ	白色			
98	骨頭	41T		遺石器入土器	鉢?	骨頭		骨頭	頭部						圓窓	白色		石頭褐色?	
99	骨頭	41T		遺石器石鏡	石鏡	骨頭		骨頭	頭部	(0.9)	(4.6)	(3.2)					80		
100	骨頭	41T		石器	石器	骨頭		骨頭	頭部		(4.6)	(1.7)	(1.6)					26	
101	骨頭	41T		遺石器	伊豆藻	骨頭		骨頭	頭部								51		

第21表 半田遺跡トレンチ出土遺物集計表

遺跡名	トレンチ 番号	層位	土 質	表面 状況	表面 特徴	合 計											
半田	41T	一級	13	4	5	3	1		2		1	1	4	2	3	4	41
		二級	1	4	5				3				2	4	2		31
合計			14	8	10	3	1		5				2	1	4	11	72

第6節 赤連遺跡の調査成果

(1) 調査状況

赤連遺跡は現在の城久集落に広がる遺跡と考えられているが、これまで試掘・確認調査を含む発掘調査は一度も行われていなかった。そのため、その広がりや様相などは不明のままであった。平成20年度の確認調査では、集落内に合計9か所のトレンチを設定し調査を行った（第42図）。いずれのトレンチも、遺跡の広がりや内容を確認するためのものである。

調査の結果、42 T～47 Tの6箇所で遺構らしきピットや土坑を検出したが、いずれのトレンチも近代の建物の造成と思われる擾乱層があり混じっており、遺構の時期の特定が困難な状況であった（第43～46図）。

4 Tで検出した土坑と思われる遺構は、深さが8cm程度と浅く、またトレンチ外に平面プランが統いてゆくことなどから包含層の一部である可能性も考えられる。

(2) 出土遺物

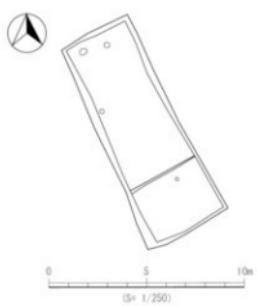
龍泉窯系青磁や白磁などが出土しているが、ほとんどの遺物は表土や擾乱層からの出土である。

第47図102～107は43 Tの擾乱層である。102は白磁椀IV類である。103～106は龍泉窯系青磁である。103は直口口縁椀の口縁部である。104は椀の底部である。やや厚めの釉が高台外面にまで施されている。内底部には印文花が施されている。105は盤の口縁部である。内面に5本脚による文様が施されている。106は盤の底部である。107は青花皿である。小野分類染付皿C群と考えられる。

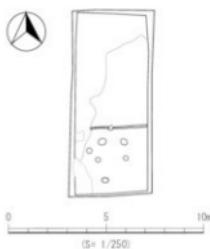
第48図108・109は44 Tの土坑と思われる遺構から出土した龍泉窯系青磁である。108は外反する口縁を持つ椀である。109は外反する口縁を持つ环である。外面に無模蓮弁文が施されている。



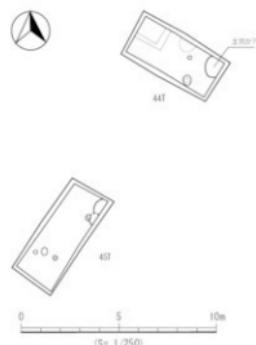
第42図 赤連遺跡トレンチ配置図



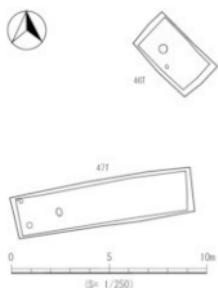
第43図 42T(赤連遺跡)



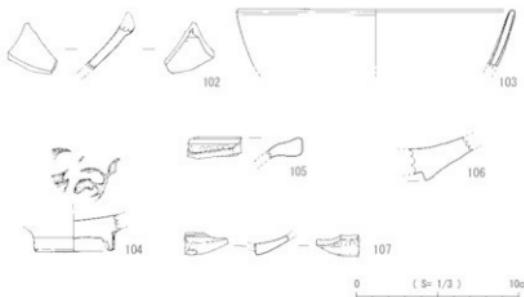
第44図 43T(赤連遺跡)



第45図 44T・45T(赤連遺跡)



第46図 46T・47T(赤連遺跡)



第47図 43T(赤連遺跡)出土遺物



第48図 44T(赤連遺跡)出土遺物

第7節 小結

半田口遺跡・大ウフ遺跡・半田遺跡のトレンチ調査では、盛土保存地区において城久遺跡群Ⅰ期～Ⅲ期（9・10世紀～13・14世紀）の遺構が集中して保存されていることが確認できた。遺物の出土状況から、半田口遺跡の盛土保存区には城久遺跡群Ⅰ～Ⅱ期を主体とした遺構が、大ウフ・半田遺跡は城久遺跡群Ⅲ期を主体とした遺構が良好に残っていると考えられる。

畑経事業工事区内で行ったトレンチ調査の結果を受け、協議の結果、遺跡内の重要な部分と考える場所を最大限に保存することができた。盛土保存範囲は、60,000m²である。

また、工事区外におけるトレンチ調査については、8Tを設定した半田口遺跡隣接地、9T～16T・20Tの前畑遺跡隣接地、37T・38Tを設定した大ウフ隣接地において遺構

が良好に保存されていることを確認した。遺物の出土状況から、8T・9T～16T周辺には城久遺跡群Ⅱ期の遺構が、20T・37T・38T周辺には城久遺跡群Ⅲ期の遺構が残っていると考えられる。20Tは現在の瀧川集落内、37T・38Tは現在の城久集落内に設定したトレンチであり、それぞれの遺跡が現在の集落内的一部分に広がってゆく可能性があることを確認した。

なお、赤連遺跡のトレンチからは遺構らしきピットや土坑を検出しているが、近代の造成などの搅乱層が入り混じる状況であったため、今回の調査では遺構の時期の特定ができないかった。赤連遺跡については、城久遺跡群Ⅲ期の遺跡が広がっている可能性があることから、今後も調査を継続的に続け遺跡の内容や広がりを明らかにしてゆく必要がある。

第22表 43T（赤連遺跡）出土遺物観察表

探査 No.	探査 番号	遺跡名	出土区	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			文様・調査		色調		重量 (g)	備考
										口径 (底大農)	底径 (底大幅)	高さ (底大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)		
第42回	102	赤連	43T	埋灰	石場	IV段	IV段	無部	無部	12.1	—	—	灰白	灰白	—	—	3.88	
	103	赤連	43T	埋灰	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	IV段	無部	—	—	—	灰オーブ	灰オーブ	—	—		
	104	赤連	43T	埋灰	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	IV段	無部	—	—	—	オーブ灰	オーブ灰	—	—		
	105	赤連	43T	埋灰	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	IV段	無部	—	—	4.5	印加文	印加文	—	—		
	106	赤連	43T	埋灰	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	IV段	無部	—	—	—	オーブ灰	オーブ灰	—	—		
	107	赤連	43T	埋灰	新花	II	IV段	無部	無部	—	—	—	明緑灰	明緑灰	—	—		

第23表 44T（赤連遺跡）出土遺物観察表

実測 No.	探査 番号	遺跡名	出土区	出土 遺構名	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			文様・調査		色調		重量 (g)	備考	
										口径 (底大農)	底径 (底大幅)	高さ (底大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
第43回	108	赤連	27	土坑?	I	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	口縫部	11.4	—	—	—	—	—	—	—	オーブ灰	オーブ灰
	109	赤連	27	土坑?	I	縫隙茎葉系青斑	II	IV段	口縫部	14.2	—	—	縫井灰	縫井灰	—	—	—	—	

第24表 赤連遺跡トレンチ出土遺物集計表

遺跡名	トレンチ 番号	層位	土質	遺構名	実測 No.	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値 (cm)			文様・調査		色調		重量 (g)	備考
										口径 (底大農)	底径 (底大幅)	高さ (底大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)		
赤連	42T	埋灰	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	43T	埋灰	—	—	2	—	—	—	—	9.3	1	2.95	—	—	7	0	—	138
	43T	Eゾート	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	44T	埋灰	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
合計		土壤?	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
		—	—	—	4	—	—	—	—	39.3	1	2.98	—	—	7	0	—	154

第IV章 自然科学分析

第1節 城久遺跡群トレンチ調査 41 T（半田遺跡）出土人骨

鹿児島女子短期大学 竹中正巳

はじめに

2006年11月に鹿児島県大島郡喜界町城久遺跡群半田遺跡の41Tから4体の人骨が出土した（第34～40図）。その4体の人骨について人類学的精査を行った結果を今回報告する。

出土人骨

3T-A人骨（男性・壯年後期）^{注1}

全身が遺存する。保存状態は悪い。埋葬姿勢は中世の埋葬に多い仰臥屈葬で、肘と膝を強く曲げている。性別は後頭骨の外後頭隆起の発達が大きいことから男性と考えられる。年齢は下顎の大臼歯部の歯冠の咬耗がMartinの2度であることから壯年後期と推定される。左大脛骨に柱状形成が認められる。

3T-B人骨（女性・壯年後期）

全身が遺存する。保存状態は良くはないが、第3トレンチから出土した4体の中では最も良い。大脛骨の中央から脛骨にかけて遺存していないが、寛骨や大靭骨近位端、足骨の出土位置から考えると仰臥屈葬の可能性が高い。性別は、右寛骨大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と判定される。年齢は、四肢骨の骨端の癒合状況と遺存する下顎大臼歯の歯冠の咬耗がMartinの1度であることから壯年と推定される。

四肢骨は観察できる上腕骨は華奢である。上腕骨は最大長が計測でき、263mmである。この上腕骨の最大長から、ビアソン式で身長を推定すると、143.9cmとなる。上腕骨の最大長からの身長推定は、大脛骨のそれからの身長推定に比べ、繩文人では低めの値がでることが知られているが、143.9cmは高い値ではない。琉球列島や本土各地の中世の女性の推定身長値が146cmを超えているのに比べると本人骨の身長はやはり低い。ただ、弥生～古墳時代相当期の種子島の広田遺跡に埋葬された成人女性の推定身長値は142.8cmであり、これよりは高い。広田や琉球列島の近世の女性の推定身長値が大靭骨の最大長に基づく値であり、上腕骨から推定した本人骨との比較は注意を要するが、琉球列島の近世と弥生～古墳期の女性の間に本人骨の推定身長値が入ることは興味深い。また、本土の中世・近世人女性の推定身長値よりも低いことも興味深い。

3T-C人骨（性別不明・乳児生後6～9ヶ月）

本人骨はB人骨の左上半身上に遺存していた。保存状態は悪い。遺存部位は頭蓋、上腕骨、肋骨、腸骨、大腿骨、脛骨などである。上顎骨と下顎骨中に歯が遺存しているが、いずれの歯冠もまだ頚骨中にあり、口腔内に萌出していない。また、下顎骨は正中部で癒合していない。頸骨中の歯冠の形成状況から判断すると生後6～9ヶ月の乳児と推定される。性別は不明である。頭蓋や四肢骨の解剖学的位置関係から仰臥の姿勢で埋葬されている。左右の膝は大きく開き、両膝とも強く曲がった状態である。

3T-D人骨（性別不明・成人）

長骨片と小骨片が遺存している。同定できたのは、右上腕骨のみであり、他に左右不明であるが腓骨と考えられる骨もある。右上腕骨や腓骨の太さから成人に達していた可能性が高い。性別は不明である。

おわりに

3T-B人骨と3T-C人骨は壯年女性と乳児の合葬例であり、母子の可能性が高い。また、3T-B人骨の推定身長値が高くなっていることは注目しなければならない。

註1) 調査時は、トレンチ名を3Tとしていた為、人骨の名称を3T-○としている。

第2節 城久遺跡群を営んだ人々について

城久遺跡群から出土した保存良好な人骨は少なく、同遺跡群を営んだ人々の形質が詳細に明らかにされている訳ではない。しかし、前畠遺跡7号土塙墓から出土した1号人骨（女性・壮年）や、同じ前畠遺跡4号土塙墓から出土した2体の人骨（1号人骨：男性・壮年、2号人骨：性別不明・10歳前後）、半田遺跡から出土した2体の人骨（1号人骨：女性・成人、2号人骨：男性・壮年）も、城久遺跡群を営んだ人々の形質がわかる人骨である。

前畠遺跡7号土塙墓1号人骨（女性・壮年）の頭蓋は中頭で、低額、広鼻である。顔面平坦度は、前頭部の平坦性は弱いが、鼻部のそれはそれほどでもない。また、同人骨の四肢骨は、上腕・前腕は細い。大腿骨に柱状形成は認められない。身長は、右大脛骨の最大長からピアソン式により、148.7cmと計算されている。

前畠遺跡4号土塙墓から出土した2体の人骨（1号人骨：男性・壮年、2号人骨：性別不明・10歳前後）の上顎中切歯のシャベル型の深さが計測されている。シャベル型の深さは深い。

半田遺跡1号人骨（女性・成人）は上腕骨、大腿骨、脛骨がいずれも細く、上腕骨と脛骨は扁平であるが、大腿骨の粗線の発達はあまりよくない。同遺跡2号人骨（男性・壮年）は、前腕が長く、上腕が短い。同人骨の身長は脛骨から計算された155.9cm程度と考えられている。

縄文時代から古墳時代にかけての奄美・沖縄諸島（琉球列島中部圏）の人々の特徴は、多くの点で共通する。脳頭蓋は短頭の程度が強くて、顔面は低顎性が著しく、低眼窓、広鼻傾向も明らかである。鼻根部の陥凹は顕著で鼻骨の彎曲も強い。顔面の平坦性が弱く、東日本縄文人やアイヌに匹敵する立体的な顔貌をもつ。四肢は著しく華奢である。强度の扁平性、柱状性は認められない。身長は、男性が155cm、女性が145cmを下回るような著しい低身長の人々が多い。また、下顎の切歯を対象にした風習の抜歯が存在した。

中世の奄美・沖縄諸島の人々の特徴は、脳頭蓋が長頭化し、顔面は高顎化し、顔面の平坦性も先史人に比べ強くなっている。身長も、先史人に比べ、高くなっている。この高額・高身長化の原因としては、日本本土をはじめとする地域からの遺伝的影響があると考えられている。

城久遺跡群を営んだ喜界島の中世人は、奄美・沖縄の中世人同様、脳頭蓋が長頭化しており、中世人としての汎日本列島の特徴を持つ。また、深いシャベル型切歯を持つことから、やはり日本本土をはじめとする地域からの遺伝的影響を受けているといえる。しかし、身長が明確に高くなっているとは言い難く、また前畠遺跡7号土塙墓人骨（女性・壮年）の顔面部には、奄美・沖縄の先史時代人と同様の顔面の低顎性、広鼻、前頭部の平坦性の弱さなどを残している。したがって、城久遺跡群を営んだ人々は、奄美大島や沖縄本島の中世人に比べ、

日本本土をはじめとする地域から受けた遺伝的な影響はそれほど強くないと考えられる。

第V章まとめ

第1節 遺構・遺物から見た城久遺跡群

1 出土遺物の検討

(1) 貿易陶磁器

城久遺跡群からは多様な遺物が出土している(第25表)が、ここでは陶磁器によって概況を確認したい。出土遺物のほとんどが大宰府分類で分類することが可能であるため、それに準拠した。出土した陶磁器はA～G期^{*}の遺物が出土している(第49図)。

A・B期に該当する越州窯系青磁は分類不可細片まで含めると179点出土しており、琉球弧内で突出した出土量である。その他白磁碗I類なども数点出土している。C期は白磁碗IV・V類を中心に集中的に遺物が出土している。の中には初期高麗青磁なども含まれており、環東シナ海を巻き込んだ活発な交易活動を行っていたものと推察される。B・D・F期はやや低調である。特にD期は白磁碗VI類・同安窯系青磁・龍泉窯系青磁碗I類などがあるばかりで、極めて低調である。E期以降は比較的安定的に遺物量が推移するようである。

遺物量からI期(A・B期)、II期(C期)、III期(D～F期以降)と分けられる。

遺跡ごとの出土状況を確認すると、山田中西～前畠遺跡までの標高の高い部分はほぼA～C期までに限られる。大ウフ遺跡では全体的に出土量が多くA～G期と長期間にわたって営まれていたことが伺える。遺物の分布からは大ウフ遺跡の標高の高い範囲ではA～C期が、半田遺跡に隣接する標高の低い部分ではE期以降の遺構がそれぞれ集中していることが伺える。

以上のことから、I・II期は山田中西～大ウフ、III期は大ウフ・半田遺跡を中心に遺跡が展開しているといえる。

その他、広域に流通した国産陶器として山田半田遺跡で東美濃産灰釉陶器、半田口遺跡で綠釉陶器、前畠遺跡で十瓶山系須恵器が出土している。

* A期:8世紀末～10世紀

B期:10世紀後半～11世紀

C期:11世紀後半～12世紀前半

D期:12世紀中頃～後半

E期:13世紀前半～前半

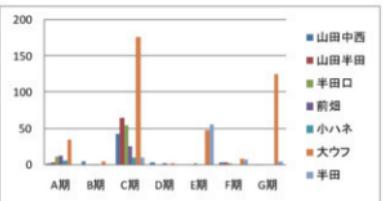
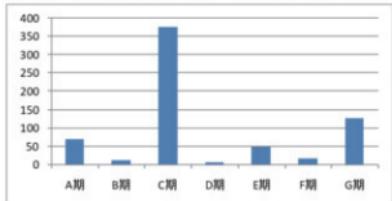
F期:13世紀後半～14世紀前半

G期:14世紀初頭～後半

第25表 城久遺跡群出土遺物一覧

遺跡名	埋蔵土層	土器類		土器類		素地土器		素地土器		遺物器		経年変遷表		経年変遷表		経年変遷表			
		土器	土器	土器	土器	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地		
山田中西	0	0	4	854	0	1	1	0	21	0	0	0	0	102	1	5	4	1	
山田中西	0	4	34	2133	31	3	3	11	71	0	9	74	3	170	3	5	0	1	
半田口	0	7	73	1826	30	6	5	4	116	0	47	152	6	62	11	1	17	0	
前畠	0	12	93	2023	20	9	5	6	347	1	17	114	8	82	32	0	3	1	
小ハネ	0	2	10	399	2	2	4	0	29	0	4	9	2	14	6	1	0	1	
大ウフ	1	54	216	3686	142	15	12	6	232	0	241	536	22	399	35	1	82	0	
平田	0	1	6	29	0	0	0	2	3	0	0	0	0	50	0	0	12	0	
赤瀬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計	7	80	436	10730	1777	34	28	28	819	1	312	885	41	879	68	12	99	2	
遺跡名	埋蔵土層	土器類		土器類		素地土器		素地土器		遺物器		経年変遷表		経年変遷表		経年変遷表			
		土器	土器	土器	土器	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地	素地		
山田中西	0	0	2	26	319	0	0	0	0	0	207	390	0	46	275	82	0	20	
山田中西	0	0	8	90	364	4	2	13	4	0	26	296	108	99	380	436	18	31	
半田口	0	0	2	24	404	0	0	0	0	0	1	436	114	15	67	209	380	1	
前畠	0	1	0	4	112	1	1	2	1	0	1	5	382	153	22	61	569	1589	
小ハネ	0	1	0	0	15	22	0	0	0	0	10	51	20	0	19	12	15	1	
大ウフ	1	4	3	152	2565	0	0	0	34	12	15	0	965	253	61	108	1280	2798	
平田	1	0	7	0	7	185	0	0	0	0	2	0	0	45	13	10	62	0	
赤瀬	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	
小計	1	3	12	19	370	4005	53	3	15	41	12	17	44	2429	1041	228	413	2577	6379

第49図 城久遺跡群出土陶磁器(左:全体、右:遺跡ごと)



(2) 土師器

本遺跡群の特徴の1つに土師器が大量に出土したことがあげられる。奄美の在地土器である兼久式土器がほとんど出土せず、土師器が円筒的の主体である状況は奄美大島の状況とは全く異なる。これまで畠縄事業の報告書内でいくつか分類を示してきたが、今回まとめにあたってこれらの土器を再度整理していきたい。

(ア) 検討資料

約11,000点の土師器片が出土しているが、その大半は胴部片であったため、検討にあたっては口縁部資料を抽出した。また、遺構群からは確実な廃棄年代が求められる資料や記年

資料が出土しなかったことから、一定の幅を持たせた方が良い資料がほとんどである。検討には第26表、第51・52図に例示した資料を用いたが、これらだけでは資料数が少ないため、包含層・柱穴出土資料も用いた。これらの資料も同様に一定の幅があると考えられる。

(イ) 分類

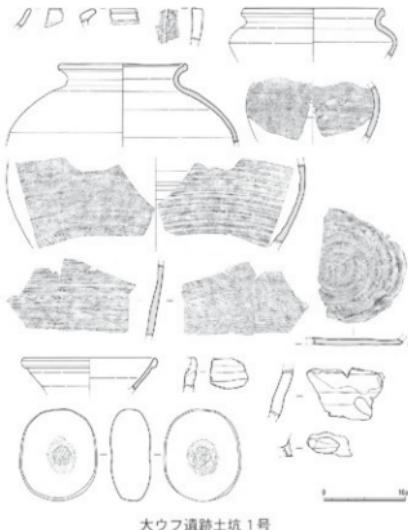
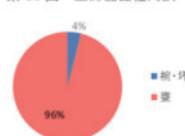
出土した土師器の割合を比べると圧倒的に甕が多いことから、甕を主軸とした分類を行うこととした(第50図)。

口縁～胴部の特徴から以下のようない性に着目し、分類を行った。

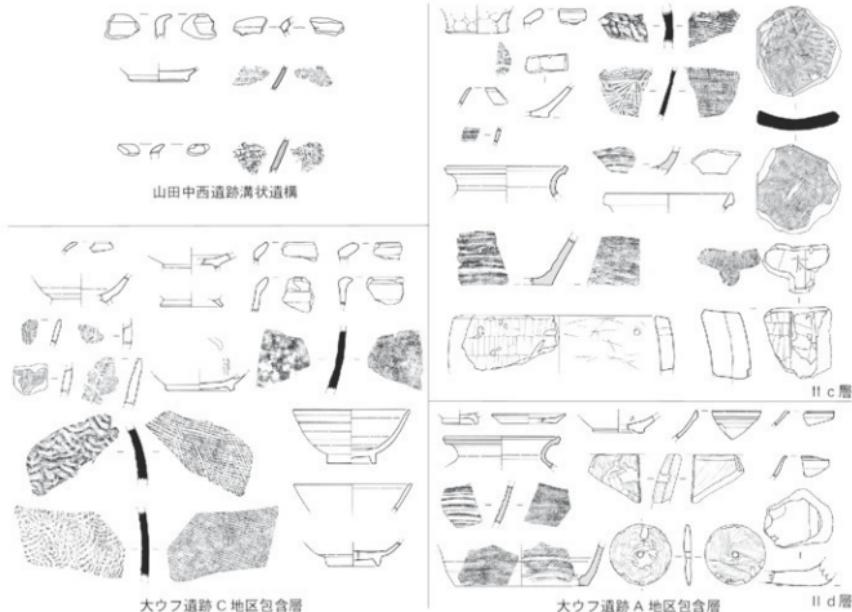
第26表 城久遺跡群遺構・包含層検討資料

遺跡名	通構	出土遺物
山田中西	溝1号	土師器甕、白磁、カムイヤキ
山田中西	溝2号	土師器甕、カムイヤキ
平田口	土坑1号	土師器甕・甕、滑石製石鏡
平田口	土坑2号	土師器甕、布目、滑石混入土器
平田口	土坑5号	土師器甕・板・甕、黒色土器、越州窯系青磁、漆器など
飛塚	土坑墓7号	グスク系土器、初期縄文同安窯系青磁、カムイヤキなど
大ウフ	A地区IIc層	兼久式土器、土師器甕、白磁、カムイヤキ、滑石製石鏡
大ウフ	A地区IId層	土師器甕、白磁、カムイヤキ、滑石製石鏡
大ウフ	土坑1号	土師器甕・甕、布目、白磁、カムイヤキ、滑石混入土器
	C地区包含層	土師器甕・甕、布目、白磁、カムイヤキ、滑石製石鏡

第50図 土師器器種内訳



第51図 城久遺跡群遺構・包含層出土資料(1) S=1/6



第52図 城久遺跡群遺構・包含層出土資料(2) S=1/6

器形:A…口縁部が「く」字状に屈曲し、口径と胴径がほぼ同じもの

B…口縁部が「く」字状に屈曲し、胴径に最大径がくるもの

C…口縁部が「く」字状に屈曲し、口径が最大径になるもの

D…直口口縁のもの

口縁部：口縁部の長さ、口縁内側上部調整、口縁部形状（肥厚三角形状、逆L字状）

器壁：薄手/厚手

口縁下ケズリ：強い/普通

口縁端部形状：平坦/丸い/舌状

これら属性の組み合わせを確認した結果、以下表のような特徴を確認できた（第27表）。

(ウ) 奄美群島での調査成果

奄美大島では奄美市笠利万屋泉川遺跡・土盛マツノト遺跡・長浜金久遺跡、宇検村屋純遺跡などで土師器片が兼久式土器とともに出土することがこれまでの調査で知られている（第28表・第53図）。奄美大島以南では土師器の出土は知られていない。また、喜界島内では小野津オン畠遺跡や同巻畠B-C遺跡などから土師器片が出土している。

奄美大島で出土した土師器壺は泉川・長浜金久遺跡では包含層の年代が $950 \pm 30 - 1120 \pm 20$ B.P.Y.、マツノト遺跡では土師器の形状などから9世紀後半～10世紀前半の年代が想定されている。

第27表 城久遺跡群土師器分類状況

分類	器形	口縁				口縁下ケズリ				器壁				口縁端部				供伴遺物				
		A	B	C	D	口径	口縁下ケズリ	内面接	肥厚	三角	逆L字	強い	普通	薄手	厚手	平坦	丸い	舌状				
1類						25.4	29	○				○	○	○	○	○	○	○			土器	
2類	○		○			17.9	32	○				○	○	○	○	○	○	○			須恵器	
3類	○	○				20.6	3					○	○	○	●	○	○	○			須恵器系青磁	
4類	○	●	○			-	3					○	○	●	○	○	○	○			須恵器	
5類	○	●	○			21.4	24					●	○	○	○	●	●	○			須恵器、滑石	
6類	○	○				18.7	22	○				●	●	○	●	●	●	●	●	●	カムイ・白磁・布目	
7類		○				17.2	22					●	●	●	●	●	●	●	●	●	カムイ・白磁	
8類			○			-	18					○	○	○	○	○	○	○			滑石・布目	

*●=5点以上破片があるもの、口縁と口縁下ケズリ位置の数値は平均値

城久式土器の編年作業を進める高梨修は土師器壺形土器との併存関係からIV期(9世紀後半~10世紀前半)にマツノト・長浜金久遺跡、V期(10世紀後半~11世紀前半)に泉川・下山田遺跡を比定している(名瀬市2003)。

喜界島のこれまでの調査で出土した土師器については古代もしくは中世前半と指摘されている(喜教委1993)。

(エ) 土師器壺形土器の時間的位置づけ

城久遺跡群の出土土師器は、大きく分けると内面ケズリがやや弱く、口縁が長いI・2類、口縁内面のケズリがしっかり入り器形が丸みを帯びる3~5類、内面ケズリがやや弱く口縁が短い小型の6・7類、直口する8類に大別できる。

分類1・2はやや直線的な形状が想定されることから、長胴壺的な系譜を引くもの、分類3~5は丸底壺の系統ではないかと考えられる。分類1~3は半田口遺跡土坑5号で出土しているため、最古段階と想定される。

3・4類は比較的精緻に作られ、器壁の厚さが一定である。5類は口縁内面のケズリが強くなり、器壁の厚さが一定でなく、外側調整もナデが徹底していない。3・4類と5類はプロポーションは同じであるが、5類は調整の粗雑さが見られるようになる。

6・7類は5類と同様に口縁内面ケズリが強く入れられるが、5類ほど胴部が張らない傾向が見られる。口縁の長さも短く、小型の製品が多くである。このことは大型品が欠落もしくは小型化といった可能性が考えられる。6・7類は山田中西溝状遺構や大ウフ遺跡包含層資料などから出土しており、これら口唇部がわずかに外反する一群が最終段階になるとを考えられる。

分類8は内面ヘラケズリ技法を用いているが、器形が全く異なり、奄美地域で確認されるグスク系土器に酷似していることや突起状取手が付くことから両者の折衷タイプのように

第2表 奄美・喜界出土土師器

	遺跡名	分類	器種	遺構 / 層位	併存資料	備考
奄美大島	泉川遺跡	5-6	壺		兼久土器・須恵器等	950 ± 30BP(Y(マキガイ))
	長浜金久遺跡	3or5	壺	19層	兼久土器・須恵器等	1120 ± 20BP(Y
	下山田II遺跡	7	壺	-	カムィヤキ?	-
	マツノト遺跡	1	壺・瓶		兼久土器・鉢器等	明記はないが第1文化層出土か
	京遺跡	-	环・壺?	土坑 12	雞糞堆弁文瓶・漁石混入器	
	フワガネク遺跡	7	壺		兼久土器・鉢器等	土師器模様・長脚壺等
喜界島	尾尻遺跡	-	壺	第2文化層	兼久土器・須恵器等・陶器・鉢器等	-
	奄畠B遺跡	6?	壺	5T II層	铁津など	
	奄畠C遺跡	7	壺	2T	滑石製石鏡・カムィヤキなど	
	オン堆遺跡	6-7	壺	6T ピット	カムィヤキなど	
	前ヤ遺跡	-	环	3TT2層		
	向田遺跡	-	壺	24T3層	白磁(X類・カムィヤキ・朝鮮系無釉陶器)	

感じられる。

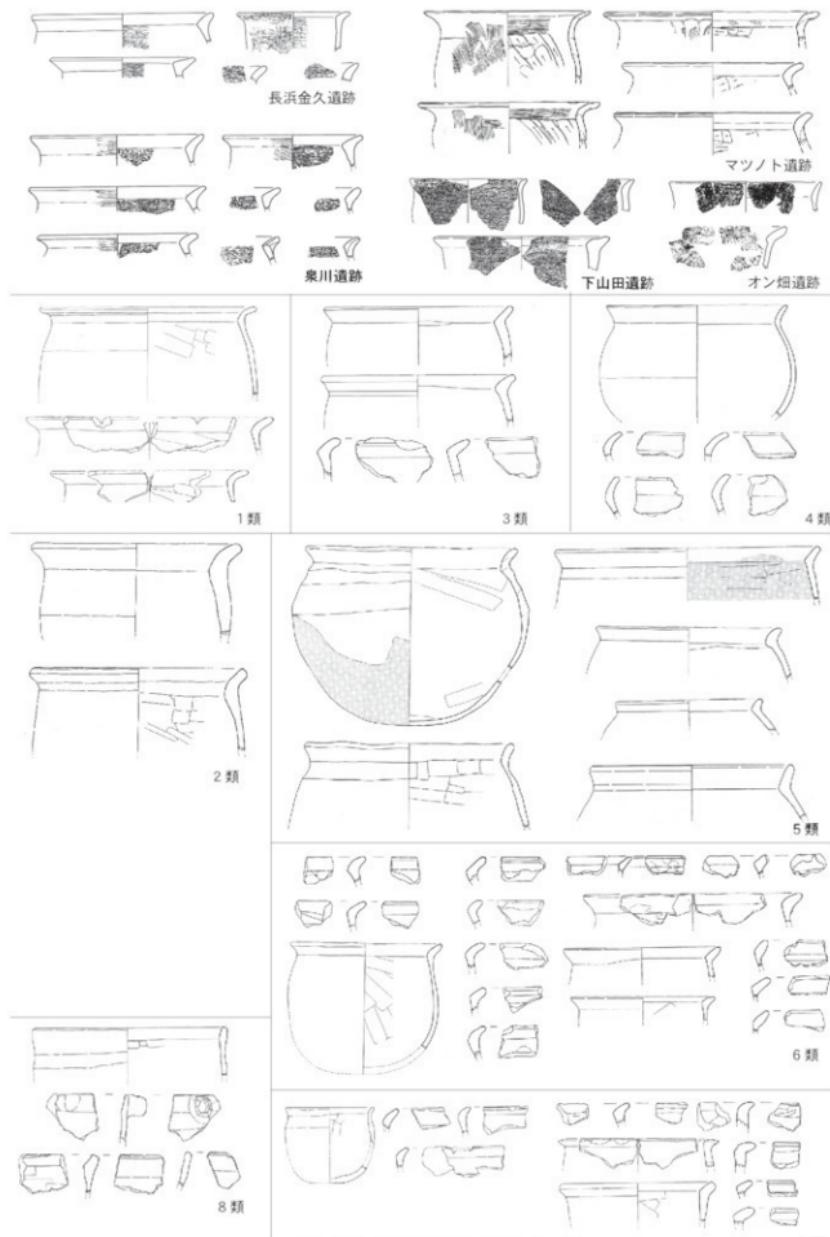
これらから、1~7類には時間差があると推察され、分類1~3から7への変化などを考慮すると、口縁部が長いから短い、器形が張るから張らない、口縁内面のケズリが強いものから強くないもの、口縁端部は平坦から舌状資料が多くなるといった変化の方向性が推察される。

奄美大島出土土師器では泉川遺跡は分類5・6、長浜金久遺跡は分類3もしくは5、下山田遺跡は分類7、マツノト遺跡は分類1になり、これまで想定されている年代と若干の誤差はある部分もあるが大きな矛盾はないものと考えられる。

これらより1~4類は9世紀後半~10世紀代、5~7類は10世紀後半~11世紀代、その中でも6・7は11世紀後半頃と推察される。8類も6・7類前後の時期と考えられる。

また、城久遺跡群から出土した土師器壺形土器はその調整や器色・胎土が、鹿児島で生産された土師器壺とは異なる印象を受ける。本遺跡群で出土した土師器壺の大半は在地で模倣した土師器模倣土器の可能性が高い。さらに、奄美大島でこれまで出土している土師器壺も実見できた範囲内であるが、マツノト遺跡で撮入系土器とされているもの以外全て城久遺跡群と同様の調整・胎土であったことから、同様のことが推察される。

今回の分類が周辺地域に当てはまるかどうかについては、検討していく必要がある。



第 53 図 奄美・城久遺跡群出土土器 (S=1/6)

7類

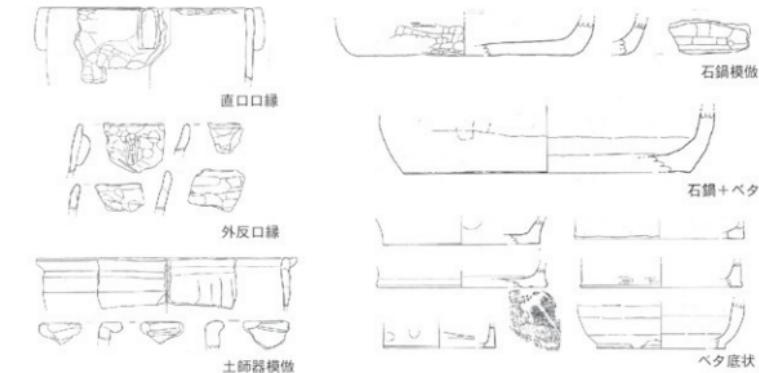
(3) 滑石混入土器

こちらも土師器と同様に胴部資料が多く、形状が不明瞭なものが多い。資料数が少ないが口縁部形状・底部形状・調整方法に着目し、分類を行った(第54図・第29表)。

口縁部は直口のものとやや外反するものが見られ、直口には方形の縦耳が、外反には縁が取れた縦耳が貼付けられる。供伴遺物から外反するものには白磁碗が共伴する資料が見られ、直口形状のものはやや時間差があることが推察される。

底部は顯著な違いが見られ、石鍋を模倣した形態とベタ底状のものがある。石鍋模倣の器皿調整はケズリ・ナデが見られたが、ベタ底状はナデ調整のみであった。また、石鍋模倣には忠実に模倣したものとベタ底の形態が見られる。

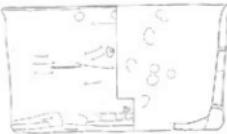
口縁部～底部まで残存している資料は出土していないが、



参考資料 グスク系土器



前畠遺跡土坑墓7号



沖永良部島鳳雄洞遺跡

第54図 城久遺跡群出土滑石混入土器 (S=1/6)

第29表 滑石混入土器分類状況

部位	口縁形状		底部形状		調整		備考	共伴物
	直口	やや外反	土器模	石鍋	ベタ	ケズリ		
口縁部	○					○	縦耳を粘付	土器器环、布目
	○					●		滑石、石器
	○	○				○	胴部内面調整石鍋模倣あり	石器
		●				●	縦耳口縁からやや下に粘付	滑石、カムイ、白磁IV
底部			●		○	○		滑石、カムイ、白磁IV
			○	○	○	○		カムイ、白磁V
				●	●	●		滑石、カムイ、白磁IV

*● = 5点以上破片があるもの

(4) 布目压痕土器

破片資料がほとんどであったが、口縁部形状・胎土・混和材・器壁・器色に着目し、分類を行った(第30表)。口縁部資料が少なかったため、胎土に着目し分類を行った。

主に泥質と砂質に大別でき、泥質のものは器壁が薄く、混和材に3~5mm程の礫が混入し、暗褐色~橙色で比較的焼成良好でしっかりとしている資料が多い。砂質は器壁が厚く、混和材に1mm程の白色粒を用い、赤色を呈している資料が多い。焼成がやや弱く表面がザラザラしている。また、厚手資料の胎土には金色雲母が混入している事例がある。

これまでの調査で確認されている豪久式土器との併伴関係などから、古代には搬入されていると思われるが、今回の分類では明瞭な時期は確認できなかった。いずれも白磁が併伴する事例があることから、11世紀後半~12世紀前半頃まで使用されていたと見られる。

(5) 滑石製品

總点数3,590点、総重量約83.5kg出土している。出土した滑石製石鍋は1点だけ小ハネ遺跡で鉛状の可能性のあるものが出土しているが、それ以外の口縁部が確認できる資料は縦耳を有するものであり、木戸編年II類(11世紀頃)、山本・山村編年中世I期(11世紀後半~12世紀前半)に該当する(木戸1995、山本・山村1997)。

滑石製石鍋に対しては様々な加工が施されており、破断面に握り切り技法を用いた痕跡が見られるものや貫通穿孔が施されているものがある。穿孔部には鉄片が混入したままの状態のものがある。石鍋に加工された痕跡が認められるものは全体の約29%である。

これらは石鍋としての機能を終えた際に加工された可能性と、元々破片の状態で持ち込まれた可能性が考えられる(池田2003)。

平面や断面で見られる擦痕からは、薄い板状の工具で擦り切り技法を用いて浅い切込みを入れ、折って割り取りをし、ある一定のサイズへ加工しているようである。これらは二次加工品の素材となった可能性が考えられる。

二次加工品に関してはバレン状・棒状・錐状など様々な形があり、用途に合わせて加工していたようである。バレン状

製品は平面を方形状もしくは円形状に加工し、つまみの部分に貫通穿孔が施されているのが特徴である。また、形状は良く似ているが、貫通穿孔がないものもある。このバレン状製品については宮崎県八島遺跡で石鍋にバレン状製品が伴った状態で出土しており、補修具としての利用方法が推定されている。本遺跡でも被熱痕があり、つまみ部分の穿孔か所の上部から破損しているものが多いことから、同様に補修具として使用されていた可能性が高い。

(6) カムイヤキ・朝鮮系無釉陶器

カムイヤキは徳之島伊仙町で生産された製品で、鹿児島から沖縄まで広く流通した製品である。器種は壺・甕を中心に生産されており、碗や鉢なども生産されている(伊仙町教育委員会2005)。

朝鮮系無釉陶器は北部九州を中心に研究がなされ、本土系須恵器と胎土や焼成、調整等が異なる点を手がかりに分類されている(山本2003、山崎1993、赤司1991)。カムイヤキの窯の構造などは朝鮮系の窯構造との類似性などが指摘されており、製品も酷似している。

城久遺跡群からは両者が混在して出土したが、以下の特徴から判別を行った。

- ①カムイヤキは朝鮮系無釉陶器と比べ胎土は粗く、混和される砂粒の量も多い。
- ②カムイヤキの割れ口の破面は凹凸が認められ、隙間も多い。
- ③カムイヤキはナデ調整が徹底されていないため、内外面ともに成形痕を多く残している。

出土したカムイヤキの大半はA群であるが、わずかにB群がみられる(伊仙町教育委員会2005)。B群が見られるのは標高の低い大ウフ・半田遺跡に限られている。また、墓に埋葬されているものは全てA群であり、11~13世紀前半頃に位置付けられる。朝鮮系無釉陶器もこれまでの調査成果から同様な年代が想定される。

(7) 鉄製品

遺跡群全体で鉄製品は62点出土している(第55図、第31表)。出土数は刀子・釘が最も多く出土している。刀子の

第30表 布目压痕土器分類状況

胎土	口縁部		混和材		器壁		器色	共伴遺物
	平場	苦状	織	白色粒	薄い	薄い		
泥質	○	●	●			●	橙	土師器、滑石、カムイ
	○	○	●			●	暗~橙	土師器、滑石、白磁
	○			○		○	暗~橙	土師器、滑石、カムイ
砂質	○		○	○	○	○	赤~橙	白磁皿
		●		●		●	赤~橙	滑石、白磁
	○	○	●	●	●	●	赤~橙	土師器、滑石、カムイ、白磁IV

一部には木質物が付着しているのが確認できたものがある。

今回の分類にあたって、これまで報告書内では釘と報告されているものの中には穿孔具と考えられる資料が見られたため、再分類することとした。これらは、滑石製石鍋第二次加工品の穿孔部に接しているものと同じものである。

その他特殊な用途に使用したと推定されるものに鎌状鉄製品がある。鎌状を呈するが、刃部が身體内側ではなく外側につくものである。基部が袋状になるものと、刀子などと同様の茎を持つものの2種類がある。

鉄製品は出土点数も少なく、小片資料も多いためその様相については判然としないが、鉄製品の土坑墓への副葬は注目される。刀子・短刀・短剣・鑿が副葬されているが、特に山田半田遺跡土坑墓2号の鑿の副葬は注目すべきであろう。南西諸島の中世墓においてまれに刀子が副葬される例はあるものの、鎌状製品のような工具の副葬はまず見られない。工具の副葬が何を意味するのか、南西諸島における鉄製品の副葬事例の増加が特たるところである。



第55図 城久遺跡群出土鉄製品 (S=1/6)

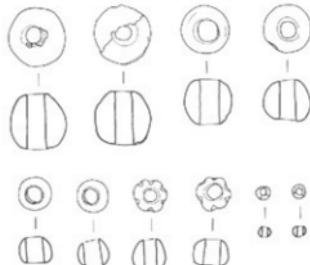
(8) ガラス玉

これまで162点のガラス玉が出土している(第25表)。ガラス玉には表面が白色化しているもの、濃褐色のもの、青色のものが見られる。そのうちのほとんどが表面が白色に風化しているものであった。各ガラス玉には孔と直交方向に筋状の触像が見られ、芯棒に融解したガラスを巻きつけて製作されたものと推定している。また、ガラス玉の成分はケイ素(Si)、鉛(Pb)、カリウム(K)が見られ、カリウム鉛ガラス玉であることが明らかになっている(基督教2013ほか)。

焼骨再葬された墓にはよくガラス玉が副葬されており、小ハネ土坑墓6号では大量のガラス玉が白磁瓶IV類・カムイヤキとともに埋納されていた(第56図)。山田半田・大ウフ遺跡ではガラス玉を着装した状態の土葬人骨を検出しており、火葬される以前にはガラス玉を着装した状態で土葬されていた可能性が高い。

ガラス玉は城久遺跡群以外にも町内志戸桶集落七城周辺からカムイヤキ壺・滑石製石鍋とともに出土していることが知られている(白木原1971)。

今後、類例や産地などの検討を進めていきたい。



第56図 城久遺跡群出土ガラス玉 (S=1/3)

第31表 城久遺跡群鉄製品分類状況

遺跡名	刀子	釘	穿孔具	釘×穿孔具	鎌状	纺錘車	鉄鎌	短刀	短剣	鑿状	鋸状	計
山田中西	2							1				3
山田半田	3	3		2					1	1	1	11
半田口	9	3	2									14
小ハネ		1				1						2
前堀	7	3	3	1		5	1					20
大ウフ	2	5	1					1				9
半田		3										3
計	23	18	6	3		6	1	1	1	1	1	62

2 出土遺構の検討

(1) 掘立柱建物跡

(ア) 各期の状況

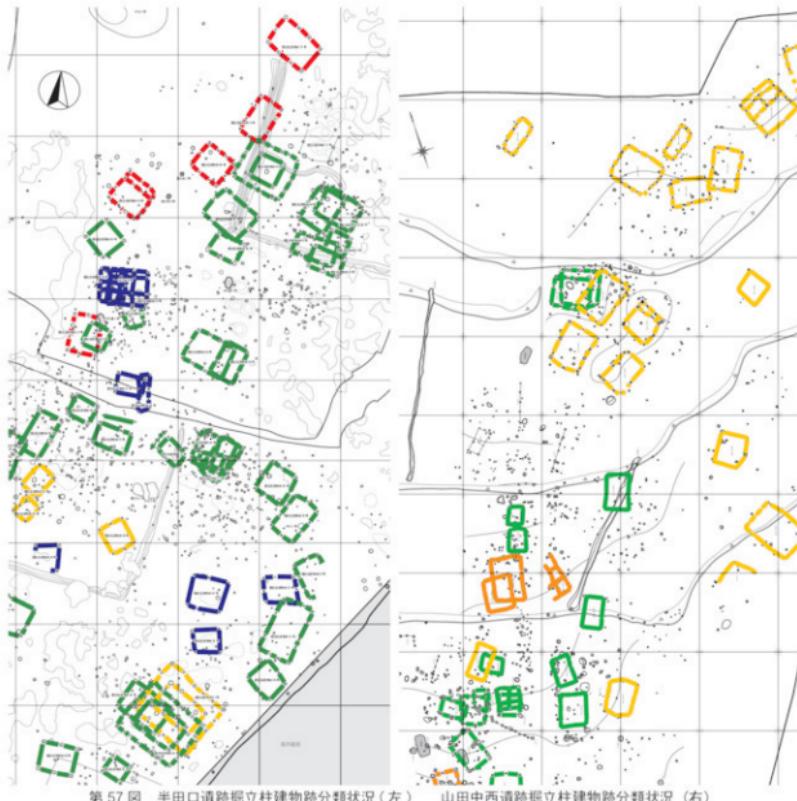
掘立柱建物跡はこれまで 484 棟の建物跡を確認している。これまでの掘立柱建物跡の傾向や陶磁器などの出土状況から I～II 期の建物群は重複しながら建築されていることが想定されたため、まず出土した土器群の中で特に古そうな様相を示す壺 1～4 類が出土した遺構を確認した。その結果、山田半田・半田口・大ウフ遺跡で建物跡を確認した（赤）。確認できた遺構はいずれも柱並びがほぼ左右対称で整然としている建物であった。

半田口遺跡では赤建物を 4 棟確認した（第 57 図）。これらの建物と同主軸方向をの建物跡が周辺に見られることから、同時期もしくは近い時期の遺構群であると推定した。これら

は N 20°40' E・N 50°70' W（緑）に主軸を持つ建物跡である。ただし、これらの中には柱間間隔が等間隔で左右対称なものと柱間間隔が不揃いで、非対称なものが見られ、不揃いなものには白磁が見られることから、この軸向きの建物跡は時期差を内包しているものと推察される。

次に II 期に想定される大宰府 C 期の白磁が出土した建物跡の抽出を行った。全ての遺跡で確認でき、平面プランは 1 × 1 や 1 × 2 間などの建物が大半であった。それらの中で柱痕跡が確認できたのは四面庇状大型掘立柱建物跡 2 棟と 1 × 1 間建物跡 1 棟である。四面庇状大型掘立柱建物跡は山田半田 41 号・半田口 27 号が該当する。山田半田遺跡は前段に示した軸向の建物跡が、半田口遺跡ではほぼ同軸方向の建物が重複している状況が見られる。

また、山田中西遺跡では遺跡内の北側と南側で主軸方向が



第 57 図 半田口遺跡掘立柱建物跡分類状況（左） 山田中西遺跡掘立柱建物跡分類状況（右）

異なる建物群が展開しており、前段主軸の建物跡（緑）が南側にN40°60'E・N30°50'W（黄）が北側に分布している。黄色建物は中世白磁が出土することが多いことから、この軸向きの建物群はⅡ期の様相を示す可能性が高いと推察される。その他東西南北軸（橙）を主軸にする建物跡も出土している。

Ⅲ期は陶器の出土状況から大ウフ～半田遺跡に展開していると考えられる。この範囲では溝状造構が縦横に見られ、溝と主軸の建物跡が見られる。主軸方向は黄色建物と同じ向きである。

（イ）小結

城久遺跡群では主に3つの主軸方向が見られ、東西南北軸±20°（橙）、N20°40'E・N50°70'W（緑）、N40°60'E・N30°50'W（黄）である。

これらの中で山田半田～半田口遺跡にかけては緑建物が最も多かった。これらの建物を構成する柱穴からは白磁・滑石・越州窯系青磁が見られ、古代～中世まで継続して作られ続けた建物の向きと見られる。これらの中で柱穴配置が左右対称の建物が古代の様相を持つもので、柱穴間隔が不揃いなものや平面プランがいびつな造構は中世的な様相を持つ建物と推察される。

黄建物は山田中西・小ハネ・前畠・大ウフ遺跡に多く見られる。白磁が出土する建物が多く見られることから、Ⅱ期の建物跡と考えられる。ただし、大ウフ遺跡の標高の低い部分では、龍泉窯系青磁を主体とした、溝状造構に囲まれた集落跡が出土しており、Ⅱ期までの様相とは異なる状況が推察される。

橙建物は各遺跡にわずかにみられ、主体とはならない建物の向きである。南北より東西を主軸にした建物が多く見られる。古代～中世まで使用された建物方向である。こちらも緑建物と同様に柱穴配置が対称な建物が古代の様相をもつ建物である可能性が高い。

なお、Ⅰ期の造構は建物のコ字型配置などいわゆる官衙的な造構配置は認められなかった。

四面底状建物跡はⅠ期末～Ⅱ期頃のものと考えられる。山田半田遺跡に最大規模の建物が建築され、Ⅱ期の中心的役割を果たした建物跡と考えられる。

Ⅰ～Ⅱ期の造構群には溝状造構など空間的仕切りがほとんど見られないが、Ⅲ期になるとそれが多数見られるようになる特徴がある。

（2）土坑墓

49基墓を検出した。以下の項目に着目し集成を行った（第58図・第32表）。

平面形状：円形/楕円形/長方形

サイズ

葬法：火葬/土葬

焼骨形状：方形/円形

灰敷き：有/無

焼骨再葬：有/無

副葬品内容：C14年代測定値、焼骨・頭位方向

*焼骨再葬と認定したのは焼骨が一定の塊であること、土坑底面ではなく途中に安置されているもの。

副葬品の内容から古代の墓と見られる資料は大ウフ遺跡土坑墓1号である。円形で須恵器の藏骨器が中央に安置されている。この形状の墓は奄美市笠利宇宿貝塚で1例確認されている。本遺跡群の事例はこれについて琉球弧で2例目である。

他の円形状の墓はカムイヤキ壺が用いられている。これらは藏骨器として使用するのではなく、副葬品もしくは供斎品として利用されており、壺の周囲に焼骨の塊が出土する。副葬品はカムイヤキ壺のみのものや、白磁碗・皿が共伴する資料があることから、焼骨再葬が始まるのは11世紀代からと推察され、前代の習俗を知っている人々によって行われたと推察される。

長方形の墓は火葬と土葬が見られるが、火葬のものは全て焼骨再葬である。小ハネ土坑墓2号では出土状況から掘り返した痕跡が確認でき、長方形の土坑内で一度土葬を行った後に掘り起こして、周辺で火葬を行い、同じ土坑内に安置するといった工程を推定している。他の長方形土坑では明瞭なラインは確認できなかったが、同様に副葬品が土坑の片隅に寄せられていることなどから同じ工程が行われた結果であると考えられる。副葬品はカムイヤキ壺、白磁碗II・IV・V類、白磁皿III・VI類などが見られる事から11世紀後半～12世紀半ば頃まで行われていたと考えられる。

土葬のものは副葬品を持つものと、持たないものがある。副葬品があるものは焼骨再葬で見られた副葬品とほぼ同じであった。大ウフ遺跡土坑墓3号からは木棺状痕跡が見られ、人骨の首元にはガラス玉が装着され、頭骨上部にカムイヤキ鉢と白磁皿III類が安置されていた。焼骨再葬の最終段階と同じセット関係が確認でき、12世紀半ば頃までは副葬品が安置されるようである。副葬品がないものは、弱い屈葬人骨と強い屈葬人骨が見られる。後者は大ウフ～半田遺跡に多く見られるようになることからⅢ期の様相と見られる。弱いものについてはⅢ期直前の可能性もある。

その他楕円形状の土坑には小型と大型があり、それぞれ火葬・土葬が行われている。大型には前畠7・8号墓があげられる。いずれも土葬で、8号墓では伸展葬で子供の人骨には

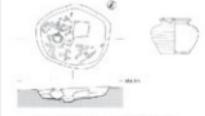
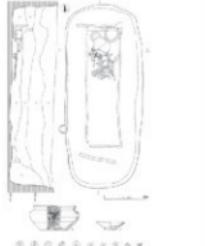
喉元にガラス玉2点が副葬されている状況が確認できる。

(イ) 小結

出土遺物から①須恵器の藏骨器を伴う火葬墓→②カムイヤキ・白磁・ガラス玉等を副葬品とする再葬墓→③副葬品をも

つ土葬墓→④副葬品を持たない土葬墓への変遷が想定できる(第58図)。

②の初現は11世紀頃と推察される。また、②→③への焼骨再葬から土葬へ変わる時期は12世紀半ば頃と考えられる。

	円形状・火葬／焼骨再葬	長方形状・焼骨再葬	長方形状／圓丸方形状・土葬
I 期	 大ウフ：土坑墓1号		
II 期	 山田中西：土坑墓4号	 小ハネ：土坑墓2号	 大ウフ：土坑墓3号
III 期		 小ハネ：土坑墓6号	 大ウフ：土坑墓8号 半田：土坑墓1-2号

第58図 城久遺跡群土坑墓変遷図 (S=1/60)

(3) 焼土跡

被熱面が見られる遺構は84基出土している。各遺跡から出土している焼土跡及び焼土域を伴う土坑跡の集成を行った。集成と同時に、形態・大きさ・堆積状況に注目し分類を行い、以下のように大別した(第59図・第33表)。

1類：直径約30cmの円形。平面では2基重複するように見られ、片側は柱穴状に掘りこまれ深くなっているものもある。

2類：直径約30cmの円形。床面がよく焼けている。焼けた範囲が馬蹄形状に見えるものもある。その上層では、炭化物や鉄滓を含む層が堆積している。直径が50cmになるものもあることから大型と小型が存在する可能性がある。鉄滓などの堆積層がなく、被熱面のみのものもある。

第32表 城久遺跡群出土土坑墓一覧

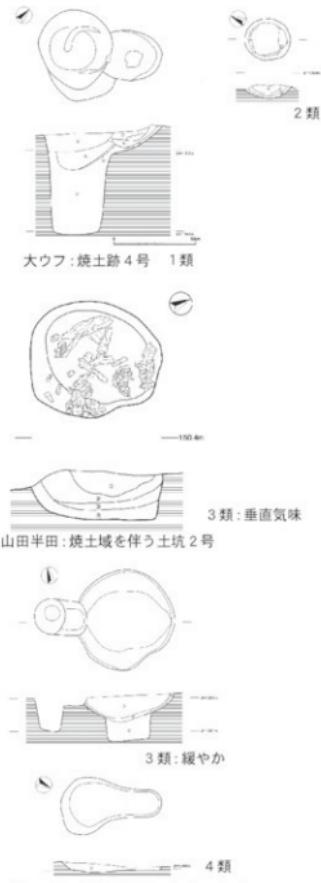
遺跡名	遺構名	遺構内出土物	長径×短径	形状	通体処理	周辺汚染	被熱層	断面	所見	補正C ₁ (v/f)	備考
山田中西	土坑墓1号	カムイヤキ、白磁V、薄石	72×55	楕円形	火葬	-	-	-	不明	-	カムイ波状一筆書き
山田中西	土坑墓2号	カムイヤキ	215×100	圓形	火葬	○	方形状	-	成人	-	カムイ圓錐有
山田中西	土坑墓3号	-	100×100	圓形?	火葬	-	-	-	-	-	-
山田中西	土坑墓4号	カムイヤキ	80×80	円形	火葬	○	方形状	○	成人	930±25	カムイ波状一筆書き
山田中西	土坑墓5号	カムイヤキ、白磁V	55×48	円形	火葬	○	方形状	○	成人	950±40	カムイ波状一筆書き、6号を切る。
山田中西	土坑墓6号	カムイヤキ2、刀子、黒墨葉裏 スヌヌ3	145×85	圓形	火葬	○	方形状	○	成人	940±25, 980±40	C3植物寄り
山田中西	土坑墓7号	白磁II 1a、白磁周VI 1b	206×98	圓形	-	-	-	-	-	-	-
山田中西	土坑墓8号	カムイヤキ、白磁V、ガラス玉	221×120	圓形	火葬	○	方形状	-	成人	-	カムイ無文
山田中西	土坑墓9号	黒製品(焼刀?)、ガラス玉9	71×45	圓形	-	-	-	-	-	-	-
山田中西	土坑墓10号	カムイヤキ	70×56	圓形	-	-	-	-	-	-	カムイ(?)
山田半田	土坑墓1号	カムイヤキ、白磁V、V型 鋸歯、刀子、漆黒葉裏骨	95×52	円形	火葬	-	-	-	不明	-	-
山田半田	土坑墓2号	漆黒葉裏骨、漆製品(柄柄?)、漆 製品(柄?)、漆	142×110	円形	-	-	-	-	-	1210±30, 1120±30	-
山田半田	土坑墓3号	カムイヤキ、白磁周VI 1a、ガラ ス玉5	56×49	楕円形	火葬	○	不定形	-	成人	-	-
山田半田	土坑墓4号	-	88×30	圓形	火葬	-	-	-	-	-	被熱・炭化物層が土坑内に充填
山田半田	土坑墓5号	カムイヤキ	93×115	圓形	火葬	○	不定形	○	-	940±30	-
山田半田	土坑墓6号	舞文鏡、ガラス玉4	378×39	圓形	土葬	-	-	-	男・老年	-	被熱層・骨盤上に石灰岩
山田半田	土坑墓7号	-	42×42	圓形	火葬	○	不定形	○	不明	-	-
半田口	土坑墓1号	-	768×62	圓形	土葬	-	-	-	-	1250±20	腰153号を切る
半田口	土坑墓2号	-	85×85?	圓形?	火葬	○	-	-	-	1050±20	-
半田口	土坑墓3号	白磁、刀子	85×60	圓形	-	-	-	-	-	-	-
半田口	土坑墓4号	-	722×78	圓形	土葬	-	-	-	成人	-	被熱
半田口	土坑墓5号	-	204×95	圓形	土葬	-	-	-	老年	140±20	カムイ1角複
小八木	土坑墓6号	-	501×46	圓形	土葬	-	-	-	-	-	被熱?
小八木	土坑墓7号	[劇]カムイヤキ、ガラス玉2	270×152	圓形	火葬	○	方形状	-	成人	-	カムイ圓錐有
小八木	土坑墓8号	[劇]カムイヤキ2、白磁周VI 1a(?) 黒色土器	189×60	圓形	土葬	-	-	-	-	-	-
小八木	土坑墓9号	ガラス玉? 14	369×100	圓形	-	-	-	-	-	-	被熱・遺物層
小八木	土坑墓10号	-	248×100	圓形	火葬	○	円形状	-	-	1020±30	地山面にPt状遺構有。4-6号を切る。
小八木	土坑墓6号	[劇]カムイヤキ2、白磁V 1a/ 1b(?)	234×104	圓形	火葬	○	円形状	○	成人	-	カムイ波状一筆書き。
前指	土坑墓1号	-	-	圓形	火葬	○	方形状	○	-	970±30	-
前指	土坑墓2号	-	-	圓形	火葬	-	-	-	-	-	被熱・炭化物層が土坑内に充填
前指	土坑墓3号	-	315×52	圓形	土葬	-	-	-	-	-	-
前指	土坑墓4号	ガラス玉14	-	圓形	土葬	-	-	-	-	-	-
前指	土坑墓5号	-	83×36	圓形	土葬	-	-	-	-	-	-
前指	土坑墓6号	-	110×49	圓形	土葬	-	-	-	-	-	-
前指	土坑墓7号	[地]在地土器、須恵器、カムイ ヤキ、白磁V、V型、蓋、初期期203×172 厘米、ガラス玉など	246×172	圓形	土葬	-	-	-	女・壮年 乳・幼兒 25±	955±20, 1080±20	-
前指	土坑墓8号	[劇]ガラス玉2、(他) 越、白磁 V、薄石、カムイ	254×228	圓形	土葬	-	-	-	男・壮年 不・10歳 865±20	865±20	子供喉元にガラス玉
大ウフ	土坑墓1号	[劇]須恵器、(他)兼久、土師罐 壁	65×80	圓形	火葬	-	-	○	不明	1180±20	-
大ウフ	土坑墓2号	カムイヤキ2、白磁周III、ガラ ス玉?	134×115	圓形	火葬	○	方形状	-	-	-	被熱・胸に筋がつく。
大ウフ	土坑墓3号	カムイヤキ、白磁V、薄石	225×95	圓形	土葬	-	-	-	不・壮年	-	被熱・一部燒骨片あり。胸に筋がつく。
大ウフ	土坑墓4号	カムイヤキ、白磁V	130×78	圓形	火葬	○	円形状	-	-	910±20	5号を切る。
大ウフ	土坑墓5号	ガラス玉5	93×76	圓形	火葬	○	方形状	-	-	-	-
大ウフ	土坑墓6号	土師罐壁	56×51	圓形	火葬	-	-	-	-	1230±20	-
大ウフ	土坑墓7号	-	147×76	圓形	土葬	-	-	-	成人	-	被熱・胸に筋がつく。
大ウフ	土坑墓8号	-	88×55	圓形	土葬	-	-	-	成人	-	被熱・一部燒骨片あり。胸に筋がつく。
半田	土坑墓1号	-	155×77	圓形	土葬	-	-	-	女・不明	-	被熱
半田	土坑墓2号	-	150×107	圓形	土葬	-	-	-	男・壮年	-	被熱・胸に筋がつく。
半田	土坑墓3号	-	172×82	圓形	土葬	-	-	-	男・老年 女・老年	-	被熱
半田	土坑墓4号	-	103×90	圓形	土葬	-	-	-	-	-	被熱・胸に筋がつく。
半田	土坑墓5号	-	-	圓形?	土葬	-	-	-	-	-	被熱

のもある。

3類：直径50cm以上の方形・円形・精円形を呈する。床面に向かって垂直気味に掘りこまれるものと緩やかなものとがある。床面直上には炭化物が充填されていることが多く、炭化材を出土するものもある。側面に焼土面が見られる。底部は被熱痕がないものが多い。これまでの報告では焼土域を伴う土坑として報告している。

4類：浅い堆積で不定形のもの。焼土のみもある。

1類は大ウフ遺跡でのみ見られる。特に焼土跡4号では仰卧付近がかき出された際に、かき出しを免れた大型鉄滓が炉底に残存しており、金属学的分析の結果、砂鉄製鍊滓とされている。また、微細遺物の中にも製



第 59 図 焼土跡分類一覧 (S=1/30)

第 33 表 焼土跡分類状況

遺跡名	1類	2類	3類	4類	総計
山田中西遺跡		4	1	1	6
山田平田遺跡	3	15	2	20	
小ハヌ遺跡	6	2	3	11	
前掛遺跡		3			3
大ウフ遺跡	4	12	14	4	34
半田口遺跡			6	4	10
総計	4	28	36	14	84

鍊滓や砂鉄などの製鉄関連遺物が多数出土していることや、他の小型の焼土跡には見られない厚みと被熱度を呈しており、炉壁を立てた製鉄炉があったと推測される。

2類の内部からは精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓・粒状滓・鍛造剝片などが出土していることから、精錬～鍛錬鍛冶工程が行われていた可能性が高い。

3類はいずれも被熱面は弱く、床面は平坦なものが多い。山田半田焼土域を伴う土坑2号では、 181 ± 20 BPの年代が得られていることから、近世の炭窯的な用途に用いられた遺構と考えられるが、炭化物を測定したのはこれのみであるため時期比定については慎重を期する必要がある。

4類は2類とは異なり、幅広く地面が被熱しており、性格は不明である。

以上のことから、1類は製鉄炉、2類は精錬～鍛錬鍛冶を行う炉跡と考えられる。製鉄・鍛冶炉は炭素年代の測定値や周辺の遺構との重複関係から 10～12世紀前半頃の遺構と見られる。3類は炭焼窯の可能性がある。

引用・参考文献

赤司善彦 1991「朝鮮系無釉陶器の流入－高麗期を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』16

池田榮史 2007『律令体制の南進問題』『季刊考古学』第100号
池田榮史編 2008『古代中世の境界領域－キカイガシマの世界－』高志書院

伊仙町教育委員会 2005『カムイヤキ古窯跡Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書12

池畠耕一 1998『考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州』『渡辺誠先生還暦記念論集列島の考古学』

亀井明徳 1993『南西諸島における貿易陶磁器の流通経路』『上智アジア学』第11号

喜界町教育委員会 2006～2011『城久遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(8～11)

新里亮人 2003『琉球列島における窯業生産の成立と展開』『考古学研究』第49卷第4号

荻川真一 2008『城久遺跡群の中世墓』『古代中世の境界領域－キカイガシマの世界－』高志書院

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

中村和美 1997『鹿児島県内における古代の在地土器』『鹿児島考古』第31号

松田朝由 2004『高塚遺跡 第Ⅲ章まとめ 第1節 土器の製作技術と土器様相』『九重岡・踊場・高塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(71)

ヨーゼフ・クライナーほか編2010『古代末期・日本の境界城久遺跡群と石江遺跡群』森話社

第2節 考古学からみえる城久遺跡群

元甲眞之

はじめに

城久遺跡群は、喜界島中央部百之台西側に展開する標高140mから160mに及ぶ隆起珊瑚礁の高段丘上に形成された山田中西、山田半田、半田口遺跡と、それより一段降った標高100mから120mの段丘上にある小ハネ、半田、前畑、大ウツ遺跡より構成されている。また山田中西遺跡が立地する段丘よりさらに南西方向に降った標高50mから30mの段丘上に所在する手久津久地区（川寺遺跡など）でも、花尾神社周辺には城久遺跡群に後続する時期の大規模な遺跡が確認されていて、これら喜界島中央部を占據する遺跡群は、全体を通して古代から中世にかけての日本文化の周縁地域に於ける歴史的動態を物語る稀有な文化財とができる（喜界町教育委員会2006, 2008, 2009, 2011, 2013a, b）。これらの遺跡から出土した中国製磁器などにより、城久遺跡群は9世紀から10世紀、11世紀から12世紀、13世紀から14世紀、14世紀から15世紀と4時期に区分することが可能になった（田中克子氏の分析による）。その中でも遺構が最も稠密に分布するのは平安時代後期以降であり、ここではその時期に焦点を擡げて若干の考察を試みることとしよう。

城久遺跡群の名称について

これまでの発掘調査報告書に使用された「城久（グスク）遺跡群」との名称は、すぐさま奄美・沖縄に展開した独特的の石垣で囲まれた中世城郭遺跡であったとの連想を惹き起させ、琉球王朝による支配地域内に形成された拠点遺跡であることを示唆するものである。奄美大島笠利町赤木名城の発掘調査により、大島や徳之島で今日グスクと呼称されている遺跡には2種類の異なる類型があることが知られるようになってきた（笠利町教育委員会2003、奄美市教育委員会2009a）。一つは赤木名城に代表されるような連郭式山城で、山頂の尾根縫を掘削により区画し、平坦に形成して中核となる曲輪を作り出して土塁を設け、その周囲には幾つもの帶曲輪や縱溝を作り出して防御性を強めた九州各地に見られる中世山城と同一の範疇に納まる類型である。他方は沿岸部の隆起珊瑚礁で囲まれた低平な台地をいくつかに区画して居住域とした類型で、大島の笠利町では万屋グスクや沼留グスク等がこれにあたる（笠利町教育委員会1997、奄美市教育委員会2009b）。なかでも万屋グスクでは庭園遺構が検出されていて、沖縄的な中世遺跡が奄美大島にも展開していたことを明確に物語る資料といいう。

赤木名城と同様な構造をなす山城は、奄美大島ではアニグスクや大城、佐仁グスク、喜瀬グスク、浦上グスクなど西海岸の河川下流域に面する山後にしばしば見かけることが出来るのに対して、ウーバルグスク、宇宙グスク、用安湊グス

クなど沖縄的なグスクは東海岸の隆起珊瑚礁上に占據するという、際立って分布上の対称をなしている（奄美市教育委員会2009b）。こうした遺跡の立地による類型の異なる現象は徳之島大城でも認められ（熊本大学文学部考古学研究室1986）、さらには沖縄の名護グスク、山田グスク（沖縄県立博物館友の会1992）、北谷グスク（熊本大学文学部考古学研究室1991）に於いても赤木名城と同様な鋭切により方形に区画された連郭式の山城を認める事ができる。これら沖縄の中世城は當眞の指摘する「土より成るグスク」であり（當眞1997）、沖縄本島の中部以北地域でもことに西海岸地域に分布していることはその來歴を暗示するかのごとくである。赤木名城は発掘された遺物から12世紀に遡る事が想定でき（奄美市教育委員会2009a）、一方沖縄でも堀切で区画し土塁で曲輪の縁取りをする遺跡では、兼久式土器の系譜をひく「括れ平底」土器が伴出することから、13世紀以降、奄美地方の影響下に九州の山城と類似した構造の防衛施設が沖縄でも形成されたと想定する事が可能となる。

他方奄美大島で発見されるグスクの伴う遺物では、14世紀後半紀に亘るものが最も古い年代を示すのである。この時期以降沖縄の文化的潮流がこの地域に及んだことが窺え（奄美市教育委員会2009b）、その波はトカラ列島にまで確実に達していたことが知られている（熊本大学文学部考古学研究室1994）。

このように対称的に分布する中世山城とグスクを念頭に於いて城久遺跡群を見直すとき、その構造からはどちらとも類似点がなく、古代から中世にかけての集落遺跡と解するのが適切であるとの見通しに達するのである。これら遺跡から採取された穀物にイネ、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、マメ科の種子があり、とりわけエノコログサ科やタデ科、カヤツリグサ科、トウダイグサ科、ニワトコ属、オトギリソウ、イネ科などの雜草もこれらに混じって検出されたことは、遺跡近辺でこれら穀物が栽培されていたことを如実に物語り、城久遺跡群を集落遺跡であるとするとの妥当性が高いことを示唆している。

城久遺跡の建物群

城久遺跡群の建物として高床倉庫、土庇付大型建物、分棟式建物、その他の遺構がある。この遺跡での「首長層」が居住したと想定できる建物としては、山田半田C地区41号の「土庇」を有する大型建物がある。2間×3間に接して8尺幅の縁を4方に設け、さらにその外側に小柱穴を穿って庇としたもので、40号建物もこれと類すると想定できる。外側の庇を「孫庇」とするか「土庇」とするか意見がわかれることもあるが、南北西諸島の民家では土庇であり（野村1961）、喜界島でも南



第60図 花尾神社（土庇付建物）

部地域に多くの分布をみせる（第60図）。いずれにしろ寝殿造りの流れをくむ建物である（野村1961）。この「土庇」を欠いた形式のものは半田口B地区の26号、27号建物でもみられ、幅広い縁を持つことに変わりはない。これらに準ずる建物としては半田口A地区25号、B地区26号、27号大ウフC地区35号、41号、前畠地区24号等を挙げができる。そのほかにも3面や2面に庇を持つ類例は城久遺跡群では少なくない。問題となるのは山田半田遺跡C地区66号建物で、2間×3間の身舎に幅広い縁を有し、その南西側に付属の建物が接している例である。これを分棟式とみるか直屋式と見るか、言い換えれば4間×5間の建物と4間×1間が榜がっているとするか、4間×7間の建物とするかの違いであり、南九州の地域的特長を踏まえて今は宇佐神宮本殿のような分棟式と捉えておく。このような建物は前畠101号、102号小ハネ、32号を挙げることができよう。分棟型建物は熊本県以下の九州の民家に多く認められ（小野1982、沢村1990）、下関市の豊浦郡家と推定される平安時代後半期の秋根遺跡（下関市教育委員会1977）ほか、熊本県の菊池郡家と考えられる平安時代前期の上鶴頭遺跡（熊本県教育委員会1983）でも類例があり、熊本県南部地域の中世期、大丸・藤ノ迫遺跡（熊本県教育委員会1986）、戻ヶ峰遺跡（熊本県教育委員会1988）などでは分棟式建物が「莊官」の居住空間と考えられている。

大ウフD地区59号60号建物のように内部に2柱の主柱穴を設け周囲に方形に柱穴を巡らす、沖縄でグスク時代の「吹出原型」建物とされるもので、柱穴で検出された遺物から13世紀に下る時期のものと思われる。13世紀以降の領主層居住者施設と考えられる。

高倉と考えられる建物としては縦長の2間×3間と1間×2間、2間×2間の掘立柱建物があり、また1間×1間のはば正方形に配置した4本柱建物と平面がやや長方形を呈する2間×3間の6本柱建物がある。中田半田遺跡C地点の58号建物のように側柱を4周にめぐらすものもあり、こうした類型の高倉は南西諸島に存在し（野村1961）、喜界島の瀧川地区でもその存在が確認されている。また4本柱高倉で軒の部分が外転びする例としては平安時代後期の中尊寺跡にみられ（沢村1990）。かつてはこの類型の高倉が列島に広く分布していたか、あるいは特殊な使われ方をしていたのか、今は詳らかではない。このほかに3間×4間もしくは山田半田遺跡D地区77号建物のように、それ以上の柱間を持つ小型の堅穴で構成される建物も南西諸島に見られる。この脚数の多い建物に関して沖縄では「平地式住居」と想定され、その根拠となった資料は後兼久原遺跡1号住居址に炉址が伴うことが挙げられている（北谷教育委員会2003）。しかしこの遺跡の第2号址では柱穴に接して炉址が確認されてい

て、平地式と想定するには無理がある。脚数の多い建物で中央部に2本の大きな柱穴を有する形式の建物は、沖縄独特の低い床をもつ寄棟造りとする(野村1961、沢村1990)ことに妥当性がある。脚数が多く2本の主柱穴がない建物も南西諸島には「しぐら」として多く分布していることが知られている(太田編1977)。この種の高倉は4本柱高倉に比べ、床の高さが低く設えられるのが特徴である。また4本柱の高倉も13世紀以降の段階ではその占有面積が減少して小型高倉に変わってゆく傾向みてとれる。

これ以外に特徴的な建物として山田半田遺跡C地区の土庇付建物の前面にある縦長に配置された1間×3間の建物(43号、47号)がある。こうした長方形で区画を多くもつ建物は「トネリ」の居住所や僧坊と想定されていて(家原2012)、実際熊本市二本木遺跡では文書を扱う官僚の居住空間と考えられ(熊本市教育委員会2007)、類例として先述した秋根遺跡でも同様の規模の建物を見る事ができる(下関市教育委員会1977)。するとこの城久遺跡群では、1間×3間の建物に居住した階層は、土庇付大型建物に隸属する地位にあった集団、いわゆる「家の子郎党」であった可能性も考えられよう。

終わりに

城久遺跡群で採集された遺物から、9世紀から10世紀にかけてのころ北部九州と何らかの関係があったことは窺いいるが、その時期の具体的な遺構は特定しづらい。都城大島畠田遺跡の事例を念頭におくと(宮崎県埋蔵文化財センター2008)、分棟式建物と2間×3間や1間×2間の高床倉庫群が相当する可能性が残されているだけであるが、残念ながら建物群の組み合わせは把握できない。様々に説かれるように大宰府と関係する官衛的性格を帯びた遺跡群であるとすると(鈴木2008、永山2008、Pearson2013)、企画に配置された建物群や石幣、墨書き器、硯あるいは碁石などの官衛通有の遺物類の存在が検出される必要があろう。この時期の遺構の存在が想定される半田口地区では主要部分が保存区域にあたるため、9世紀から10世紀にかけての想定される遺構の性格の解明は今後の調査に委ねられているのである。

11世紀後半から12世紀第四四半期の建物群は土庇付大型建物、3面ないしは4面庇付建物、側柱付高倉、4本柱高倉、從者用と思しき建物などにより構成され、階層性の存在を窺わせる。とりわけ山田半田C地区41号建物の占有面積は約160m²で土庇を含めると210m²に達する。10世紀前半の都家もししくは在庁官人の居住地と想定される都城大島畠田遺跡の中心建物の面積は180m²であり、それに匹敵する規模と云う(宮崎県埋蔵文化財センター2008)。しかしながらこれら城久遺跡群でみられる建物群は、明確な企画性をもって配置されているとは考えがたく、10世紀徵税が請負制になってから出現する中山敏史が指摘する豪族割据型都家に相当する類型(山

中1994)であろう。身舎が2間×3間と畠田遺跡の2間×5間の構造に比べて小型ではあるが、占有面積はほぼ同じであり、またこうした領主層建物を中核とした企画的建物配置は第3期の段階の大きな溝と土塁で囲まれた花尾神社周辺の遺跡群の一部により代表されまで継続されることから、城久遺跡群の11世紀後半以降は南九州的な性格を帯びた領主層により長期に営まれた、官衛に準ずる集落から発展した遺跡群であると位置づけることができる。

輸入陶器にみられる12世紀第4四半期から13世紀第1四半期に属する空白期は、文献に記す鎌倉初期のキカイジマ掃討期にあたる。このことが当時の政治状況を示すものか否かは判断できない。山田中西遺跡と山田半田遺跡の間にはなお未知の遺跡の存在も予想されることから一層今後の検討が待たれる。その中で注目すべきは大ウフ遺跡D地区59号、60号で沖縄のグスク時代の吹出原型建物と構造が一致する。柱穴検出の土器片にカムイヤキがあり、13世紀には吹出原型建物が建設されていたとすると、中世山城や大ウフ遺跡や崩壊遺跡にみられる製鉄技術とともに、領主層の建物構造までいわゆる「グスク時代」の沖縄に影響を与えていたことも想定できる重要な資料となる。

12世紀から14世紀にかけての時期には前畠遺跡や大ウフ遺跡、あるいは崩壊・川寺遺跡に見られるように多数の製鉄炉址などが検出され、南西諸島有数の生産施設が出現している。この生産を背景として、沖縄群島とは区別される独自の世界を構築して来たのであるが、集落は沿岸地域に移動し、遂には城久遺跡群の終焉を迎えることとなった。

14世紀後半から15世紀前半以降、沖縄的な文化要素の北上はトカラ列島まで及んでいたことは、源訪瀬島切石遺跡での神アシャゲと拝所もしくはノロの殿内(鳥袋1950)の発掘によって知られる(熊本大学文学部考古学研究室1994)。この頃になると喜界島も徐々に沖縄文化圏に取り込まれていき、1466年政治的にも琉球王朝の支配下に降るという歴史の歩みを辿ることができる(石上2000)。

以上のように、喜界島城久遺跡群は、古代から中世にかけての時期、文献史料が乏しい日本文化の周縁地帯での歴史的世界の変遷過程を考古学資料で明確に跡付けしうるものであり、とりわけ九州本土と奄美諸島との関係、奄美諸島と沖縄群島との歴史的関係を物語る物の証拠であり、国民の共有財産として永く顕彰することが求められる貴重な歴史遺産といえよう。

本文を草するにあたり、喜界町教育委員会の調査担当者の諸氏と沖縄県盛本勲、奄美市中山清美、伊仙町新里亮人、宮崎県谷口武範、都城市桑畠光博、熊本市鶴島俊彦、網田龍生、熊本大学文学部藤本豊治、国立歴史民俗博物館上野祥史の各位にお世話を頂いた。記して謝意を表す。

引用文献

- 奄美市教育委員会2009a『赤木名城』
- 奄美市教育委員会2009 b『奄美市笠利町グスク詳細分布調査報告』
- 家原圭太2012『奈良時代貴族邸宅における居住施設』『郵政考古紀要』第55号
- 池田榮史編2008『古代中世の境界領域』高志書院
- 石上英一2000『琉球の奄美諸島統治の諸段階』『歴史評論』603号
- 太田静六編1977『九州のかたち民家 草葺きの家を中心』西日本新聞社
- 沖縄県立博物館友の会1992『城』
- 小野重郎1982『九州の民家』慶友社
- 笠利町教育委員会1997『笠利町万屋城』
- 笠利町教育委員会2003『赤木名グスク遺跡』
- 喜界町教育委員会2006『城久遺跡群—山田中西遺跡』I
- 喜界町教育委員会2007『城久遺跡群—山田中西遺跡』II
- 喜界町教育委員会2009『城久遺跡群—山田半田遺跡群』
- 喜界町教育委員会2011『城久遺跡群—前畠遺跡・小ハネ遺跡』
- 喜界町教育委員会2013a『城久遺跡群—大ウフ遺跡・半田遺跡』
- 喜界町教育委員会2013b『城久遺跡群—半田口遺跡』
- 熊本県教育委員会1983『上鶴頭遺跡』
- 熊本県教育委員会1986『大丸藤ノ迫遺跡』
- 熊本県教育委員会1988『鼓ヶ峰遺跡』
- 熊本市教育委員会2007『二本木遺跡群』II
- 熊本大学文学部考古学研究室1986『玉城遺跡』
- 熊本大学文学部考古学研究室1991『北谷城』2
- 熊本大学文学部考古学研究室1994『源訪瀬島切石遺跡』『熊本大学文学部考古学研究室報告』第1集
- 沢村仁1990『民家と町並 九州・沖縄』至文堂
- 鳥袋源七1950『沖縄の民俗と信仰』『民族学研究』第15巻 第2号
- 下関市教育委員会 1977『秋根遺跡』
- 鈴木清民2008『喜界島城久遺跡群と古代南島社会』『古代中世の境界領域』高志書院
- 北谷町教育委員会2003『後兼久原遺跡』
- 當眞嗣一1997『いわゆる『土より成るグスク』について』『沖縄県立博物館紀要』23号
- 永山修2008『文献からみたキカイジマ』『古代中世の境界領域』高志書院
- 野村孝文1961『南西諸島の民家』相模書房
- 都城市教育委員会2004『馬渡遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター2008『大島畠田遺跡』
- 山中敏史1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- Pearson, Richard 2013 Ancient Ryukyu. University of Hawai'i Press

第3節 城久遺跡群の歴史的評価の前提—日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿

石上英一

城久遺跡群及びそれを擁する喜界島の、歴史的発展、日本列島南部の政治・文化及び國際關係に關わる歴史的意義、機能を検討する素材として、また城久遺跡群の遺構・遺物を検討するための歴史情報群として、日本列島の7世紀～13世紀の時期における喜界島及び同島を含む奄美諸島・琉球列島に關する史料（広域概念としての「ヤク」「キカイ」を含む）を編年により提示する。この趣旨に基づく史料の集成は、既に、下記の論考等（史料集成を中心とした論考のみ掲げる）によりなされている。

池邊 順「南島古代史料集成」『伝承文化』2号、成城大学民俗学研究室、1961年12月

松田 清「古代中世奄美史料」、JCA出版、1981年12月

山里純一「日本古代史料にみえる南島」『史料編集室紀要』23、沖縄県教育委員会、1998年3月

『古代日本と南島の交流』、吉川弘文館、1999年7月

永山修一「文献史学からみたキカイガシマ」『喜界島研究シンポジウム「古代・中世のキカイガシマ 資料集」、喜界島郷土研究会・九州國立博物館勇利推進本部、2005年3月

「文献から見たキカイガシマ」池田栄史編『古代中世の境界領域』、高志書院、2008年3月（文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生－」の「中世東アジアの交流・交易に関する新研究戦略の開発・検討」班主任催シンポジウム「古代・中世の境界領域－キカイガシマの位置付けをめぐって－」（2007年2月10～12日）の報告に基づく論文）

「キカイガシマの時代－文献から見る古代・中世の南島－」史跡等総合活用支援推進事業シンポジウム『古代・中世喜界島からの招待状～城久遺跡群の発掘調査成果と未來～』資料集、喜界町・喜界町教育委員会、2015年1月

上記の史料集成の外にも、喜界町誌編纂委員会『喜界町誌』（喜界町、2000年8月）や、喜界島史に關わる文献史料の基礎的研究の諸論考があるが、それらは、史料の採録に關わる論考についてのみ文末に記すこととする。

喜界島（奄美諸島）編年史料稿（7～13世紀編）

○凡例

- (1) 1266年以降の編年史料は、拙著『奄美諸島編年史料 古琉球期編』上（吉川弘文館、2014年5月）に掲げたので、本稿末に網文・引用史料一覧のみ掲げることとする。
- (2) 編年体の体例は、原則、『奄美諸島編年史料 古琉球期編』に準拠するが、組版の便宜のため、若干の簡略化を行う。
 - 1) 網文における國号日本は、便宜、大寶令制定後に使用する。
 - 2) 小字割書《＊＊》、WORDで記せない漢字[偏旁]の如く表示する。
- (3) 遠点は編者による。

○六〇七年（日本推古天皇十六年・隋大業三年・丁卯）

○三月、隋煬帝、朱寛ヲ流求國ニ遣ハス、

〔隋書〕卷三 帝紀第三 炙帝 楊廣 上

大業三年《○中略》三月《○中略》癸丑、遣羽騎尉朱寛使於流求國、

〔隋書〕卷三 帝紀第三 炙帝 楊廣 上

大業六年《○中略》二月乙巳、武貢郎將陳棱、朝請大夫張鎮州擊^(三)流求、破之、獻俘萬七千口、領_二賜百官、

〔隋書〕卷二十四 志第十九 食貨 食

煬帝即位、《○中略》又、使朝請大夫張鎮州、擊_二流求_一、俘虜數萬、士卒深入、蒙犯瘴癘_一、疾疫而死者十八九、

〔隋書〕卷六十四 列傳第二十九

陳棱、字長威、廬江襄安人也、《○中略》

煬帝即位、授驃騎將軍、大業三年、拜武賁郎將、後三歲、與朝請大夫張鎮周、發東陽、兵萬餘人、自義安汎海、擊流求國、月餘而至、流求人、初見船艦、以爲商旅、往往詣軍中貿易、稜率衆登岸、遣鎮周爲先鋒、其主歡斯渴刺兜、遣兵拒戰、鎮周頻擊破之、稜進至低沒檀洞、其小王歡斯老模、率兵拒戰、稜擊敗之、斬老模、其日霧雨晦冥、將士皆懼、稜、刑白馬、以祭海神、既而聞霧、分爲五軍、趣其都邑、渴刺兜率衆數千逆拒、稜遣鎮周、又先鋒擊走之、稜乘勝逐北、至其柵、渴刺兜背柵面陣、稜盡銳擊之、從辰至未、苦闘不息、渴刺兜自以軍疲、引入柵、稜遂填柵、攻破其柵、斬渴刺兜、獲其子烏賴、虜男女數千而還、帝大悅、進稜位右光祿大夫、武賁如故、鎮周金紫光祿大夫、

〔隋書〕卷八十一 列傳第四十六 東夷 流求國

流求國、居海島之中、當建安郡東、水行五日而至、

土多山洞、其王姓歡斯氏、名渴刺兜、不知其由來、有國代數也、彼土人呼之、爲可老羊、妻曰多拔茶、所居、曰波羅檀洞、柵欄三重、環以流水、樹棘爲藩、王所居舍、其大一十六間、彌刻禽獸、多闢鏤樹、似鷺而葉密、條織如髮、然下垂、

國有四十五帥、統諸洞、洞有小王、往往有村、村有鳥了帥、並以善戰者爲之、自相樹立、理一村之事、

男女皆以白紵繩纏髮、從項後盤繞至額、其男子用鳥羽爲冠、裝以珠貝、飾以赤毛、形製不同、婦人以羅紋白布爲帽、其形正方、織闢鏤皮并雜色紵及雜毛以爲衣、製裁不一、綴毛垂螺爲飾、雜色相間、下垂小貝、其聲如珮、綴鑑施釧、懸珠於頭、織藤爲笠、飾以毛羽、

有刀、矟、弓、箭、劍、鉞之屬、其處少鐵、刀皆薄小、多以骨角輔助之、編紵爲甲、或用熊豹皮、王乘木獸、令左右輿之而行、導從不遇數十人、小王乘机、鍾爲獸形、

國人好相攻擊、人皆驍健善走、難死而耐創、諸洞各爲部隊、不相救助、兩陣相當、勇者三五人、出前跳噪、交言相罵、因相射擊、如其不勝、一軍皆走、遣人致謝、即共和解、收取關死者、共聚而食之、仍以髑髏將向王所、王則賜之以冠、使爲隊帥、無賦斂、有事則均稅、用刑亦無常准、皆臨事科決、犯罪皆斷於鳥了帥、不伏則上請於王、王、令臣下共議定之、獄無枷鎖、唯用繩縛、決死刑以鐵錐、大如箭長尺餘、鑽頂而殺之、輕罪用杖、俗無文字、望月虧盈、以紀時節、候草榮枯、以爲年歲、

人深目長鼻、頰類於胡、亦有小慧、無君臣上下之節、拜伏之禮、父子同牀而寢、男子拔去鬚髮、身上有毛之處、皆亦除去、婦人以墨點手、爲蟲蛇之文、嫁娶以酒肴珠貝爲聘、或男女相悅、便相配偶、婦人產乳、必食子衣、產後以火自灸、令汗出、五日便平復、

以木槽中盛海水爲鹽、木汁爲酢、醞米麴爲酒、其味甚薄、食皆用手、偶得異味、先進尊者、凡有宴會、執酒者、必待呼名而後飲、上王酒者、亦呼王名、銜杯共飲、頗同突厥、歌呼蹋踏、一人唱、衆皆和、音頗哀怨、扶女子上膊、搖手而舞、

其死者氣將絕、舉至庭、親賓哭泣相弔、浴其屍、以布帛纏之、裹以葦草、親土而殯、土不掩墳、子爲父者、數月不食肉、南境風俗少異、人有死者、邑里共食之、

有熊、獅、豺、狼、尤多猪、雞、無牛、羊、驥、馬、厥田良沃、先以火燒、而引水灌之、持一插以石爲刃、長尺餘闊數寸、而鑿之、土宜、稻、梁、广禾、黍、麻、豆、赤豆、胡豆、黑豆等、木有楓、栝、樟、松、櫟、楠、杉、梓、竹、簾、果藥同於江表、風土氣候與嶺南相類、

俗事山海之神、祭以酒肴、鬪戰殺人、便將所殺入祭其神、或依茂樹起小屋、或

懸_レ髑髏_ヲ於樹上_ニ、以_レ箭射_レ之、或累_レ石繫_レ轔、以爲_レ神主_ニ、王之所_レ居、壁下多聚_レ髑髏_ヲ以爲_レ佳、人間門戸上、必安_レ獸頭骨角_ニ、

(大業元年 海師何蟹等、每春秋二時、天清風靜、東望依_レ希、似_レ有_レ煙霧之氣_ニ、亦不_レ知_レ幾千里_ニ、三年、煬帝、令三羽騎尉朱寬入_レ海求_レ訪異俗_ニ、何蟹言_レ之、遂與_レ蟹俱往、因到_レ流求國_ニ、言不_レ相通_ニ、掠_レ一人而返、明年、帝、復令_レ寬慰_レ撫之_ニ、流求不_レ從、寬取_レ其布甲_ヲ而還、時、倭國使來朝、見_レ之曰、「此夷邪久國人所_レ用也」、帝、遣_レ武賁郎將陳稜、朝請大夫張鎮州_ヲ率_レ兵自_レ義安_ニ浮海擊_レ之、至_レ高草嶺_ニ、又東行二日至_レ[句隈][辟眼]嶼、又一日便_レ至_レ流求_ニ、初、稜、將_レ南方諸國人_ヲ從_レ軍、有_レ嵐嵐人頗解_レ其語_ニ、遣_レ人慰_レ諭之_ニ、流求不_レ從、拒_レ之_ニ遣官軍_ヲ、後擊走_レ之、進至_レ其都_ニ、頗戰皆敗、焚_レ其宮室_ヲ、虜_レ其男女數千人_ヲ、載_レ軍實_ヲ而還、自_レ爾遂絕、

○本條、長文タルニ依リ、便宜、改行ス、隋書卷七十、列傳第三十五、裴仁基ノ傳ニ、煬帝ノ南討流求ノ記アレドモ、略ス、隋書流求傳ヲ原據ノ一部トセル流求傳ニ、北史卷十二隋本紀下第十二、同卷八十八、列傳第六十六、陳稜、同卷九十四、列傳第八十二、流求國、通典卷一百八十六、邊防二、東夷下、流求、太平御覽卷七百八十四、四夷部五、東夷五、流求、太平寰宇記卷百七十五、四夷四、流求、冊府元龜卷九百五十七、外臣部、土風、流求國及ビ宋史卷四百九十一、列傳卷第二百五十、外國七、流求國アレドモ、今、略ス、流求、瑞求ニ關ハル記、新唐書卷四十一、志第三十一、地理五、泉州清源郡割注、宋史卷百九十三、志第百四十五、兵六、鄉兵三及ビ元史卷二百十、列傳九十七、外夷三、瑞求ニ見ユ、隋書ニ記セル流求國、琉球國トセル説ト台灣島トセル説アリテ、尚、檢ズベシ、流求傳ノ註釋、山里純一「古代日本と南島の交流」參看、

○六〇八年、隋煬帝、流求國ニ使者ヲ遣ハス、尋_レデ、倭國遣隋使小野妹子、隋國使者ノ流求國ヨリ持チ歸リタル布甲ヲ、夷邪久國人所用ト辨ズルコト、及ビ六一〇年二月、隋煬帝、陳稜并ニ張鎮州ヲ遣ハシテ流求國ヲ討ツコト、便宜合叙ス、倭國、小野妹子ヲ隋ニ遣ハスコトヲ記セル日本書紀及隋書略ス、

◎六一六年(日本推古天皇二十四年・隋大業十二年・丙子)

○三月、挾玖人、倭國ニ歸化ス、尋_レデ、五月及ビ七月、挾玖人、倭國ニ至ル、先後併セテ三十人ヲ、朴木ニ安置ス、

〔日本書紀〕卷二十二 推古天皇〇日本古典文学大系

二十四年《〇中略》三月、挾玖人三口歸化、夏五月、夜旬人七口來之、秋七月、亦挾玖人二十口來之、先後併三十人、皆安_レ置於朴井_ニ、未_レ及_レ遷皆死焉、

○六二〇年(日本推古天皇二十八年・唐武德三年・庚辰)

○八月、挾玖人、倭國伊豆島ニ漂到ス、

〔日本書紀〕卷二十二 推古天皇

二十八年八月、挾玖人二口、流_レ來於伊豆島_ニ、

○六二九年(日本舒明天皇元年・唐貞觀三年・己丑)

○四月一日、倭國、田部連ヲ挾玖ニ遣ハス、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇〇日本古典文学大系

元年《〇中略》夏四月辛未朔、遣_レ田部連《闕名》於挾玖、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇

二年《〇中略》九月《〇中略》是月、田部連等至_ニ、自_レ挾玖_ニ、

○六三〇年九月、倭國使田部連等、挾玖ヨリ歸國スルコト、便宜合叙ス、

◎六三一年(日本舒明天皇三年・唐貞觀四年・庚寅)

○二月十日、挾玖人、倭國ニ歸化ス、

〔日本書紀〕卷二十三 舒明天皇三年○日本古典文学大系

三年春二月辛卯朔庚子、披戎入歸化、

◎六五三年（日本白雉四年・唐永徵四年・癸丑）

○七月、倭國遣唐使高田根麻呂等、薩摩ノ曲島ト竹島ノ間ニ遭難シ没ス、五人、神島ニ歸著ス、

〔日本書紀〕卷二十五 白雉四年○日本古典文学大系

秋七月、被_レ遣_レ大唐_レ使人高田根麻呂等、於_レ薩摩之曲、竹島之間_レ、合_レ船沒死、唯有_レ五人_レ、繫_レ胸一板_レ、流_レ遇竹島_レ、不_レ知_レ所_レ計_レ、五人之中_レ、門部金採_レ竹爲_レ筏_レ、泊_レ于神島_レ、凡此五人經六日六夜、而全不_レ食_レ飯_レ、於是_レ襄_レ美金_レ、進_レ位給_レ祿_レ、

○倭國、遣唐使ヲ發遣スルコト、日本書紀卷二十五白雉四年五月十日條ニ見ユ、

◎六五七年（日本齊明天皇三年・唐顯慶二年・丁巳）

○七月三日、是日ヨリ先_レ、觀貨運國人、海見島ニ漂到シ、是日、筑紫ニ至ル、尋_レ、倭國、觀貨運國人ヲ驛ヲ以テ都ニ召シ、七月十五日、飛鳥寺ノ西ニ須彌山像ヲ作り孟蘭盆會ヲ設ケ、併セテ觀貨運國人ヲ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十六 齊明天皇三年○日本古典文学大系

三年秋七月丁亥朔己丑、觀貨運國男二人、女四人、漂_レ泊于筑紫_レ、言_レ臣等初漂_レ泊于海見島_レ、乃以_レ驛召、辛丑、作_レ須彌山像於飛鳥寺西_レ、且設_レ孟蘭盆會_レ、暮娶_レ觀貨運人_レ、《或本云、墮羅人、》

◎六五九年（日本齊明天皇五年・唐顯慶四年・己未）

○七月三日、倭國、唐ニ使者ヲ發遣ス、尋_レ、九月十五日、石布速ノ乗船、南海ノ島爾加委ニ漂到シ、島人ニ誠セラル者アリ、

〔日本書紀〕卷二十六 齊明天皇五年○日本古典文学大系

秋七月朔丙子開戊寅、遣_レ小館下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥_レ、使_レ於唐國_レ、仍以_レ降道奥般夷男女二人示_レ唐天子_レ、《伊吉速博德書曰、『同天皇之世、小館下坂合部石布連・大山下津守吉祥連等_レ船、奉_レ使_レ呉唐之路_レ、以_レ己未年七月三日_レ、發_レ自_レ雞波三津之浦_レ、八月十一日、發_レ自_レ筑紫六津之浦_レ、九月十三日、行_レ到百濟南畔之島_レ、々名母分明、以_レ十四日寅時_レ、二船相從放_レ出大海_レ、十五日日入之時、石布連船橫遭_レ逆風_レ、漂_レ到南海之島_レ、々名爾加委、仍為_レ島人所_レ滅、便東漢長直阿利麻・坂合部連稻積等五人、盜_レ乘島人之船_レ、逃到_レ括州_レ、々累官人送_レ到洛陽之京_レ、》○下略

○南海之島爾加委、或ハ、キカイナラン、

◎六七七年（日本天武天皇六年・唐儀賦二年・丁丑）

○二月、倭國、多福島人等ヲ飛鳥寺ノ西ノ櫻ノ下ニ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇六年○日本古典文学大系

二月《○中略》是月、饗_レ多福島人等於飛鳥寺西櫻下_レ、

◎六七九年（日本天武天皇八年・唐調露元年・己卯）

○十一月二十三日、倭國、倭馬飼部造遣_レ大使卜_レ爲_レ多福島ニ遣ハス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇八年○日本古典文学大系

十一月《○中略》己亥、大乙下倭馬飼部造遣_レ大使_レ、小乙下上村主光欠爲_レ小使_レ、道_レ多福島_レ、仍賜_レ爵_レ級_レ、

◎六八一年（日本天武天皇十年・唐開耀元年・辛巳）

○八月二十日、倭國ヨリ多福島ニ遣ハサ_レタル使人、多福島入ヲ率ヒテ歸京シ、多福國圖ヲ貢ジ、多福島ノ風俗ヲ報ズ、尋_レ、九月十四日、多福島人ヲ飛鳥寺西河邊ニ饗ス、

〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十年○日本古典文学大系

八月《○中略》丙戌、遣_レ多福島_レ使人等、貢_レ多福國圖_レ、其國去_レ京五千餘里、居_レ筑紫南海中_レ、切_レ髮草裳、梗服常豐、一組兩収、土毛、支子、莞子及種々海物等多、《○中略》九月《○中略》庚戌、要_レ多福島人等於飛鳥寺西河邊_レ、奏_レ種種樂_レ、

◎六八二年（日本天武天皇十一年・唐永淳元年・壬午）

- 七月三日、隼人、倭國ニ來リテ方物ヲ貢ス、是日、大隅隼人ト阿多隼人、朝廷ニ於テ相撲ヲ取ル、
〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十一年○日本古典文学大系
- 秋七月壬辰朔甲午、隼人多來貢方物…、是日、大隅隼人与阿多隼人、相撲於朝廷…、大隅隼人勝之、
- 隼人ノ史料、是歲ヨリ後、數多アレドモ、便宜、南島ニ闢ハル記ノミツ掲グ、
- 七月二十五日、倭國、多福人、波久人及ビ阿麻彌人ニ祿ヲ賜フ、
〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十一年○日本古典文学大系
- 秋七月《○中略》丙辰、多福人、波久人、阿麻彌人、賜祿各有差、
- 本條ノ波久、多福及ビ阿麻彌ト笠記サレタルニヨリ、屋久島ノ義ナラン、
- 六八三年（日本天武天皇十二年・唐弘道元年・癸未）
- 三月十九日、倭國ヨリ多福島ニ遣ハサレタル使者、歸著ス、
〔日本書紀〕卷二十九 天武天皇十二年○日本古典文学大系
- 三月《○中略》丙午、遣多福・使人等返之、
- 六九五年（日本持統九年・唐嗣聖十二年・乙未）
- 閏二月二十三日、倭國、使多福ニ遣ハシテ、蟹ノ居スル所ヲ求メシム、
〔日本書紀〕卷三十 持統天皇九年○日本古典文学大系
- 閏二月《○中略》庚午、遣務廣武文忌寸博勢、進広參下諭諸諸田等於多福…、求蟹所…居、
- 六九八年（日本文武天皇二年・唐嗣聖十五年・戊戌）
- 四月十三日、倭國、文忌寸博士等ヲ使シテ南鷦ニ遣ハシテ國ヲ覓ガシム、
〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系
- 夏四月《○中略》壬寅、遣務廣武文忌寸博士等八人于南鷦…覓國、因給戎器…、
- 六九九年（日本文武天皇三年・唐嗣聖十九年・己亥）
- 七月十九日、多撫、夜久、菟美、度感等人、倭國ニ使者ニ從ヒテ來貢ス、尋デ、八月八日、南鷦獻物ヲ伊勢大神宮及ビ諸社ニ奉ル、
〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系
- 秋七月辛未、多撫、夜久、菟美、度感等人、從朝宰而來貢方物…、授位賜物各有差、其度感鷦通中國…、於是始矣、
〔続日本紀〕卷一 文武三年
- 八月己丑、奉南鷦獻物于伊勢大神宮及諸社…、
- 十一月四日 倭國ノ南鷦ニ覓國ニ遣ハシタル使文忌本博士等、歸著ス、
〔続日本紀〕卷一 文武三年○新日本古典文学大系
- 十一月《○中略》甲寅、文忌寸博士、刑部真木等、自南鷦…至、進位各有差、
- 七〇〇年（日本文武四年・唐嗣聖十七年・庚子）
- 六月三日、倭國文武天皇、先ニ遣ハシタル覓國使刑部真木等ヲ肥人ヲ率ヒテ剽劫シタル薩摩比賣、衣許督衣君縣、肝衝雞波等ヲ、筑紫總領ニ勒シテ、決罰セシム、
〔続日本紀〕卷一 文武四年○新日本古典文学大系
- 六月庚辰、薩末比賣、久賣・波豆、衣許督衣君縣、助督衣君已自美、又肝衝雞波、從肥人等…、持兵、剽劫覓國使刑部真木等…、於是、勒竺志惣領…、准犯決罰、
- 七〇二年（日本大宝二年・唐嗣聖十九年・壬寅）
- 八月一日、日本、多撫ヲ征討シ嶋司ヲ置ク、
〔続日本紀〕卷二 大宝二年○新日本古典文学大系
- 八月丙申朔、薩摩多撫、隔化逆命、於是、發兵征討、遂校戸置吏焉、
- 是歲ヨリ後、多福島、南島ニ闢ハル記ノミ採録ス、
- 七〇七年（日本慶雲四年・唐景龍元年・丁未）

○七月六日、日本、使ヲ大宰府ニ遣ハシテ、南嶋人ニ位ヲ授ケシム、

〔続日本紀〕卷四 慶雲四年〇新日本古典文学大系

秋七月《○中略》辛丑、遣_レ使於大宰府、授_レ南嶋人位_レ、賜_レ物各有_レ差、

◎七一四年(日本和銅七年・唐開元二年・甲寅)

○十二月五日、日本ノ使者太朝臣遠建治、南嶋ノ奄美、信覺及ビ球美嶋人ヲ率ヒテ、南嶋ヨリ歸著ス、

〔続日本紀〕卷六 和銅七年〇新日本古典文学大系

十二月戊午、少初位下太朝臣遠建治等、率_レ南嶋奄美^(GOSHU)、信覺^(CHINSHI)及球美等嶋人五十二人_レ、至_レ自_レ南嶋_レ、

◎七一五年(日本靈龜元年・唐開元三年・乙卯)

○正月一日、日本元正天皇、大極殿ニ御シ朝ヲ受ク、南嶋ノ奄美、夜久、信覺、球美、方物ヲ貢ス、尋_レテ、正月七日、南嶋人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷六 靈龜元年〇新日本古典文学大系

春正月甲申朔、天皇御_レ大極殿_レ受_レ朝、皇太子始加_レ禮服_レ拜朝、陸奥、出羽蝦夷并南嶋奄美、夜久、度感、信覺、球美等、來朝各貢_レ方物_レ、其儀、朱雀門左右、陣列鼓吹_レ騎兵、元會之日、用_レ鉦鼓_レ、自_レ是始矣、是日、東方慶雲見、遠江國獻_レ白孤_レ、丹波國獻_レ白鶴_レ、《○中略》戊午、蝦夷及南嶋七十七人、授_レ位有_レ差、

◎七二〇年(日本養老四年・唐開元八年・庚申)

○十一月八日、日本、南嶋人百三十二人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷八 養老四年〇新日本古典文学大系

十一月丙辰、南嶋人二百卅二人、授_レ位各有_レ差、懷_レ遠人_レ也、

◎七二七年(日本神龜四年・唐開元十五年・丁卯)

○十一月八日、日本、來朝シタル南嶋百三十二人ニ位ヲ授ク、

〔続日本紀〕卷十 神龜四年〇新日本古典文学大系

十一月《○中略》乙巳、南嶋人百卅二人來朝、叙_レ位有_レ差、

◎七三八年(日本天平十年・唐開元二十六年・戊寅)

○是歲頃、古記、賦役令邊遠國條ニ夷人雜類ニ阿麻彌人アリト註ス、

〔今集解〕卷第十三 賦役一〇新訂増補國史大系

凡邊遠國、有_レ夷人雜類_レ。

《謂、夷者、夷狄、雜類者、亦夷之種類也、

釋云、夷、東夷也、舉_レ東而示_レ餘、推可_レ知、雜類、謂_レ夷人之雜類_レ耳、

古記云、夷人雜類、謂_レ毛人、肥人、阿麻彌人等類、問、夷人雜類、一歟、二歟、答、本一、末二、假令、

隼人、毛人、本土、謂_レ之夷人_レ也、此等雜_レ居華夏_レ、謂_レ之雜類_レ也、一云、一種无_レ別、》

之所、應_レ輸_レ調役_レ者、隨_レ事斟量_レ不_レ必同_レ之華夏_レ、

《謂、中國也、觀云、苞氏論語注云、諸夏中國、案、對_レ夷之辭_レ、夏音、胡雅反、

古記云、問、化外人投化復十年、復訖之後、課役同_レ雜類_レ以不_レ答、不_レ同也、華夏百姓一種也、

朱云、有_レ夷人雜類條_レ、會_レ下復除條_レ、所_レ讀、未_レ知_レ其意_レ何、若沒落外蕃條歟、何者、令釋云故何、

穴云、所_レ謂、即夷人等應、輸也、餘故_レ令釋_レ、《○集解諸說、便宜、改行ス、》

◎七四八年(日本天平二十年・唐天寶七年・戊子)

○天平年間頃、日本大宰府ニ【木庵】美嶋及ビ伊藍嶋ヨリ貢ス、

〔大宰府不丁地区出土木簡〕〇九州歴史資料館所蔵

【木庵】美嶋《○下闕ク、》

〔大宰府出土木簡〕〇九州歴史資料館所蔵

伊藍嶋□□《○下闕ク、□□、竹五カ、》

◎七五二年(日本天平勝寶五年・唐天寶十二年・癸巳)

十一月二十一日、是ヨリ先、唐僧鑑真等、日本遣唐使第三舟ニ乗リテ、唐蘇州黃浦ヲ發ス、是日、鑑真等、阿兒奈波嶋ニ著シ、尋デ、十二月六日、阿兒奈波嶋ヲ發シ、二十日、日本薩摩國阿多郡秋妻屋浦ニ著シ、翌年二月四日、平城京ニ入リ東大寺ニ安置サル。

〔唐和尚東征傳〕○群書類從卷六十九

天寶十二載次癸巳十月十五日壬午、日本國使大使特進藤原朝臣清河、副使銀青光祿大夫光祿卿人伴宿彌胡應、副使銀青光祿大夫祕書監吉備朝臣眞備、衛尉卿安信朝臣朝衡等、來_レ延光寺_レ、白_レ大和上_レ云、「弟子等早知_レ、和上五遍渡海向_レ日本國_レ、將_レ欲_レ傳_レ教、故今親奉_レ顏色_レ頂禮歡喜、弟子等先跡_レ和上尊名并持律弟子五僧_レ、已奏_レ聞主上_レ、向_レ日本傳_レ或_レ、主上_レ要_レ令_レ將_レ道土_レ去_レ、日本君王_レ先不_レ崇_レ道士法_レ、便_レ奏留_レ春桃原等四人_レ、令_レ住學_レ道士法_レ、爲_レ此、和上各亦奏退_レ順_レ、和上自作_レ方便_レ、弟子等自有_レ載_レ國信物_レ船四舶_レ、行裝具足_レ、去亦無_レ難_レ」、時、大和上許諾已竟、《○中略》和上於_レ天寶十二載十月二十九日戊辰_レ、從_レ龍興寺_レ出、至_レ江頭_レ乘_レ船下、《○中略》乘_レ船下、至_レ蘇州黃浦_レ、相隨弟子_レ楊州白塔寺僧法進、泉州超功德僧曇靜、台州開元寺僧思託、楊州興雲寺僧義靜、衢州靈耀寺僧法載、寶州開元寺僧法成等一十四人、蘿州通善寺尼智首等三人、楊州優婆塞潘仙童、胡國人安如實、崑崙國人軍法力、膳波國人善聽、都二十四人、所_レ將如來肉舍利三千粒、《○佛像・經典等略ス》、已下皆進_レ內裡_レ、又阿育王塔樣金銅塔_レ區、廿三日庚寅、大使處_レ分大和上已下分乘_レ、副使已下_レ舟舉、後大使已下、共議曰、「方今、廣陵郡大覺_レ知和上向_レ日本國_レ、將_レ欲_レ搜_レ舟、若被_レ搜得_レ爲_レ使有_レ妨、又風被_レ漂還_レ著_レ唐界_レ、不免_レ罪惡_レ」由_レ是、衆憎德下_レ舟留、十一月十日丁未夜、大伴副使竊招_レ大和上及衆僧_レ、納_レ己舟_レ、總不_レ令_レ知、十三日、普照師、從_レ越餘郡來、乘_レ吉備副使舟_レ、十五日壬子、四舟同發、有_レ一進_レ、飛_レ第一舟前_レ、仍下_レ町留、十六日發、二十一日戊午、第一、第二兩舟、同到_レ阿兒奈波嶋_レ、在_レ多撻島西南_レ、第三舟、昨夜、已泊_レ同處_レ、十二月六日、南風起、第一舟、著_レ石不_レ動、第二舟、發_レ向多撻_レ去、七日、至_レ益久鶴_レ、十八日、自_レ益久鶴_レ發、十九日、風雨大發、不知_レ四方_レ、午時、浪上見_レ山頂_レ、二十日乙酉、午時、第二舟著_レ薩摩國阿多郡秋妻屋浦_レ、二十六日辛卯、延慶師、引_レ和上_レ入_レ太宰府_レ、天平勝寶六年甲午正月十一日丁未、副使從四位上大伴宿禰胡應奏三大和上到_レ筑志太宰府_レ、二月一日、到_レ難波_レ、唐僧崇道等迎慰供養、三日、至_レ河內國_レ、大納言正二位蘿原朝臣仲膺、遣_レ使迎慰、復有道瑜律師、遣_レ弟子僧善談等_レ迎勞、復有_レ高行僧忠志・賢璣・靈福・曉貴等卅餘人_レ、迎來禮謁、□□四日、入_レ京、敕、遣三正四位下安宿王於_レ羅城門外_レ迎慰拜勞、引_レ入_レ東大寺_レ安置、《○下略、便宜、年ヲ以テ改行ス。》

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年

正月《○中略》壬子、《○中略》入唐副使從四位上大伴宿禰古麻呂來歸、唐僧鑑真・法進等八人隨而歸朝、癸丑、大宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船、以二去年十二月七日_レ、來_レ著益久鶴_レ、自_レ是之後、自_レ益久鶴_レ進發、漂蕩著_レ紀伊國牛浦崎_レ、《○中略》三月癸丑、大宰府言、遣_レ使尋_レ訪入唐第一船_レ、其消息云、第一船、舉帆指_レ奄美嶋發去_レ、未_レ知_レ其著處_レ、《○中略》四月《○中略》癸未、大宰府言、入唐第四船判官正六位上布勢朝臣人主等、來泊_レ薩摩國石籬浦_レ、

○十二月六日ヨリ後、遣唐使第一船、阿兒奈波嶋ヨリ奄美嶋ヲ指シテ發ト傳フレモ、行方知レザルコ

ト、便宜合叙ス、

○七五四年(日本天平勝寶六年・唐天寶十三年・甲午)

○二月二十日、是ヨリ先、天平七年(七三五年)、日本大宰府、高橋連牛養_レ南嶋ニ遣ハシテ牌ヲ樹タシム、是日、孝謙天皇、大宰府ニ勅シテ、牌ヲ修樹シ、嶋名、船泊、水有ル處、國ヨリ去就ノ行程等ヲ書セシム、

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年○新訂増補國史大系

二月《○中略》丙戌、勅_レ大宰府_レ曰、「去天平七年、故大武從四位下小野朝臣老、遣_レ高橋連牛養於南嶋_レ樹_レ牌、而其牌絆、年、今既朽壞、宜_レ依_レ舊修樹_レ、每_レ牌、顯_レ著嶋名并泊_レ船處、有_レ水處、及去_レ就國_レ行程、遣見嶋名上、令_レ標著_レ之船知_レ所_レ歸向_レ」、

○三月十七日、日本大宰府、使ヲ遣ハシテ遣唐使第一船ヲ尋訪スルニ、奄美島ヲ指シテ發去シタルニソノ著シタル處ハ知レズト報ズ、

〔続日本紀〕卷十九 天平勝寶六年○新訂増補國史大系

三月《○中略》癸丑、大宰府言、「遣使尋訪入唐第一船」、其消息云、「第一船、舉帆指奄美嶋、發去、未知其著處」。」

◎八〇四年（日本延暦二十三年・唐貞元二十年・甲申）

○十月三日、日本遣唐大使藤原朝臣葛野麻呂、唐福州ニ到リ、福州觀察使兼福州刺史圓濟美ニ處分ヲ請フ、是ノ時、入唐留學僧空海、遣唐大使ノ福州觀察使兼福州刺史ニ呈シタル書ヲ作り、留求ニツキテ記ス、

〔日本後紀〕卷十二 延暦二十四年〇新訂増補國史大系

六月乙巳、遣唐使第一船、到_二泊對馬島下縣郡、大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂奏言、「臣葛野麻呂等、去年七月六日、發、從肥前國松浦郡田浦一、四船入海、七日戊戌、第三、第四兩船、火信不應、出_二入死生之間、墮曳波濤之上、都卅四日、八月十日、到_二福州長溪縣赤岸鎮已南海口_二、時、杜寧縣令胡廷沂等相迎、語云、「常州刺史柳冕、縁病去任、新除刺史未來」、國家大平者、其向州之路、山谷艱險、擔行不穩、因廻船向州、十月三日、到_二州、新除觀察使兼刺史圓濟美處分、且奏、且赦廿三人、入京、十一月三日、臣等發赴上都、此州去京七千五百廿里、星發宿、晨昏兼行、十二月廿一日、到_二上都長樂駿宿_二、廿三日、內使趙忠、將飛龍家細馬廿三匹、迎來、兼持酒脯、宣慰、駕即入京城、於外宅安置供給」《○下略》

〔遍照發揮性靈集〕卷五〇弘法大師全集

爲大使與_二福州觀察使_二書

實能啓、高山讚點、禽獸不告、勞而投蹄、深水不言、魚龍不憚、倦而逐赴、故能西羌梯險、貢垂衣君、南裔航深、獻_二刑曆_二、誠是、明知_二難離之亡_二身、然猶忘_二命德化之遠及_二者也、伏惟、大唐聖朝、霜露欽_二均、皇王宣_二宅、明王繼_二武、聖帝重興、掩_二頓九野_二、率_二蒐八極_二、是以、我日本國、常見_二風雨和順_二、定知、中國有_二聖、朝_二巨倫於蒼嶺_二、摘_二皇華於丹墀_二、執_二蓬萊琛_二、獻_二崑岳玉_二、起_二昔迄_二今、相續不絕、故、今我國主、顧_二先祖之貽謀_二、慕_二今帝之德化_二、謹差_二大政官右大辨正品兼行越前國太守藤原實能等_二光使、奉_二獻國信、別貢等物_二、實能等_二忘_二身銜_二命、冒_二死入_二海、既解_二本涯_二、比_二及_二中途_二、暴雨穿_二帆、狀風折_二柁、高波沃_二漢、短舟奔裔、飄風朝崩、摧_二肝耽羅之狼心_二、北氣夕發、失_二膽留求之虎性_二、嘲_二蹙猛風_二、待_二葬鼈口_二、攢_二眉駕法_二、占_二宅鯨腹_二、隨_二浪昇沈、任_二風南北、但見_二天水之碧色_二、豈視_二山谷之白霧_二、掣_二波上_二月有餘、水盡人疲、海長陸遠、飛_二虛脫翼、泳_二水殺_二鱗、何足_二爲_二喻哉、僅八月初日、乍見_二雲峯_二、欣悅_二巒_二、過_二赤子之得_二母、越_二早苗之遇_二霖、實能等、萬胃_二死波_二、再見_二生日_二、德之所_二致也、非_二我力之所_二能也、又大唐之遇_二日本也、雖_二云下八秋雲會、膝_二步高臺_二、七夜霧合稽中賴難闢上、而於_二我國使_二也、殊私曲成、待以_二上客_二、面對_二龍顏_二、自承_二鸞綸_二、佳問榮寵、已過_二望外_二、與_二夫壇璜諸蕃₂、豈同日可₂論乎、又竹符₂銅契₂、本備₂姦詐₂、世淳人質、文契何用、是故、我國、淳樸已降、常事₂好隣₂、所₂獻信物、不₂用₂印書₂、所₂遣使人、無₂有₂奸僞₂、相₂襲其風₂、于₂今無₂盡、加以、使乎之人、必擇₂腹心₂、任₂以₂腹心₂、何更用₂契₂、載籍所₂傳₂、東方有₂國、其人想直、禮義之鄉、君子之國、蓋₂此歟、然今、州使責₂以₂文書₂、疑₂彼腹心₂、檢₂括船上₂、計₂數公私₂、斯乃理合₂法令₂、事得₂道理₂、官吏之道、實是可₂然、雖₂然、遠人乍到、觸₂途₂憂、海中之愁、猶委₂胸體₂、德酒之味、未₂飽₂心腹₂、率然禁制、手足無₂厝、又建中以往入朝使船、直着₂褐₂、無₂漂蕪之苦₂、州縣諸司、慰勞堅懃、左右任₂使、不₂檢₂船物₂、今則事與₂昔異、遇將₂望疎、底下愚人、竊懷₂驚恨₂、伏願、垂₂柔₂、達₂之惠₂、願₂好₂、濟₂之義₂、縱₂其習俗₂、不₂怪₂常風₂、然則、涓涓百蟹、與₂流水₂而、朝₂宗舜海₂、嘲₂嘲萬服₂、將₂莫霍₂、以引₂領堯日₂、順₂風之人、甘心逼湊、遂₂腥之蠻、悅₂意驛羅、今不₂任₂常習之小願₂、奉₂啓不宣、謙言、○本狀、年月日闕₂、續群書類從所收寃平七年三月十日聖寶撰贈大僧正空海和上傳記ニ、十月十三日與書福州觀察使トアリ、

◎八二四年（日本天長元年・唐長慶四年・甲辰）

○十月一日、日本、多撫鳥司₂停メ、大隅國ニ隸カシム、

〔日本紀略〕第五十三代 淳和天皇 天長元年〇新訂増補國史大系

冬十月丙子朔、停₂多撫鳥司₂、隸₂大隅國₂、

〔類聚三代格〕卷五 分置諸國事〇新訂増補國史大系

太政官謹奏

停多福島ニ隸ニ大隅國ニ事

右、參議大宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解稱、「謹檢案内、太政官去二月十一日符稱、「件島南居ニ海中ニ、人兵乏弱、在ニ於國家、良非ニ扞城ニ、又鷲司一年給物准、稻三萬六千餘束、其島貢調鹿皮一百餘領、更無ニ別物ニ、可ニ謂ニ有、名無ニ實多ニ損少ニ益、右大臣宣、「奉、勅、宜、勸、利害、言上ニ」者、南溟森々、無ニ國無ニ敵、有ニ損無ニ益、ニ如ニ符旨ニ、須ニ停ニ島隸ニ大隅國ニ、計ニ其課口ニ、不足ニ一都ニ、量其土地、有ニ餘ニ一都ニ、能滿合ニ於取誤ニ、益求合ニ於熊毛ニ、四郡為ニ二、於ニ事得、便ニ者、聖帝、登ニ楓事、期ニ濟ニ世、明王、布ニ政理貴ニ過ニ時、臣等商量、昔漢元帝、納ニ賈捐之言、罷ニ珠崖郡、雖ニ建ニ國置、確非ニ無ニ分野ニ、而即ニ民散、急、猶弃ニ州郡ニ、况溟海之外、費損如ニ此、加以、往還之吏、漂亡者多、運送之民、高沒不ニ少、守ニ無益之地ニ、捐ニ有用之物ニ、求ニ之政典ニ、深迂ニ物議ニ、伏望、依ニ件、停隸ニ以省ニ邊弊ニ、伏聽ニ天裁ニ、謹以申聞謹奏、聞ニ。

天長元年九月三日

○多撫島司ヲ停メ大隅國ニ隸カシムルコトヲ奏上シタル天長元年九月三日太政官奏、都良香作ニ依リテ、本朝文粹卷四及ビ朝野群載卷六ニ收ムレドモ、略ス、

◎八三六年(日本承和三年・唐開成元年・丙辰)

○八月二十日、是日ヨリ先、七月二十日、日本大宰府、遣唐使第三船水主、対馬嶋ニ漂到シタルコトヲ飛驛シ朝廷ニ奏ス、是日、大宰府、遣唐使第三船ニ乗リタル眞言請益僧眞濟等、南嶋ニ漂到シ、日本ニ歸著シタルコト奏ス、
〔続日本後紀〕卷五 承和三年〇新訂増補國史大系

八月戊戌朔、大宰府駆馳、奏、遣唐使第三船水手等十六人駕ニ編板、漂着之狀、已亥、勅、符ニ遣唐大使藤原朝臣常嗣ニ、「省ニ大宰府去月廿日飛駆奏言、第三船水脚十六人、編板如ニ杼、駕之、漂ニ着對馬島南浦、其水脚等申云、「船、實依ニ數解散者、雖水不收、悔而何及」、言念ニ災變ニ、水用ニ懈傷ニ、又案ニ同府別奏言ニ、彌弊未ニ復、旱疫相仍、使人等六百有餘人、甚ニ供給ニ、伏望、准ニ寶龜例、使人入ニ京、水脚還ニ郷、又留ニ判官、錄事各一人、與ニ府司共修ニ造舶」者、並依ニ來奏ニ、使等宜、知ニ此情ニ、判官已下、至ニ于水手ニ、憩自舟遂ニ入京還ニ堵、脫有不、不欲、更入ニ都者ニ、隨ニ願駐、之、但大使、副使、去留任ニ、其緣ニ修造事ニ、應、留ニ判官并錄事者、任ニ大使之定簡ニ、
〔續日本後紀〕辛丑、遣唐第三船入九人、駕ニ杼、漂ニ着肥前國ニ、乙巳、勅曰、「遣唐第三船、未ニ遂ニ利涉、半途漂損、縱乘ニ杼所ニ、使下之徒廿有五人、漂着之後、已經ニ旬日ニ、而判官、錄事、史生、知乘船事等憲一百餘人、未ニ知ニ所ニ去、存亡難ニ量、宜ニ仰ニ大宰府ニ、差ニ海邊踏路之人、遣ニ絕為無人之處、漂損人物一向尋覓、募以ニ穀帛ニ」、《○中略》是日、《○中略》是日、大宰府奏言、問ニ遣唐第三船漂蕩之由、眞言請益僧眞濟等、僅作書答云、「舵折櫓落、潮溢入溺、船頭已下百餘人、任ニ波漂蕩、爰船頭判官丹墀文雄議云、「我等、空渴ニ死船上ニ、不ニ如、壞ニ船作ニ筏、各乘覓ニ水、錄事已下、爭放ニ取舶板、造ニ杼各去、自外无復所ニ言」」、

〔日本三代實錄〕卷四 貞觀ニ年(八六〇年)〇新訂増補國史大系

二月《○中略》廿五日丙午、僧正傳燈大法師位眞濟、眞濟者、俗姓紀朝臣、左京人也、祖正五位下田長、父巡察彈正正六位上御園、眞濟、少年出家、學ニ大乘道、通ニ外傳、夙有ニ識、悟、從ニ大僧都空海、受ニ真言教、大師海公鑒ニ其器量、特加ニ提誦、遂授ニ兩部大法、爲ニ傳法阿闍梨、眞濟、時年廿五、時人奇ニ之、眞濟、入ニ愛當護山高尾峰ニ、不ニ出十二年、嵯峨天皇、聞ニ其苦行ニ、爲ニ內供奉十禪師、承和之初、遣ニ使聘ニ唐、眞濟、奉ニ朝命ニ、隨ニ使渡海、中途漂蕩、船舶破裂、眞濟、縱駕ニ一筏、隨ニ波而去、泛々然不、知、所ニ到、凡在ニ海上、廿三日、其同乘者卅餘人、皆悉餓死、所ニ活者、眞濟與ニ弟子寅然ニ二人而已、眞濟唯佛是念、自然不ニ飢、豈非ニ如來冥護之所ニ致哉、南嶋人遙望ニ海中ニ、每ニ夜有ニ光、怪而尋ニ之、拯得ニ着ニ岸、皮膚腐爛、尸居不ニ動、鳩人憐愍、取而養療、遂得ニ歸ニ本朝ニ、仁明天皇、擢ニ權律師、文德天皇、甚見ニ尊重、爲ニ權少僧都、未ニ幾、轉ニ權大僧都、少頃、爲ニ僧正ニ、於是、眞濟抗、表、請、以ニ僧正位ニ譲、先師空海ニ、中心懇切、至ニ于再三、天皇感激、贈ニ空海法師、以ニ大僧正位ニ、編徒榮、之、眞濟表請、建ニ一重寶塔於高尾岑神護寺、造ニ五大虛空藏菩薩像、安ニ置塔中ニ、置ニ七口櫛燈及度年分三人、春秋二季、水設ニ法會、轉ニ讀虛空藏十輪等經、以鎧ニ護國家ニ、守ニ其遺跡、至ニ今修、之、天安二年八月、文德天皇、寢ニ病、眞濟、侍ニ看病於冷然院、大漸之夕、時論歎々、眞濟失、志隱居、遷化、時

年六十一、

○眞濟ノ乗りタル遣唐使第三船漂蕩シタル時、同船水主、對馬鷲ニ漂著ストアレドモ、眞濟、南鷲ニ漂到シタルコト、其ノ傳ニ據リテ掲グ、日本、仁明天皇、遣唐使ヲ任ズルコト統日本後紀承和元年正月庚午十九日ノ條ニ、仁明天皇、遣唐大使藤原朝臣常嗣ニ節刀ヲ授クルコト同承和三年四月丁酉二十九日ノ條ニ、七月二日、遣唐使發船ノコト、同承和三年七月壬午十五日ノ條ニ、大宰府飛驒シテ遣唐使第二船漂遙ヲ奏スルコト同承和三年七月辛卯二十四日ノ條ニ、七月十日、大宰府飛驒シテ遣唐使第三船并ニ第四船、肥前國ニ漂遙シタルヲ奏シタルコト同承和三年七月癸未十六日并甲申二十七日ノ條ニ、七月二十日、大宰府飛驒シテ遣唐使第三船、對馬鷲ニ漂到シタルヲ奏シタルコト同承和三年八月戊戌朔日條并ニ同己亥二日條ニ見ユ。

◎八四〇年（日本承和七年・唐開成五年・庚申）

○六月五日、是日ヨリ先、四月八日、日本大宰府、去年八月、南海賊地ニ漂到シタル遣唐使第二船知乘船事皆原朝臣梶成ノ大隅國ニ迴著シタルコトヲ飛驒シテ上リタル奏狀、朝廷ニ著シタルニ依リ、四月十五日、仁明天皇、大宰大武等ニ勅シテ矜恤セシム、是日、皆原朝臣梶成等、都ニ歸著ス、梶成等、南海ノ賊ト相戦ヒテ得タル兵器、中國ニ似ズトス、尋デ、七月二十六日、仁明天皇、出羽國飽海郡大物忌神ニ命宣シ、遣唐使第二船人ノ南海ニ於ケル戦ニ神助ヲ賜リタルコトヲ詣ス。

〔続日本後紀〕卷九 承和七年〇新訂増補國史大系

三月丁丑朔己卯、勅、遣唐三箇船、去年夏六月進發、今諸船遙來、稍經年月、伺候之事、恐有懈怠、宜命大宰府及綠海諸団、爲未遙來第二船、依例舉火候之、

〔続日本後紀〕卷九 承和七年〇新訂増補國史大系

夏四月《○中略》癸丑、《○中略》大宰府上奏、遣唐知乘船事皆原梶成等所駕第二船、遙著於大隅國、《○中略》庚申、勅、符大宰大武從四位上南潤朝臣永河・少貳從五位下文屋朝臣真屋等、得今月八日飛驒奏狀、知遣唐知乘船事皆原梶成等分駕一隻小船遙著于大隅國海畔、梶成等漂々異域、萬死更生、言念苦節、誠可矜恤、迄于入都、依舊勞來、量賜帛、以資衣裳、又准判官良峰長松所駕之船、全否未期、齋陶于懷、宜逾歲邊而無絕候、若有未來著、俾得安穩、《○中略》六月《○中略》己酉、《○中略》遣唐第二船知乘船事正六位上皆原朝臣梶成等、海中遇造風、漂著南海賊地、相戰之時、所得兵器、五尺鋒一枚、片蓋鞘橫佩一柄、箭一隻、齋來獻之、竝不以中國兵仗、《○中略》壬戌、《○中略》大宰府馳駕奏、遣唐第二船准判官從六位下良岑朝臣長松等遙著于大隅國、《○中略》七月己亥、奉授出羽國飽海郡正五位下歟五等大物忌神從四位下、餘如故、兼充神封二戸、詔曰、「天皇我詔旨爾坐、大物忌大神尔申賜波久、頃皇朝爾緣、有物怪、天卜詢爾、大神爲、祭賜信利、加以、遣唐使第二船人等遙來申久、「去年八月尔南賊境漂落暨相戰時、彼衆、我寡弱、力甚不敵奈利、儻而克敵留波、似有神助」止申、今依此事、豆體量示、去年、出羽國言上太留、「大神乃於雲裏、日、十日間作戰、後尔、石兵零利」止申世利之月日、與彼南海戰、間、正是符契世利、大神乃威稜、令遠被太留事乎、且奉驚異、且奉歡喜、故以從四位爵乎奉、授、兩戸之封奉。充良久手申賜波久止申」

〔日本三代實錄〕卷十一 貞觀七年（八六年）〇新訂増補國史大系

十月《○中略》二十六日甲戌、雅樂惟大允外從五位下和迩部宿禰大田麻呂卒、大田麻呂者右京人也、吹笛出身、備於伶官、始師事雅樂惟少屬外從五位下良枝宿禰清上、受學吹笛、清上特善吹笛、音律調弄、皆窮其妙、見大田麻呂有氣骨、可教習、因加意而教之、承和之初、清上從聘唐使、入於大唐、歸朝之日、舶遣逆風、漂墮南海賊地、爲賊所殺、本姓大戶首、河内國人也、大田麻呂、能受其道、莫不精究、天長初、任雅樂百濟笛師、尋轉唐笛師、數年爲雅樂少屬、俄轉大屬、齊衡三年、除惟大允、貞觀三年正月廿一日、授外從五位下、是日內宴也、大田麻呂伎術出群、故加殊、大田麻呂、本姓和迩部、後賜宿禰、卒時年六十八、

〔日本三代實錄〕卷三十六 元慶三年（八七九年）〇新訂増補國史大系

十一月《○中略》十日乙丑、散位從四位上良岑朝臣長松卒、長松者、大納言贈從二位安世之子也、承和之初、爲常陸權大掾、俄先爲伊予掾、兼爲遣唐使准判官、聘禮既訖、歸舶解纜、遣風漂墮南海賊地、殆致殞命、

僅以得_還、同七年、授_從五位下_、數年、拜_侍從_、尋加_從五位上_、遷_丹波介_、後進_正五位下_、俄而遷_繞殿頭_、遂至_從四位下_、未_幾、加_從四位上_、遷_宮内大輔_、累遷_諸陵頭_、武藏_大和、河内_、山城等國守、長松無_他才能_、以善_彈琴_、拜_鵝唐使_、卒時年六十六。

○良枝宿禰清上、唐ヨリノ歸路、南海賦地ニ漂到シ賊ニ殺サルコト、及ビ良岑朝臣長松、唐ヨリノ歸路、南海賦地ニ漂到シ、歸國スルコト、便宜合敍ス、

◎八五三年（日本仁壽三年・唐大中七年・癸酉）

○八月十四日、日本天台僧圓珍、唐ニ渡ラントシテ、流求國ノ傍ニ至リ、尋デ、八月十五日、唐福州連江縣ニ著ス、
〔太政官給公驗牒〕○圓城寺文書第一卷 圓城寺編
太政官

十禪師延暦寺傳燈大法師位圓珍《年五十三臘冊四》

右、圓珍奏狀稱、『《○中略》嘉祥四年四月十五日、辭_京、輦向_太宰府_、五月廿四日、得達_前處_、以_無_便船_、暫寄_住城山四王院_、《○中略》至壽_二年閏八月、值_大唐商人欽良翫交關船來_、三年七月十六日、上船、到_欽良翫_、停_泊鳴浦_、八月初九日、放船入海、十三日、申時、望_見高山_、緣_北風然_、十四日、辰頭、漂_到彼山脚_、所_謂、流求國、喫_人之地、四方無風、莫_知_所_趣、忽遇_巽風_、指_乾維行、申魁、見_小山_、子夜至止_脚下_、十五日、午、遂獲_着岸_、而未_知_何國界_、便問_所_在、知_此大唐國嶺南道福州連江縣界_、于_時、國号_大中七年_矣、合_船喜躍、如_死得_蘇、《○中略》謹具_求法來由_、伏聽_天裁_』者、右大臣宣_、奉_勅、如_聞、《○中略》宜依_所_陳、下_知所司_、許_其演說_、增_光慧炬_」者、今依_宣旨_、与_之公驗_』、

貞觀八年五月廿九日正六位上行左少史刑部造「真錄」

參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南潤朝臣「年名」《○「天皇御坐」朱印一二九顆踏ス、》

「此公驗、印後入手、而一兩字、頗以_不_正、更書_斐紙_、再請_内印_、事須_毀_先留_後印_、緣_此本印迹分明_、後本不_及、請_史官_、留_之雙存、圓珍手記」《○圓珍筆》

○本太政官牒、先本ト稱サル、圓珍ノ唐ヘノ渡航ノ記、圓城寺所藏時原春風筆後本、圓珍自筆本貞觀五年三月七日圓珍請傳法公驗奏狀案《○紙背ニ同文アリ、》及ビ圓珍自筆本貞觀五年十一月十三日圓珍請傳法公驗奏狀案、異事ナシ、マタ、三善清行撰天台宗延暦寺座主圓珍和尚傳、異事ナシ、圓珍ノ近付キタル流求國、福州ノ近傍タルニ據レバ、琉球ニ非ザレドモ揭グ、圓珍、琉球國ニ漂著シ、琉球國ヲ食フ所ト記セル傳承、今昔物語集卷十一、智證大師亘唐傳顯密法歸來語第十二ニ見ユ、

◎九一〇年（日本延喜十年・唐開平四年・庚午）

○是歲、惟宗公方、本朝月令ヲ撰シ、南島人ノ嗜ニヨル釀酒ヲ、日本決擇ニ據リテ記ス、
〔本朝月令〕○群書類從 公事部 卷八十一

六月

朔日、内膳司、供_忌火御飯_事、

《○中略》

同日、造酒正、獻_醴酒_事、《起_六月_、盡_七月_、》

日本紀神代云、于レ時、神吾田鹿葦津姬、以ト_定田_、號曰_狹名田_、以_其田稻_、釀_天甜酒_嘗_之、又用_淳浪田稻_、爲_飯蓄_之、日本決擇云、應神天皇之代、百濟人須曾己利《人名、酒工、》參來、始習_造酒之事_、以往之世、未_知_釀酒之道_、但殊有_造酒之法_、上古之代、口中嚼_米、吐_納木櫃_、經_日醋酸、名_之爲_醴、故今世、謂_醴酒、酒_爲_醴、是其法也、《今、南島人、所_爲如_此、》古事記云、品陀天皇之代、於_吉野之白櫛上_、作_横臼_而、於_其橫臼_、釀_大御酒_、獻_其大御酒_之時、擎_口鼓_爲_伎、而歌曰、加志能布邇、余久須袁都久理、余久須邇、邇美斯壹富美岐、宇麻良邇、岐許志母知速勢、麻呂賀知、職員令、造酒司、造酒正、掌_釀_酒醴酢_、《謂、醴、甜酒、》〔古事記裏書〕○古典保存會刊神宮文庫所藏本

○釀_日本決擇云、應神天皇之代、百濟人須曾己利《人名、酒工、》參來、始習_造酒之事_、未_知_釀酒之道_、

但殊有_レ造酒之法_レ。上古之代、口中嚼_レ米、吐_レ納木櫃_レ、經_レ日釀醸_レ、名_レ之爲_レ醸_レ、故今世、謂_レ醸_レ酒、爲_レ嚼、是其法也、《今、南島人、所_レ為如_レ此、》《○原本ノ返點略ス、原本ノ調假名、傍訓ノ外ハ略ス、返點、編者ニ依リテ附ス、本書、古事記上巻ノ裏書云ノ段ノ末ニ、已上古事記上巻ノ裏書之応永三十一年甲辰七月五日以尾崎坊之本書寫了沙彌道祥(花押)ノ書寫奥書、古事記二巻裏書ノ段ノ末ニ、文永十年二月十四日已刻 兼文註之ノト部兼文ノ本奥書アリ、》

◎九二七年(日本延長五年、後唐天成二年、丁亥)

○十二月二十六日、日本、左大臣藤原朝臣忠平等、延喜式ヲ奏進ス、延喜式ニ、南嶋赤木貢進、奄美譯語、南嶋樹牌ヲ定ム。

(延喜式)卷二十三 民部下○新訂増補國史大系

年料別貢雜物、《○中略》太宰府、《○中略》、《赤木南嶋所_レ進、其數隨_レ得、》

(延喜式)卷三十 大藏省

諸使給法

入諸蕃使《○中略》入唐大使、《○中略》新羅、奄美等譯語《○中略》、《各綱四疋。締廿屯。布十三端。》《○中略》、臨_レ入、京輿、其別賜、大使、《○中略》訛語、《各彩帛五疋。質布二端。》《○下略》

(延喜式)卷五十 雜式○新訂増補國史大系

凡太宰、於_レ南嶋_レ樹_レ牌_レ、具願_レ著_レ嶋名_レ及泊處、有_レ水處、并去_レ就國_レ行程、遠見嶋名_レ、仍令_レ漂著船人必知_レ有_レ所_レ歸向_レ、

○延喜式、右ニ掲_レゲタル條文ノ外ニ、卷十二内記、裴東位記式ニ赤木軸、同、五位已上位記料雜物ニ赤木、卷十四内藏寮、諸國年料供進條ニ大宰府所進ノ赤木、樺榔馬糞、同、年中所造御枕條ニ由志木、卷十七内匠寮、内記局所請位記料條ニ赤木軸、卷二十一治部省、上瑞條ニ南海輸入青鳥ナド、南島ニ開ハルコトヲ記セル條アレドモ、今、略ス。

◎九九七年(日本長德三年、宋至道三年、丁酉)

○十月一日、日本大宰府、是日ヨリ先、奄美嶋人ノ薩摩國、大隅國、肥後國、肥前國、壹岐嶋ニ亂入シタルコトヲ飛驛奏上ス、諸卿、大宰府武ニ要害ヲ警固シ追捕セシメムコトヲ命ズルコト、併セテ佛神ニ祈禱スベキコト定メ申ス、尋_レテ、二日、一條天皇、諸卿定申ニ依リテ行フベキヲ仰ス。

[小右記]長德三年○大日本古記錄

十月一日、壬辰、可_レ御_レ南殿_レ云々、《○中略》有_レ廚御贊_レ、《○中略》獻畢間、左近陣官高聲曰、「自_レ大宰_レ飛驛到来云、高麗國人虜_レ掠對馬、壹岐島_レ、又着_レ肥前國_レ、欲_レ虜領_レ」云々、上下驚駭、三叢相失_レ度、降日來陪而案内、兼披_レ大武書狀、上達部進向_レ丞相所_レ、太以周章、雖_レ云_レ非常事_レ、於_レ階下_レ三叢相披_レ讀都督書_レ、不_レ足_レ言、下官不_レ起_レ座、丞相復座云、「菴美嶋者、燒_レ亡海夫等宅、奪_レ取財物_レ、又執_レ載男女於舟_レ將去、尚浮_レ海上_レ成_レ犯之由云々、飛驛言上_レ者、」《○中略》

高麗國人濫行事、付朔日依急事、雖凶事不憚事、有食儀、○次段頭書

左大臣以下着_レ陣座_レ、右大臣云云、「今日朔日、奏_レ因事_レ事、無_レ便宜_レ歟」者、余云、飛驛言上、是至急事也、不可_レ隔_レ時者、何期遲_レ吉日_レ乎」、諸卿應_レ之、仍左大臣召_レ大外記致時_レ、召_レ飛驛解文_レ、々匣二合盛_レ覽_レ菖_レ、奉_レ上卿_レ、一匣者注_レ奏、一匣者注_レ解文_レ、督令_レ。召_レ菖、但至_レ于_レ飛驛解文_レ不_レ披_レ封_レ、至_レ例解文_レ披_レ。封見也、左大臣參上令_レ奏、良久之後復座、下給大宰府言上解文等、令_レ諸卿定申_レ、奄美嶋者、乘_レ船帶_レ兵具_レ、掠_レ奪_レ奪_レ國崎海夫_レ、筑前_レ、筑後_レ、薩摩_レ、壹岐_レ、對馬_レ、或煞害_レ、或放火、奪_レ取人物_レ、多浮_レ海上_レ、又爲_レ當國人於處々合戰_レ之間、奄美人、中_レ矢亦有_レ其數_レ、但當國人多被_レ奪取_レ、已及_レ三百人_レ、荷解文云、「先年、奄美嶋人來、奪_レ取大隅國人民四百人_レ、同以將志、其時不_レ言上_レ、今慣_レ彼例_レ、自致_レ斯犯_レ歟、仍微_レ發人兵_レ、警_レ固要害_レ、令_レ追捕_レ也、若有_レ其勤_レ者、可_レ被_レ加_レ勸賞_レ」者、又、高麗國同艦_レ兵船五百艘_レ向_レ日本國_レ、欲_レ致_レ者、誠雖_レ浮定_レ、依_レ云々所_レ言上_レ也」者、有_レ先日言上類文書等_レ、件飛驛去月十四日出_レ。荷云々、太解意、諸卿定申云、「奄鷗者等事、大宰苻定行了、亦重警_レ固要害_レ、弥加_レ追討_レ、兼又可_レ折_レ禱佛神_レ、若追討使々、殊有_レ勤節_レ、隨_レ其状_レ、遠_レ可_レ襄章_レ之由、可_レ被_レ裁_レ報_レ」、大宰以_レ飛驛_レ雖_レ言上_レ、事頗似_レ輕、不_レ可_レ給_レ勤_レ、只可_レ賜_レ官符_レ、又高麗國浮定_レ、不_レ可_レ

不_レ信、可_レ被_レ種々祈禱_レ」、定詞甚多、只是大概了、丑刻、諸卿退出、此間雨不_レ止、諸卿申云、「爲_レ敵國_レ、可_レ被_レ行_レ種々御祈禱_レ」者、

〔櫻記〕長徳三年○史料纂集

十月一日、御_レ南殿_レ、《○中略》一獻之後、左大臣於_レ東階_レ、令_レ予_レ奏_レ云、「自_レ大宰府_レ言上飛驛使、在_レ建春門外_レ、以_レ解文_レ付_レ所司_レ云々」、大武藤原朝臣同付_レ此使_レ所_レ送書状云、「南蠻賊徒、到_レ肥前、肥後、薩摩等國_レ、切_レ人物奪、侵犯之由、逐_レ日申來、仍言_レ上解文_レ」者、事是非常也、停_レ樂杆庭立奏等_レ、事了之後、定_レ中解文内雜事等_レ」者、仰云、「依_レ請_レ」、事了還御、于_レ時、丑二刻也、頃之、左大臣參_レ上殿上_レ、被_レ奏_レ太宰府解文_レ、《四通入_レ旨、件文、大臣於_レ陣座_レ披見、令_レ大外記致時朝臣參_レ殿上_レ、令_レ予_レ奏_レ之_レ」于_レ時、上卿朝廟、依_レ仰持參、候_レ晝御座_レ、待_レ出御、奏聞、又、依_レ仰、一々聞_レ解文_レ讀_レ之、仰云、「事已急速、煩_レ早定申令_レ給_レ報符_レ」即、以_レ勅旨_レ傳_レ大臣_レ、々々還_レ陣、同三刻、被_レ奏_レ太宰府言上南蠻蜂起之事_レ、諸卿定_レ申之_レ、「如_レ府解_レ者、追討使々、若有_レ其功_レ、隨_レ狀、可_レ被_レ賞歎、又、可_レ能成_レ折禱_レ、重固、要害之趣也」、又、申_レ高麗國案内_レ事、定申云、「先日言上府解、不、注下到_レ霧林府_レ犯者姓名上、今日解文、已注_レ其名_レ、仍須追_レ討彼成犯則矢等類_レ之由、注_レ載報符_レ」又、「可_レ給_レ官符長門國_レ、但得_レ其賊_レ者、可_レ賞賜_レ之由、可_レ加_レ載狀中_レ、抑件南蠻・高麗事、雖_レ浮説_レ、安不_レ忌_レ危、非常之恐、莫_レ成_レ懼、能可_レ被_レ致_レ種種御祈_レ、可_レ被_レ立_レ奉幣諸社使_レ、行_レ仁王會_レ、修_レ大元法等_レ賊_レ者、依_レ御籠殿_レ、不能_レ奏聞_レ、依三宿物不_レ持來_レ、申_レ案內於左府_レ、白地罷出、此夜、左府宿給、二日、雨、早旦、參_レ内、奏_レ夜前雜事_レ、仰云、「依_レ定申_レ行_レ之」、

〔日本紀略〕一條天皇○新訂増補國史大系

〔丁酉〕三年《○中略》十月一日壬辰、旬、天皇出_レ御南殿_レ、于_レ時、庭立奏之間、太宰府飛驛使參入云、「南蠻亂_レ入管内諸國_レ、奪_レ取人物_レ」、奏樂之後、諸卿定_レ申件事_レ、《○中略》十三日甲辰、奉_レ遣_レ幣使於諸社_レ、依_レ筑紫之騷動_レ也、《○中略》十一月《○中略》二日癸亥、太宰府飛驛使來、申_レ伐_レ獲南蠻冊餘人_レ之由_レ、五日丙寅、賜_レ官符於太宰府_レ、

〔百鍊抄〕四 一條天皇 長徳三年○新訂増補國史大系

十月一日、旬、出_レ御南殿_レ之間、太宰府飛驛到来、申_レ下高麗國人虜_レ掠銀西_レ之由_レ、仍止_レ音樂、庭立奏事_レ了、令_レ諸卿定_レ申之_レ、

○是歲ヨリ先、奄美嶋人、大隅國ヲ襲ヒ人民ヲ奪取スルコト、便宜合叙ス、大日本史料長徳三年十月一日、旬儀、官奏、大宰府、奄美島人ノ大隅、對馬等ニ亂入スルコトヲ奏上スノ條、及ビ同月十三日、筑紫ノ騷動ニ依リテ、諸社ニ奉幣スノ條參看、長徳三年、大隅國等諸神ニ增爵ノコト、東京大学史料編纂所藏島津家本舊記雜錄前編卷一所收天喜二年(一〇五四年)二月二十七日大宰府符案ニ見ユ、鹿児島県史料旧記雜錄前編卷一、九号、及ビ平安遺文七一二号、參看、

○右小記、萬壽二年二月十四日條ニ、大隅據_レ爲賴、右大臣藤原實資ニ横柳ヲ進ムルコト、同七月二十四日條ニ、爲賴、牛靴色革ヲ進ムルコト、萬壽四年七月二十二日條ニ、爲賴、營員ヲ進ムルコト、長元元年九月七日ノ條ニ、實資、夜久貝ヲ藤原隆家ニ領ツコト、長元二年八月二日條ニ、大隅國住人良孝、赤木、横柳、夜久貝ヲ進ムルコト等見ユレドモ、今、略ス、

○十一月二日、日本大宰府、南蠻人四十人ヲ伐獲シタルコト飛驛シテ奏ス、

〔日本紀略〕一條天皇 長徳三年○新訂増補國史大系

十一月《○中略》二日、癸亥、大宰府飛驛使來、申_レ伐_レ獲南蠻冊餘人_レ之由_レ、五日、丙寅、賜_レ官符於太宰府_レ、

○大日本史料長徳三年十一月二日、大宰府、南蠻人討伐ノ状ヲ奏スノ條、及ビ同五日、大宰府ニ官符ヲ下ス條參看、

○九九八年(日本長徳四年・宋咸平元年・戊戌)

九月十五日、日本大宰府、貴駕島ニ下知シテ南蠻ヲ捕ヘ進メシメタルコトヲ、言上ス、

〔日本紀略〕一條天皇 長徳四年○新訂増補國史大系

九月《○中略》十五日、庚午、太宰府、言_レ上下_レ知貴駕島_レ、捕_レ進南蠻_レ由_レ、

○大日本史料長徳四年九月十五日、大宰府、貴賀島ヲシテ、南蠻ヲ捕進セシムルノ由ヲ奏ス條參看、

◎九九年(日本長保元年・宋咸平二年・己亥)

○八月十九日、日本大宰府、南蠻賊追討ノコトヲ奏ス、

[日本紀略]一條天皇 長保元年○新訂増補國史大系

八月《○中略》己巳、太宰府、言_レ上追_レ討南蠻賊_レ由_レ上、

○大日本史料長保元年八月、大宰府、南蠻賊追討ノコトヲ奏ス條參看、

◎一〇二〇年(日本寛仁四年・宋天祐四年・庚申)

○閏十二月二十九日、日本大宰府、南蠻賊徒、薩摩國ニ到來シ人民ヲ虐掠シタルコトヲ、太政官ニ報ズ、入道前太政大臣藤原道長、年ヲ改メテ後、追討ノ官符ヲ下スベキコト命ズ、

[左經記] 寛仁四年○増補史料大成

閏十二月《○中略》廿九日、晴、大夫奉親朝臣持_レ來大宰府解_レ云、「左右大辨共_レ有_レ所勞_レ不_レ被_レ仕、仍令_レ申_レ事由於左府之處_レ」被_レ仰云、「令_レ汝申_レ」者、仍所_レ持來_レ也」者、南蠻賊徒到_レ來薩摩國_レ、虜_レ掠人民等之由也、即參_レ左府_レ申_レ事由_レ、次參_レ關白殿_レ、令_レ覽_レ府解_レ、次爲_レ御使_レ參_レ御守_レ申_レ此由_レ、仰云、「改_レ年之後、儘可_レ追討_レ之由、可_レ賜_レ官符於大宰府_レ」、

○大日本史料寛仁四年閏十二月二十九日、大宰府、南蠻賊徒ノ、薩摩ニ來リテ、人民ヲ虜掠スル由ヲ報_レ條參看、

◎一〇六年(日本治暦二年・宋咸雍二年・丙午)

○十月十八日、藤原明衡卒ス、是ヨリ先、明衡、新猿樂記ヲ著シ、貴賀之鷗ニ波レル商人ノコトヲ記ス、

[新猿樂記] ○東洋文庫

八郎眞人者商人主領也、《○中略》東豫_レ于俘囚之地_レ、西渡_レ於貴賀之鷗_レ、交易之物、賣買之種、不可_レ稱_レ數、唐物、《○中略》本朝物、胡織、象眼、牋綺、高麗軟錦、東京錦、浮線綾、金、銀、阿古夜玉、夜久貝、水精、虎珀、流黃、白[金葛]、銅、鐵、縑、鮮羽、絹、布、糸、綿、纈纈、緝布、紅、紫、茜、鷺羽、色革等也、

◎一一一年(日本天永二年・宋咸和元年・辛卯)

○九月四日、日本太政官、陣定ヲ行ヒ、喜界嶋ノ者、紀伊國來著ノコト等ヲ定ム、

[長秋記] 天永二年○増補史料大成

九月《○中略》

四日、《○中略》西刻許、自_レ左大臣殿_レ、有_レ可_レ令_レ參内_レ之仰_レ、仍着_レ束帶_レ參也、定始程也、宇佐小宮司方事、肥前國司訴申事、唐人隱_レ財物_レ參着事、喜界嶋者來_レ着紀伊國_レ事、以上定、了左大臣殿退出御、下官退出、此後、右大將度奉行定云々、

○大日本史料天永二年九月四日、陣定ヲ行ヒ、肥前國司ノ訴及ビ宋人來著ノコト等ヲ議ス條參看、

◎一一四年(日本久安元年・宋紹興十五年・乙丑)

正月二十四日、日本内大臣藤原頼長、入ヨリ、去年、南蠻入、大宰府ニ漂著シタルコトヲ聞ク、

[台記] 四 天養二年春秋○増補史料大成

《○中略》

廿四日、《庚午》、人傳、南蠻_レ披_レ放_レ惡風_レ、來_レ西府_レ云云、去年、有_レ此事_レ、西府民曰、「大府之福、有_レ此瑞_レ云云」、(摺書)《大府》、謂_レ禪_レ闇_レ、

○史料綜覽久安元年正月二十四日、南蠻入、大宰府ニ漂著ス條參看、

◎一一七二年(日本承安二年・宋乾道八年・壬辰)

○七月九日、日本伊豆國司、伊豆國出島ニ、蟹夷異形ノ者來著シ南海ニ逐電シタルヲ奏ス、

[玉葉] 卷第拾 承安二年秋冬○國書刊行会本

七月

《○中略》

九日、《丙子》或者語云、伊豆國異形者出來云々、國司《賴政朝臣知行國也》、注「進子細」去比、當國出島、鬼形者五六人許出來、乘珍重之船一體、《以紫檀・赤木等之類造之》來着件鳥、鳥人等暫成畏怖之思、雖不近之、只有希異之容貌、未非常之所行、仍漸近寄粗言談、然而敢不返答、又或者進寄、勸以酒、于時、雖不出詞、有許容之氣、仍與酒如之間、彼鬼類等、乞弓箭等云々、島人惜而不與之、爰各大怒、以三尺許白木、《件木、自本指腰云々》打突鷦鷯人等、即時、五六人終命、殘七八人、僅雖存命、其疵太重云々、仍鷦鷯人等發人勢、帶弓箭欲射留之、鬼等敢不恐怖、自其腋出火、所耕作之畜等、悉燒失之、則乘船逐電、指南海遇云々、疑是蠻夷之類歟、緯希代也、仍粗注置之、國司付藏人右少辨親宗奏之云々、

〔古今著聞集〕卷十七 變化〇新訂増補國史大系

承安元年七月八日、伊豆國興島の濱に船一艘つきたりけり、島人とも難風に吹よせられたる舟そと思ひて行むかひて見るに、陸路より七八段ばかりへたて、舟をとめて、鬼、繩をおろして海底の石に四方をつなきて、かの鬼八人、船よりおりて海に入て、しあし有て岸のほりぬ、島人栗酒をたひければ、のみくひける事馬のことし、鬼は物いふ事なし、其かたち、身八九尺計にて、髪は夜叉のことし、身の色赤黒くて、眼まろくして猿の目のことし、皆はたか也、身に毛おひす、蒲をくみて腰にまきたり、身にはやうゝの物のかたをゑり入りたり、まはりにふくりんをかけたり、をのをの六七尺はかりなる杖をそちたりける、島人の中に弓矢持たる有けり、鬼こひけり、島人おしみければ、鬼ときをつくりて、杖をもちて、まつ弓持たるをうちころしつ、およそたるゝもの九人かうち五人は死ぬ、四人は手を負なからきたりけり、其後鬼脇より火を出しけり、島人皆ころされなすと思ひて神物の弓矢を申出して、鬼のもとへ鬼海に入て岸のものに至りてのりぬ、則風にむかひてはしりさりぬ、同十四日國解をかきて、おとしたたりける帶をして國司に奉りたりけり、件の帶は蓮花王院の寶藏におさめられるとかや、

〔百鍊抄〕第八 高倉院〇新訂増補國史大系

承安四年《○中略》

二年《○中略》七月八日、伊賀守源仲綱言上去々年七月比隱岐島鬼形出來之由、

○古今著聞集、異形ノ者、伊豆國ノ鷦鷯ニ來著ヲ承安元年七月八日トスルハ、誤リナラン、百鍊抄、伊賀守トスルハ伊豆守、隱岐島トスルハ奥ノ鷦鷯ノ誤リナラン、史料綜覽承安二年七月八日、異船、伊豆奥島ニ漂著スノ條參看、

○一一八七年（日本文治三年・宋淳熙十四年・丁未）

○九月二十二日、日本、源賴朝、中原《○宇都宮》信房ヲ鎮西ニ遣ハシ、鎮西奉行人天野遠景ト共ニ貴海島ヲ撃チ、源義顕《義經》ノ黨與ヲ搜索セシム、尋得、翌年三月五日、賴朝、信房ノ貴賀井島ニ渡リタル條々ヲ報ジ併セテ海路次第圖ヲ呈シタルヲ賞シ、五月十七日、遠景ノ使者、賴朝ニ、貴賀井島ニ渡リテ合戦シ義顕ノ黨與ヲ歸降セシメタルコトヲ報ズ、

〔吾妻鏡〕第七 文治三年丁未〇新訂増補國史大系

九月小、《○中略》廿二日、庚申、所衆信房《号宇都宮所》、爲御使下向鎮西、是天野藤内遠景、相共ニ追討貴海島ノ旨、依含嚴命也、件鳴者、古來無飛船帆之者、而平家在世時、藤内國住人阿多平権守忠景、依蒙勤勅、遂逐電于彼島之間、爲追討之、遣築後守家貞、家貞、社軍船、羅及數度、終不凌風波、空以令歸洛、云々、今度、同豫州之輩、隱居歟之由、依有御疑胎、有此儀、又去年、河邊平太通刺、到件島之由、聞食之間、殊所思食企給也云々、遠景、元來在鎮西、云々、

〔吾妻鏡〕第八 文治四年戊申〇新訂増補國史大系

二月大、《○中略》廿一日、丁亥、天野藤内遠景去月状、昨日自鎮西參著、去年窮冬、令郎從等渡貴賀井島、窺形勢、訖、令追補之條、定不、可有子細、但雖相催鎮西御家人等、不揆之間、頗以無勢、重可被下御教書、云々、所衆信房、自身可渡海之旨、殊結構、然而、遠景加制止之間、遣親類等、尤爲精兵之由裁之、此事、兼日風聞于京都、仍自執柄家、有被諷諫之旨、降伏三韓者上古事也、至末代者、非三人力之所可罩、彼鳴境者、日城太難、測其故實、爲將軍士、定有煩無益歟、宜令停止給之由云々、

《○中略》

三月大、《○中略》五日、辛丑、所衆信房、去月之比、自_レ鎮西_ニ進_シ書狀_ヲ、貴賀井鷦_ヲ渡事、條々言上、去年依_リ窺_フ得形勢_ヲ、海路次第、令_シ畫_シ圖_ヲ之_ヲ、獻覽、是可_リ爲_ル難儀_之由、諸人依_リ奉_シ諷詞_ヲ、頗難_シ思止_シ、御_レ覽彼繪圖_ニ之後、強不_可_リ瘦_シ人力_ヲ歟_之由、更思立云々、此問事、信房、殊端_ニ大功_ヲ之間、今日、所_レ被_シ加_ス賞也、《○中略》五月、《○中略》十七日、壬子、遠景已下御使等、渡_シ貴賀井鷦_ヲ、遂_シ合戰_ヲ、彼所已歸降之由、所_レ言上_シ也、而宇都宮所衆信房、殊施_シ勲功_ヲ云々、爰信房、近江國領所者、去比、被_シ付_シ非違別當家領_ヲ訖、就_シ此大功_ヲ、可_リ返給_シ歟_之由言上_シ、次_ニ鎮西庄者、成勝寺執行昌寛眼代、成_シ幼之間、召_シ昌寛返状_ヲ、難_シ下賜_シ、猶以不_可靜謐_シ、企_シ亂行_ヲ趣、訴申云々、仍彼是有_シ沙汰_ヲ、_(元)家代者依_リ爲_ル龍臣_ヲ、不_可眼_シ件庄_ヲ、可_リ止_シ地頭_ヲ之貲_ヲ、被_シ下_シ諭旨_ヲ之間、關東爭被_シ泥申_シ哉、執行眼代事者、可_リ被_シ加_ス判、但雖_ニ再三訴_シ申之_ヲ、於_ニ關東國_ヲ、不_可成_シ自由勘發_シ之由、被_シ仰云々、《○下略》、《○便宜、月ヲ以テ改行ス、》

○左兵衛尉平家貞海賊追捕ノ功ヲ賞シ、左衛門尉ト爲スコト、史料綜覽長承三五年

(一一三四年)閏十二月十二日ノ條ニ、平清盛、勅ヲ奉ジテ、追討使トシテ筑後守平家貞ヲ大宰府ニ下向セシメ、肥前國住人日向通友ヲ討ツコト、同元暦元年(一一六〇年)五月十五日ノ條ニ、入道前筑後守平家貞卒スルコト、同仁安二年(一一七七年)

五月二十八日ノ條ニ見ユルニ據リテ、家貞ノ貴海島ニ逐電シタ平忠景ヲ追討セルハ永曆元年以前、仁安二年以前ノコトナラン、

○一一六〇年ヨリ一一六七年ノ頃、平忠景、勅勘ヲ被ムリテ貴海島ニ逐電シ、平清盛、勅ヲ奉ジテ筑後守平家貞ヲ遣ハシテ追討セシムレドモテ果サザルコト、及ビ一一八六年、河瀬通綱、貴海島ニ渡ルコト、便宜合敍ス、平忠景、貴海島ニ逐電

○一一九二年(日本建久三年・紹熙三年・壬子)

○二月二十八日、日本、源賴朝、真種《氏闕ク、》ノ貴賀島ニ渡ラザルコト及ビ陸奥國追討ニ參會セザルコトノ過怠ニ據リテ、豊前國伊方莊地頭職ヲ停メ、宇都宮《中原》信房ヲ補任ス、

[佐田文書]一 源賴朝下文寫〇東京大学史料編纂所蔵影寫本

賴朝御判

(花押)

下 豊前國伊方莊住人

補_シ任地頭職_ヲ事

(中略)
前所衆中原信房

右、前地頭貞種、不_可渡_シ貴賀島_ヲ、又追_シ討奥州_之時、不_可參會_シ、依_リ此兩度過怠_シ、可_リ停_シ止_シ彼職_ヲ也、仍以_リ後房_ヲ所補任也、於限有課役者、任_シ先例_ヲ可_リ致_シ其勤_ヲ之狀、如_シ件、以下、

建久三年二月廿八日

○大日本史料建久三年二月二十八日、賴朝、豊前國伊方莊地頭貞種《氏闕ク、》ノ、貴海島、及び陸奥國ノ軍ニ會セザリシヲ責メテ、之ヲ罷メ、中原信房ヲ以テ之ニ代フ條參看、

○一二四三年(日本寛元元年・宋淳祐三年・癸卯)

○九月十七日、是ヨリ先、日本ノ僧等、肥前國小置賀島ヲ發シ、是日、流球國ニ著シ、尋_ニ二十九日、宋嶺南道福州ニ著ス、

[漂到流球國記]〇圖書寮叢刊伏見宮家九條家旧藏諸寺縁起集

寛元々年九月八日、於_ニ肥前國小置賀島_ヲ、得_シ順風_ヲ放洋、《○中略》同十七日、漂_シ到流球國東南方_ヲ、船裏諸人衆口討論、或云_ニ貴賀國_ヲ、或云_ニ南蕃國_ヲ、或云_ニ流球國_ヲ、終即皆謂_シ是流球國也、《○中略》

同二十九日、到_シ大唐嶺南道福州龍盤巖_ヲ、了、《○中略》

次年大宋淳祐四年五月廿日、長離_シ唐地_ヲ、

同六月一日、着_{本朝岸}了、
抑、龍盤嶼《似与切、海中州、》者連河縣近隣也、連河縣者、高祖大師遁_{琉球國}、着_{大唐國}之最初地也、今昔雖_異、風勢一致者歟、于₁時、寛元二年九月廿八日、夜、於_{燈下}、依_{船頭}并一兩同法說_、粗以記之、

用圖_{形狀}、遙送_{後輩}、猶如_{炭上圖}繪日輪_、

○本書、長文ナルニ據シテ、便宜、琉球本鷦_ヲ、或ハ貴賀國マタハ南蕃國カト論ジタ

ル記ノミツ揭グ、本書ニ記セル琉球國、沖繩島ニシテ、ナリ、本文ノ訓仮名、略ス、

全文ノ訓讀并ニ註解、山里純一『古代日本と南島の交流』ニアリ、

◎附記一 一二六六年ヨリ一六〇九年三月ノ奄美諸島ニ開ハル史料、『奄美諸島編年史料 古琉球期編』ニ収ム、
一三世紀ヨリ一四世紀ノ喜界島ニ開ハル條文ノ綱文、左ニ掲グ、

一二六六年是歳、大島、琉球國ニ入貢ト傳フ、

一三〇六年四月十四日、千寵時家、所職及ビ所領ヲ子女ニ譲リ渡シ、嫡子千寵貞泰ニ口五島・わさの島・鬼界島・大島_ヲ、次男千寵經家ニ沖永良部島_ヲ、三男千寵熊夜又丸ニ七島_ヲ、女子千寵ひめくまニ一期分トシテ徳之島_ヲ與フ、

稱名寺所藏日本圖及ビ妙本寺所藏雜錄所收日本圖ヲ合覈ス、

一三六三年四月十日、島津道鑑、惣領島津久ニ、薩摩國守護職及ビ同國河邊郡十二島并ニ五島ヲ譲與ス、

◎附記二 奄美諸島、硫黃島及ビ琉球ヲ記シタル七世紀ヨリ一三世紀ノ時期ノ史料、右ニ掲グル史料ノ外、日本ノ類書・軍記・物語、中国史料ニ數多アレドモ、明ラカニ東南アジア人、硫黃島マタ台灣島ヲ記セル史料等、略ス、上述シタル池邊彌、松田清、山里純一并ニ山里純一ノ史料集成參看、

結語

永山氏が論じるよう、倭寇などが遠島された鬼界が島（硫黃島）と喜界島の別称である貴海島・貴駕島は峻別されるべきである。また、山里氏が論じるように、多福・大隅・薩摩を介しての赤木・夜光貝の交易は奄美諸島が重要な資源地であった。但し、本稿では、南島の日本と中国との硫黃交易についての史料は、分量の加減もあり採録できなかった。

喜界島の城久遺跡群の形成と展開に直接に関わる史料は、上記の日本と南島の交易の拠点としての喜界島の機能を示史料と、999年の貴駕島の南蛮、12世紀中葉の平忠景の貴海島逐電と平清盛の平家貢派遣による追討、1187年～1188年の源義經一党の追捕のための源賴朝による追討使派遣の史料などであることが確認できた。この故をもって、本稿を、「城久遺跡群の歴史的評価の前提」と題した次第である。

第4節 総括

(1) 国庫補助・烟總事業調査のまとめ

前節まで触れてきたように城久遺跡群は9世紀～15世紀ごろにかけて琉球弧に大きな影響を与えた遺跡と考えられる。

出土遺物からⅠ期(9～11世紀前半)・Ⅱ期(11世紀後半～12世紀前半)・Ⅲ期(13世紀～15世紀)に細分した。

Ⅰ期の遺構は少ないが、半田口遺跡に中心があると考えられる。建物跡は2×3間で柱筋が整った建物跡が作られている。建物跡の周辺では越州窯系青磁など初期貿易陶磁器が出土しており、古代日本国家の影響下にある施設があったものと考えられる。ただし、コ字状配置など建物が規格的に配置されるような状況が確認できていないことや石帶・礎・墨書き土器などいわゆる官衙的な遺物は確認できていない。

また、やや時間が降るとこれらの建物群と同軸主軸方向で作られている建物跡が見られ、四面庇状建物跡・住居・倉庫の組み合わせが見られるようになると考えられる。

墓は大ウフ遺跡で須恵器を蔵骨器とした火葬墓が1基出土している。本土の影響を色濃く受けた墓であると考えられる。城久遺跡群で同形状の墓はこれ1基のみである。

Ⅱ期はほぼ全ての遺跡で遺構が作られる。前段階に引き続き四面庇状建物跡・住居・倉庫の組み合わせが見られるようになる。1×1間の建物跡は平面プランが方形のものが見られる。山田半田遺跡では遺跡群内で最大の四面庇状建物が建造され、遺跡群は最盛期を迎える。

墓は焼骨再葬が盛行し、白磁碗・カムイヤキ壺・ガラス玉などが副葬されるようになる。12世紀半ば頃には焼骨再葬と土葬の埋葬方法が見られ、これを境に土葬になる。なお、円形で中央付近にカムイヤキを副葬する墓はこれより先行的に出土する可能性がある。

大ウフ遺跡では製鉄・鍛冶が行われている。特に製鉄遺構が確認できた遺跡は琉球弧では他に無く、非常に重要な成果と考えられる。また、前畠遺跡では特に鉄鋳片が多く出土しており、周辺に鍛冶工房があったと推察される。

Ⅲ期は総じて標高の高い部分は使用されなくなり、標高の低い大ウフ・半田・赤連遺跡に遺構が展開する。Ⅰ・Ⅱ期ではほとんど確認できなかった溝状遺構が多数見られ、これら溝状遺構で区画した集落構造になるようである。その中には沖縄県読谷村タシーモー北方遺跡などで見られる吹出原型建物跡の母屋と類似する建物跡が見られる。1×1間の建物跡は平面プランがⅢ期に比べ著しく長方形化する状況を確認している。

墓は副葬品を持たない屈葬の土葬のみになる。屈葬にも強弱があり長方形土坑墓には緩やかな屈葬のものが多く見られる。大ウフ・半田遺跡では胸に膝がつくくらい強い屈葬で梢円形状の小さな土坑墓を確認している。

(2) 保存範囲について

城久遺跡群130,000m²の内、各時期の特に重要な部分約60,000m²を盛土保存することが出来た。それぞれの遺跡の保存範囲については以下のとおりである。

(ア) 山田半田遺跡

I期末～Ⅱ期の遺構群が良好な状態で保存されている。特に大型の四面庇状建物跡は、遺跡群の中でも最大規模であり、中心的・象徴的な遺構だったと考えられる。保存範囲にはこの建物跡と周辺の遺構群が含まれており、四面庇状建物跡・住居・倉庫・墓が良好な状態で保存されている。

(イ) 半田口遺跡

烟總事業と国庫補助事業の調査からはI～Ⅱ期にかけての施設が展開していた可能性を想定しているが、保存範囲内にも同様の遺構が保存されていることが想定される。特にⅠ期の遺構が残存している可能性がある。

(ウ) 前畠遺跡

拳大的石灰岩礫を最大長50m×幅2・4mの範囲に敷き詰めた石敷遺構が見られた範囲を保存している。遺構内部からは白磁碗IV類やカムイヤキ・石器が見られ、Ⅱ期に作られた遺構と考えられる。

(エ) 大ウフ遺跡

保存範囲内からは柱穴を多く確認している。鉄滓が多く出土している状況から、周囲にⅡ期の製鉄・鍛冶炉などの生産域が保存されている可能性が高い。

(オ) 半田遺跡

Ⅲ期の集落形態を良好に保存している。

(3) 歴史的評価

これまで兼久式土器しかなかった地域に突如越州窯系青磁や土師器が出現する城久遺跡群Ⅰ期の状況は、これらを携えた人間の移動があったものと推察される。彼らはただ単に来訪したのではなく、「キカイガシマ」が登場する文献史料などからは古代日本国家が戦略的に配置した可能性があり、Ⅰ期を形成したのは古代日本国家に関連する人々であったであろうと考えられる。ただし、官衙の遺構が見られなかつたことや遺物が少ないとからは官人が直接的・継続的に居たわけではないことが推察される。また、土師器は煮沸具ばかりで供養具が少ない様相からは南島的側面が強いことも想定され(伊藤2009・新里2010)、古代日本国家と関係を取り合つた人々によって営まれていた可能性を想定したい。

11世紀代に入ると、日本では律令制度が崩壊する。その影響は城久遺跡群まで届いていたであろうと考えられるが、白磁碗IV類・滑石製石鍋などが継続して搬入されている状況

からは、日本本土と密接な関係は続いていたものと見られる。島内にいた有力者はⅠ期に構築した交易システムを活用し、小右紀に見られるような日本本土側からの南島特産品の需要に答えていたものと見られる。

この時期、徳之島伊仙町にはカムイヤキ古窯跡群が忽然と出現する。城久遺跡群では墓の副葬に用いられるなどカムイヤキA群の一大消費地であることが伺える。カムイヤキ古窯跡は朝鮮系の技術が用いられているとされているが、城久遺跡群からは初期高麗青磁や朝鮮系無釉陶器などの韓半島産遺物が集中的に出土する状況が見られ、その成立に密接な関連性があったのではないかと推察される。

さらに、大ウフ遺跡では製鉄炉が操業される。ここでは原料から鉄を取り出し、インゴット化する作業が行われていたようである（喜教委2013）。南西諸島ではこれまでの調査でこの前後の時期の製鉄炉は見つかっていないことから、想像をたくましくすれば、城久遺跡群で生産された鉄塊が南西諸島に広く普及している可能性も考えられる。鉄器の普及は農耕の普及とともに大きく関わっていると推察でき、城久遺跡群にモノが集約する大きな求心力の一つであろうと考えられる。

こうした城久遺跡群の状況と連動するように南側には白磁・滑石製石鍋・カムイヤキが宮古・八重山地方まで広がりを見せており、一大交易圏が形成されている。このような動きが沖縄のグスク時代の幕開け・琉球文化の形成に大きな影響を与えたと推察される。

12世紀後半になると遺物量が極端に減少し、遺跡の規模が急速に縮小すると見られる。12世紀末の文字資料にはキカイガシマに逐電した阿多忠影に対し源頼朝が天野遠影に追討令を出し、翌年討伐したことが記されている。大宰府D期の遺物は琉球弧全体に少なく、この討伐が城久遺跡群の拠点機能に影響を与えた可能性が考えられる。

13世紀以降は大ウフ・半田遺跡を中心に展開している。溝状造構に周囲を開まれた。これまでより防御的な構造を持つ集落になる。これら集落の中には吹出原型建物跡の母屋に類似する建物跡があり、沖縄諸島との関係は良好であったようである。

このころの文字記録では「キカイガシマ」の用字が「貴」から「鬼」へ変わったり、南島の絶称が「龍及国」になったりと、Ⅰ・Ⅱ期に見られた本土側からのキカイガシマへの重要性は見られなくなる。

しかし、手久津久集落周辺（平成27年現在調査中）では城久Ⅲ期と類似するような集落構造が見られたり、ここ以外にも13～15世紀頃の遺物が島内でも多数表採されるようになる状況からは、琉球弧における喜界島の重要性は依然として変化がなかったものと推察される。

（4）今後の課題

平成25年の確認調査により半田口・前畑・大ウフ遺跡周辺には遺構が広がることが明らかになっており、周辺部も含

めた詳細な検討が必要である。また、城久遺跡群が琉球弧で果たした役割も今後の発掘調査成果により、より鮮明になってくるものと思われ、引き続き検討していくことが必要である。

引用・参考文献

赤司善彦 1991「朝鮮系無釉陶器の流入－高麗期を中心

として－」『九州歴史資料館研究論集』16

池田栄史編 2008「古代中世の境界領域－キカイ

ガシマの世界－』高志書院

伊藤慎二 2009「10～13世紀前後の琉球列島」

『考古学ジャーナル』591

喜界町教育委員会 2006～2011「城久遺跡」

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（8～13）

新里亮人 2003「琉球列島における窯業生産の

成立と展開」『考古学研究』第49卷第4号

新里貴之 2010「南西諸島の様相からみた喜界

島」「古代末期・日本の境界」森話社

写 真 図 版



城久遺跡群遠景



山田半田遺跡より奄美大島を望む



山田半田遺跡掘立柱建物跡集中箇所空中写真（盛土保存箇所）



半田口遺跡より東シナ海を望む



3 T（半田口遺跡）遺構検出状況



6 T（半田口遺跡）遺物検出状況



8 T（半田口遺跡隣接地）遺構検出状況



8 T（半田口遺跡隣接地）縄の羽口出土状況



前畠遺跡より百之台を望む



9 T（前畠遺跡隣接地）遺構検出作業風景



9 T（前畠遺跡隣接地）遺構検出状況



10 T（前畠遺跡隣接地）遺構検出状況（1）



10 T（前畠遺跡隣接地）遺構検出状況（2）



15 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (1)



15 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況 (2)



16 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況



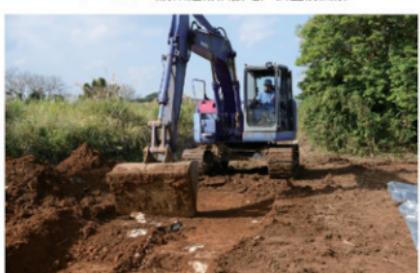
20 T (前畠遺跡隣接地) 遺構検出状況



9 ~ 15 T (前畠遺跡隣接地) 調査前風景



23 T (小八ネ遺跡隣接地) 調査風景



28 T (小八ネ遺跡隣接地) 調査風景



27 T・28 T (小八ネ遺跡隣接地) 調査風景



大ウフ遺跡より東シナ海を望む



29 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況



30 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (1)



30 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (2)



32 T (大ウフ遺跡) 遺構検出状況 (1)



32 T（大ウフ遺跡）遺構検出状況（2）



34 T（大ウフ遺跡）調査前風景



35 T（大ウフ遺跡）遺構検出状況



34 T（大ウフ遺跡）遺構検出状況



36 T（大ウフ遺跡）遺構検出状況



37 T（大ウフ遺跡隣接地）遺構検出状況



38 T（大ウフ遺跡隣接地）遺構検出状況

図版 8



半田遺跡調査前風景



41 T (半田遺跡) 遺構検出状況



41 T (半田遺跡) A～D 人骨検出状況



41 T (半田遺跡) A～C 人骨近景



竹中正巳氏人骨調査風景 (41T)



42 T・43 T (赤連遺跡) 調査前状況



43 T (赤連遺跡) 遺構検出作業状況



42 T（赤連遺跡）遺構検出状況



43 T（赤連遺跡）遺構検出状況



44 T（赤連遺跡）遺構検出状況



45 T（赤連遺跡）遺構検出状況



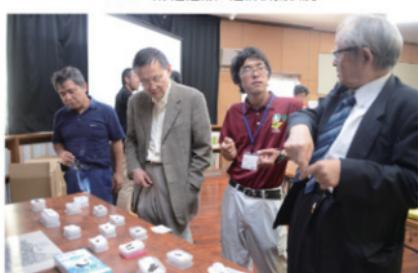
46 T～48 T（赤連遺跡）調査前風景



46 T（赤連遺跡）遺構検出状況



47 T（赤連遺跡）遺構検出状況



石上英一氏・甲元真之氏指導風景

图版 10

4T出土遗物



8T出土遗物



半田口道跡確認トレンチ出土遺物

10T出土遺物



13T出土遺物



15T出土遺物



20T出土遺物



前畠遺跡確認トレンチ出土遺物

图版 12

29T出土遺物



30T出土遺物



大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物（1）

32T出土遺物



34T出土遺物

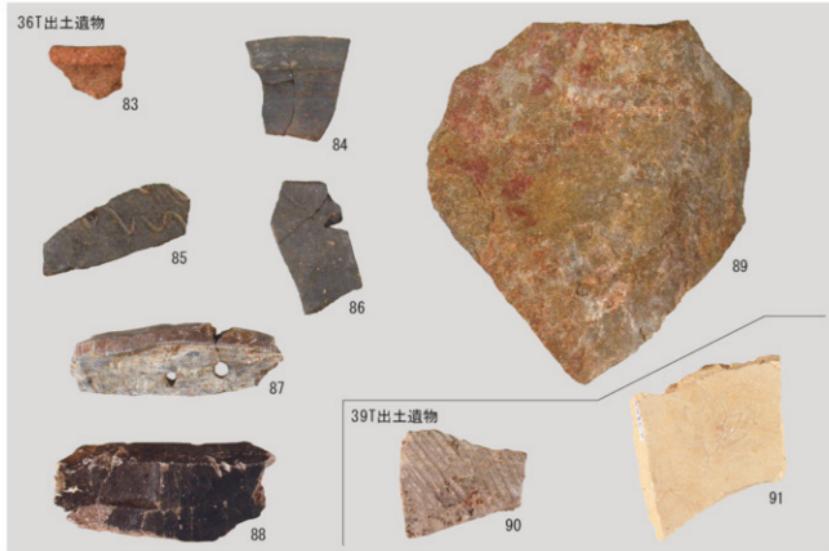


35T出土遺物

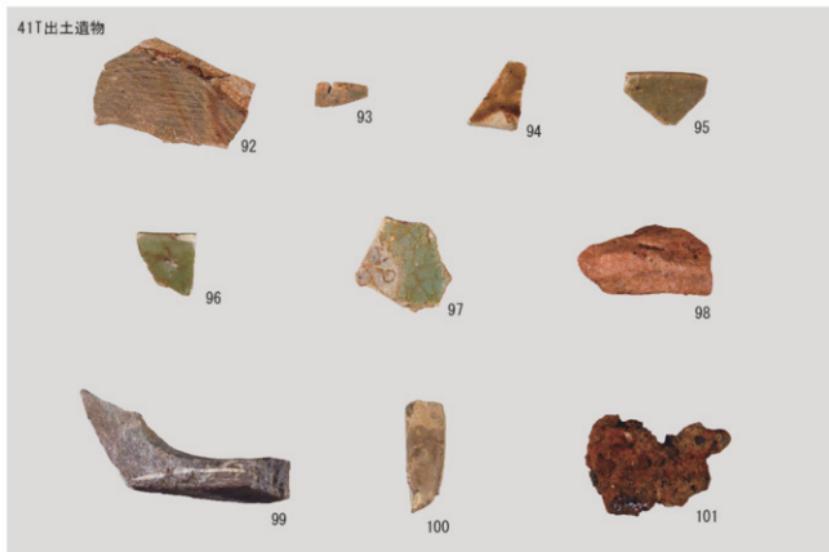


大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物（2）

図版 14



大ウフ遺跡確認トレンチ出土遺物（3）



半田遺跡確認トレンチ出土遺物

43T出土遺物



102



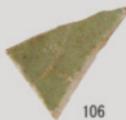
103



104



105



106



107

44T出土遺物



108



109

赤連道路確認トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぐすくいせきぐん							
書名	城久遺跡群							
副書名	総括報告書							
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	14							
編集者名	松原信之・野崎拓司・澄田直敏・早田晴樹							
編集機関	喜界町教育委員会							
所在地	〒891-6292 喜界島大島郡喜界町湊 1746							
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 20 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m	調査原因	
はんたくいせき 平田口遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 あざはんたく 字平田口	469251	37-127	28° 18' 27"	129° 58' 00"	2006.07.03 2006.12.22 2008.07.01 2009.03.23 2013.05.15 2014.03.13	1,006	試掘・確認調査 保存目的調査
こはないせき 小ハネ遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 あざこはね 字小ハネ	469251	37-123	28° 18' 34"	129° 58' 05"	2013.05.15 2014.03.13	288	試掘・確認調査 保存目的調査
まほたいせき 前畑遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字浦川 あざまほた 字前畑	469251	37-122	28° 18' 27"	129° 58' 00"	2008.07.01 2009.03.23 2013.05.15 2014.03.13	46	試掘・確認調査 保存目的調査
おおうふいせき 大ウフ遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 あざおおうふ 字大ウフ	469251	37-121	28° 18' 40"	129° 58' 00"	2006.07.03 2006.12.22 2008.07.01 2009.03.23 2013.05.15 2014.03.13	1,006	試掘・確認調査 保存目的調査
はんたくいせき 平田遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 あざはんた 字平田	469251	37-119	28° 18' 45"	129° 57' 55"	2006.07.03 ~ 2006.12.22	288	試掘・確認調査 保存目的調査
あがれいせき 赤連遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 喜界町大字城久 あざあがれん 字赤連	469251	37-70	28° 18' 40"	129° 57' 50"	2008.07.01 ~ 2009.03.23	153	試掘・確認調査 保存目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平田口遺跡	集落	古代～中世	掘立柱建物跡 11 棟、 ピット 946 基	土器類、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ 滑石製石鍋、輪の羽口				
小ハネ遺跡							遺構・遺物なし	
前畑遺跡	集落	古代～中世	土坑 5 基、ピット 59 基	土器類、須恵器、カムイヤキ、白磁 滑石製石鍋、鉄滓				
大ウフ遺跡	集落	古代～中世	掘立柱建物跡 15 棟、 土坑墓 1 基、 ピット 604 基	土器類、朝鮮系無釉陶器、カムイヤキ 白磁、龍泉窯系青磁、滑石製石鍋 輪の羽口、石器				
平田遺跡	集落	中世	土坑 7 基、ピット 91 基、土坑墓 1 基	土器類、須恵器、カムイヤキ、 龍泉窯系青磁、滑石製石鍋				
赤連遺跡	集落	中世～近世	土坑 3 基、ピット、 1 基	カムイヤキ、龍泉窯系青磁 近世陶器				
要約				城久遺跡群は山田中西・山田半田・半田II・小ハネ・前畑・大ウフ・赤連遺跡の総称である。時代は9世紀～15世紀頃で、出土遺物からI期（9～11世紀前半）、II期（11世紀後半～12世紀前半）、III期（13世紀～15世紀）に分類した。I期では越州窯系青磁などの初期貿易陶器がまとまって出土し、半田口遺跡で建物跡を検出したこと、II期では白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋が大量に出土し、遺跡群全城で遺構が展開し、山田半田跡などでは大型四面庇状建物跡が出現すること、III期では龍泉窯系青磁を中心として集落を溝で囲う構造が見られることが特徴である。これら出土遺構・遺物からは九州本土と沖縄諸島を中心とする貿易往来を示す貴重な遺跡である。				

喜界町埋蔵文化財発掘報告書（14）

城久遺跡群

—総括報告書—

発行日 2015年3月20日

編集・発行 喜界町教育委員会
〒891-6292 鹿児島県大島郡喜界町湊1746

印 刷 有限会社 奄美共同印刷
〒894-0021 鹿児島県大島郡名瀬伊津部町21-14